
最後の鴉は何を思って飛ぶ...

いつでもどこでも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の鴉は何を思っ て飛ぶ…

【Nコード】

N7323X

【作者名】

いつでもどこでも

【あらすじ】

とある世界。

その世界である男が死んだ。

秩序を重んじる企業のためではなく、

また自由を勝ち取る組織のためでもない。

お互いに笑い合える世界のために死んだ。

自らの羽にその罪を全て乗せて… …

だが、鴉は落ちる事なく再び空を舞う。

その時、鴉は何を思うのか…
…
…

注意！！

作者はラストレイヴンの話しは殆んど知りません。人づてに聞いた事があるくらいの知識しかありません。

ISにいたっては原作すら読んでません。

「設定と違うのヤダ」とか「原作遵守」っていう方にはオススメしません。

それが大丈夫な方はどうぞ。

PS：特にACファンの方々にはオススメしません。寧ろ見ない方がいいです。

ブログ 最後の鴉（前書き）

やってしまった… …

ISの作品を見てたら… …書いてしまった… …

ちなみにラストレイブンの世界観は色々とメチャクチャです。

ISの世界観もまた然りです。

それでも良いのなら見てやってくださいな。

プロローグ 最後の鴉

とある世界。

その世界である1人の男がいた。

男はその世界で最強を誇る兵器、ACを駆り、傭兵として、レイヴンとして生きてきた…

男は戦い続けた。

その類い稀なる才能と一切の妥協を許さぬ鍛練によつて 最強の傭兵 となり、敵には恐怖を、味方には畏怖をされながら…

皆は男を嫌悪し、侮蔑し、罵った。

人は男を『金の亡者』と、『金で人を殺す人でなし』と言って男を批難した。

その中傷を彼は否定せず、また肯定もせず、男はただただ戦い続けた…

男には守りたいものがあつた。

男は別に金が欲しかった訳じゃない。

不当な暴力による愛する者への生命の危機。

圧倒的弱者への一方的な暴力的危害。

それを見過ごす事はできない優しい心の持ち主だった。

だから男は守るために戦った。

皆んなから、助けた相手からも『人殺し!』と、言われながらも…

男は一人になった。

男は皆んなを守るために皆んなと戦い続け、いつしか男は一人になった。

己が権益と権力を守るために他を犠牲にする「アライアンス」と敵対し、それを打倒するために他を犠牲にする「バーテックス」とも敵対した。

2人いたレイヴンは自分一人となり、味方は誰もいなくなった。そして男はみんなを守ったその功績を 狂気の所業 と貶められ、人々から断罪されようとしていた… …

「よつこらせ、イテテテ… …」

誰もいない、ビルも何もかもが倒壊している灰色の廃墟の街の中で、俺は丁度人が1人よりかかれる瓦礫に座り込んだ。

だけどその時に脇腹の傷が開いちまった。

少し血が滲み出てきやがったぜ… …

「ふう… …これが最後のレーションか… …」

だがこの程度の傷でどうにかなる俺じゃねーんだなコレが。
俺は懷に手をのばしてレー^{保存食}ションを取り出して頬張る。

「くううう… …まつつつず!!」

相変わらず吐き気を催す程の不味さだ。

最期のメシだから精神的作用で少しはマシになるかと思ったが、寧

る最期のメシがこんなゲキ不味いものだと思うと余計にツライ。
ダメージ2割増しだな。いらねえ・・・

「やば、さっきの声で傷がかなり開いちゃった」

さっきの「まっつつず!!」で傷が開いちゃったぜ。
血がどくどくと流れてきやがった・・・

「まあ…今更そんな事気にしても仕方ねーか…」

脇腹の傷以外にも俺の体にはあちこちに傷がある。

それこそ、致命傷一步手前のものなんてザラにある。

それにもう俺は長くねえ。

見た目もそうだが中の方も相当グチャグチャになっている。

よく今まで生きてきたな俺。すこし感心。

「……………」

改めて自分が死ぬ事を思うと心が静かになる。

「アライアンス」と正面きってぶち当たったし、「バーテックス」
のジャック・Oとも正々堂々と殺りあった。

それも全て子供たちや次の世代を担う者たちのために。

結果、俺は皆んなに追われてこんなザマになっているが後悔はねえ。

別にヒーローになりたくてやった訳じゃねーし、傭兵なんて仕事選んだ時点で皆んなに恨まれるのは分かっていたことだ。

【狂気の夜】なんて通り名も付けられちゃったしな。

「そついえばお前にも色々と苦労かけたな。 【夜】： ……」

俺は目の前で俺と同じようにビルでよりかかっている真つ黒い機械に語りかける。

【夜】は俺の使うＡＣの名前だ。

俺がレイヴンとして働いた時からの仲であり、色々な苦難も一緒に乗り越えてきた相棒だ。

だが、無理に無茶を重ねてきた結果、ボディは所々穴ぼこが空き、右腕は配線コードが繋がっているだけの状態。

左腕も何とか形を保っているだけ、という、みるも無惨な状態。

「思えば色んな無茶をお前にさせてきたな．．
済まねえな。こんなだらしない相棒でよ………」

『……………』

俺は相棒に語りかけるが、勿論答える訳がない。

それでも俺は相棒が『気にするな』と言ってくれたように思えてならない。

自己満足だと思っなら言ってくれ。別に否定はしねーぜ。

「ん？とうとう来たか……」

空気中から伝わって俺の鼓膜が震える。

地面に座っている所から僅かな地響きがする。

どうやら軍用ヘリと戦車が来たみたいだな。

この感じからすると、それぞれ30機はいるな……

普段なら取るに足りない相手だが、他の人たちを省みない「ろくでなし」は俺が全部ぶっ潰した。

今の軍部はしっかりとした良識を持った人たちしかいない。

だから俺は抵抗しない。というかできない。

足の骨はキレイに折れて肋骨は半分以上が折れている。

腕の骨も折れているし、これじゃ逃げることもできない。

「それに……すこし、眠い……」

さつきから異様に睡魔が襲ってくる。

勿論これで寝てしまったら二度と目覚めない眠りなのは分かっている。

だが眠い。もうこれ以上目蓋を開ける事ができない。

「もう……限界だ……。ここが、俺の最期か……」

だが……悪くはない……。ああ……本当に悪くない、最……」

……だ……」

後悔なんてしてない。

あるとすれば救えなかった命があったこと。

俺の…、この【狂気の夜】の命を以ってしてこの世界は平和になる。
子供達が笑いあう、優しい世界へとなる。

これで…これで良いんだ…。

俺は睡魔に抗う事なく、ゆっくりと、そして静かに、二度と目覚める
ことのない眠りへ落ちていった…。

スッロン・レイヴン
こうして 最強の傭兵 であり、 ラスト・レイヴン
最後の傭兵 である彼は深い眠
りについた。

その顔はとても晴れやかで、とても満足していた表情だった。

だが、後に彼を追ってきた軍は彼の死体も、彼の機体も発見
出来なかったと上層部に報告した。

ブログ 最後の鴉（後書き）

いかがでしたか？

私は原作を読んでいないのでISの世界観も結構好い加減です。

あるとすれば他の作家さんが書いたものでなんとか理解しています。
応援よろしくお願いします。

新しい生

「ん~~~~! …… : …… : もう朝か …… :」

眩しい朝日が俺の顔めがけて差し込む中、俺は気だるい雰囲気を出しながらも目を覚ました。ボサボサの髪は適当に手ぐしで整え、体をグツと伸ばして体の中にある眠気を追い出す。

(…… : …… : そろそろ髪切るか …… : …… :)

結構長くなってきた髪の毛を掴んで、そんな事を考えながら俺は一階に降りた。

~~~~~

「おはよう …… : …… :」

一階に降りて、リビングまできた俺は朝の挨拶を言う。だが、その挨拶を返してくれる人は誰もいない。まあ、そんな事は分かっているから俺は気にしない。

俺はそのまま台所に向かい、炊飯器の保温機能を切り、冷蔵庫から

卵を取り出して卵焼きを作る準備をする。

その間に残ってある味噌汁を火にかけて、ご飯をよそう。

あとは卵焼きを作って、温めた味噌汁もよそってはい出来上がり。  
俺の朝メシはあっという間に完成。

その後リビングに戻って俺は朝メシを食べた。  
勿論ちゃんと「いただきます」と挨拶したぜ。

誰も返してこないがな…

「…うん、今日も上々の出来だ」

俺は自分の作った料理に自分で評価しながらメシを食った。

お、今日の卵焼きは一段と美味いな。

あいつらにも食わしてやるか…

~~~~~

朝メシが終わったあと、俺は洗面台に立って身なりの確認をする。
と言っても寝癖を直すだけなんだけどな。

「……………」

寝癖を直し終わったあと、俺は自分の顔を見る。
日本人特有の黒い髪。キリッとした目付き。

幼なさはまだまだ残っているが、その顔は前世の俺の顔と同じだった。

そつ、みんなはとくに分かっていたと思うが、俺はあの時に死んだはずの男だ。

前世の名前は思い出せねーが、今は真鴉まがらす 黒羽くろはつつ名前なまえで生きてる。

なんでこんな形で生まれ変わってるのか俺にも全く分からねえんだわ、コレが。

あの時強烈な眠気に誘われて眠っちまったんだが、気が付いた時には子供になっていたんだよ。

あ、ちなみに両親はいねえ。

なんでも俺は捨て子だよ。

まあ悲しくはなかったし、俺には知ったこっちゃねえからな。

伊達に前世じゃ三十路ギリギリなんだからな。

で、俺は神社の前に捨てられてたらしく、神主さんが俺を引き取ってくれたんだ。

最初是一緒の家に住んでいたんだが、そこはアレだ。所謂“多感なお年頃”ってやつで別宅で1人ですんでいる。

ん？さつき三十路ギリギリって言ってたのに多感なお年頃は可笑しいんじゃないかって？

分かってないなあ。前世は前世。今世は今世だ。

詭弁だつて？何とでも言え。

まあ、俺の事についてはそんな所だ。
にしてもこの世界はスゲえぜ。

前世の俺がいた世界とは全く違う。

賑わう人々。生い茂る草木。当たり前のように飲める水。

そのどれもが俺のいた世界とは真逆。

いい世界だ…俺が命を捨てても成したかった世界がここにはある。
俺のいた世界も長い長い時間をかければこんな世界になんのかな…

…

「………つていけねえ！」

もうこんな時間が、早くしねえと遅れちまう！」

ふう、ついつい考え込みしまったぜ。

今日は道場に行かなきゃいけないんだ。

俺の幼馴染達が剣道やっててよ。それに俺も付き合ってるんだわ。
レイヴンだった頃の俺はブレード主力の戦法だったからな。

ブレードでACを破壊するのは勿論、爆撃機を斬ったりもした、
それに比例して俺自身の剣の腕も相当なもんになった。

ちなみに俺も射撃はできるがあまり好きじゃないから滅多な事では
使わなかった。

「さてと、準備は出来たし、さつさと向かいますか」

時間はまだ全然ある。これなら歩いて行っても大丈夫だ。

幸い、この家と道場は歩いて十分もかからない程の距離なんだ。

俺は荷物を持ち、鍵をかけて、道場に向かった。

つと、卵焼き… ……

まずいますい。卵焼きを忘れてしまった。

~~~~~

「よお、待ったか？」

時間には間に合ったんだが既に2人は来ていた。  
俺は2人に声をかける。

「あ、黒兄。全然待ってないよ」

「今日もよろしくお願いします！ 師匠！」

答えたのは1人の男の子と女の子。

男の子は気楽な感じで手を振り。

もう1人の女の子はガバツと頭を下げる。

手を振る男の子の名前は織斑一夏。

俺と同じ捨て子で姉弟2人で暮らしている

頭を下げる女の子の名前は篠ノ之 箒。

俺を拾ってくれた神主さんの娘さんの1人。



こつちにも姉が1人いる。  
ちなみに箒は一夏に惚れてるんだぜ。  
いいねえ、青春だねえ。

「一夏。俺を黒兄と呼ぶな。俺とお前は同い年じゃねーか。  
それに箒。お前も俺を師匠と呼ぶな。  
むず痒くてかなわねー」

だがこの2人は俺の事を黒兄と師匠と呼ぶ。  
まあ前世の記憶持つてるから他の奴らより大人びているのは認める  
が同い年である以上あまり呼んでほしくない。  
箒の方も以前俺が剣道を教えた時に目を輝かせて「師匠！」と呼ぶ  
ようになった。

俺は師匠なんてガラじゃねーからムズ痒いんだ。

「うん、わかった黒兄」

「で、でも師匠に教えてもらってから格段に強くなりましたし…。  
だから師匠は師匠なんです」

一夏、あとで殴る。

それと箒。俺の剣は人を殺す剣であってお前達のような剣ではない。  
だから俺を師匠と仰がないでくれ。

「ふう…分かった。今日のところは一先ず許す。」

だが、これ以降はあまり呼ぶなよ」

まあ、いつか時間が解決してくれるか。

2人も成長したら俺を黒兄や師匠と呼ばなくなるだろう。

「さて、んじゃ早速やりますか。

はいはい2人とも所定の位置に着いて」

手をパンパンと叩きながら、俺は2人を道場の中央に誘う。  
2人を打ち合わせ、それを見た俺が改善点を2人に教える。  
これが俺の指導の仕方だ。

俺の剣は邪道だからな。そんなもんを教えたら2人の剣の型が崩れちまう。

それだと本末転倒だろ？

「よし、それじゃあ2人とも… …始め!!」

「「ツツ!!」」

俺の声を合図に2人は飛び出した。

それからはお互いに竹刀の小気味好い音を響かせながら存分に打ち合った。

うんうん。2人の年を考えれば相当に上手いな。まあ、年を考えれば、だけどね。

~~~~~

「2人ともそこまで!!」

それから約一時間程、俺の合図によって2人の剣戟は終わった。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「ふう……ふう……ふう……ふう……」

終わるや否や、2人は床に座り込んで肩で息をする。
全くこの程度で情けない。2人とも鍛錬が足りないな。

「休んでる暇はないぞ。」

早速2人に改善点を教えるからすぐに立つんだ」

「お……鬼……」

「師匠……き、厳しいです……」

「何を言っただ。2人とも鍛錬が足りないからそんなザマになるんだ。」

それに無駄な動きも多すぎる。
それを教えるから早く立て」

渋る2人を俺は無理矢理立たせる。
本当に鬼だつて？なんとも言え。

2人は俺には「強くなりたい！」って言ったんだぜ？
こんなんで音を上げるような生半可な覚悟はドブにでも捨てちまいな。

2人が強くなりたいなら俺は鬼にでも悪魔にでもなるぜ。

「まずは一夏からだな。

体捌きや足捌きはこの前より良くなっている。
そのまま技術の向上を目指すように」

「はい！」

「だが、お前は剣の部分だけを見過ぎだ。

剣ばかり見てて簞の攻撃に対応できてない所が多々あった。
最初の頃は難しいが、もっと全体を見るように心掛ける。
そうすれば剣だろうが銃弾だろうが余裕で避けられる」

「じゅ、銃弾はさすがに無理………」

何を言うか。

鉛弾やエネルギー弾。はてはグレネードランチャーまで飛んでくる
弾雨の嵐が押し寄せる……

俺はそんな世界で生き残ってきたんだぞ。

銃なんて指の動きを見れば普通に避けられるぞ。

無理なら死ぬだけだな。

「次に筭。」

一夏程ではないが、体捌きや足捌きは良くなってきた。

それに、段々とだが全体を見る事に慣れだしている。

このまま相手全体を見る事が出来るように目指すんだ」

「ありがとうございます！師匠！」

「だが力みすぎだ。」

男の一夏に張り合おうとする気持ちは分かるが、力みすぎで逆に威力がない。

力を入れるのは相手を斬る時のほんの一瞬でいい。

それ以外は力を抜け。力を抜けば抜く程、剣の一撃は鋭くなり重くなる。

その気になれば鉄塊をも斬る事が出来るぞ」

「し、師匠……鉄塊はいくらなんでも………」

そうかな？

さすがに竹刀では無理だが、本物の刀なら斬れるぜ？

竹刀だと木板が限界だな。

「ま、鍛錬を続ければその内分かるさ。

よし、俺が少し手本を見せちゃう」

そう言っただけ俺は竹刀袋から竹刀を取り出す。

だが竹刀の長さは2人の持つ竹刀より遥かに長く、全体の長さは150cm程で今の俺の身長と同じくらいの長さを誇っている。

「わあ！黒兄が竹刀をとった！」

「久しぶりに見ます！」

それだけなのに2人は目を輝かせている。

そう言えば2人には俺が竹刀を持っている姿はあまり見せていなかったな。

「ほらほら、2人とも危ないから離れていろ。
当たっても知らんぞ」

2人を道場の壁際の座らせて俺は精神を集中させる。

深く息を吸って、吐いて、一回…二回……三回……。

身体中に酸素が行き渡り筋肉の緊張がほぐれる。

自分の筋肉が液体のようにドロドロになる錯覚を覚える。

よしよし。いい感じだ。

これで

ッッ

「
せいっ！…！」

光芒一閃

ドロドロになった俺の筋肉は光を超える速さで一本一本の筋に戻り、俺の足は爆弾が爆ぜたように一瞬で踏み込む。頭から振り下ろす竹刀は鋭い風切り音と共に床に着く。そしてその後に残ったのは一切の音が存在すること許さぬ静寂だった。

「す… …… すごい… ……」

「… …… …… (くくくく)」

唯一この静寂の世界で声を発する一夏は俺の動きを見て感嘆の声を漏らし、

箒にいたっては声も発する事ができず、首をこくこくと縦に振って一夏の言葉を肯定する。

その姿を見て思わずカワイイと思ってしまった。

いまロリコンだと思ったやつ、

自宅にコジマ粒子を送りつけてやる…。

もちろん着払いだ。安心しろ。

「とまあ、こんな感じだ。何か質問はあるか？」

「すごいよ黒兄！ロじゃあ上手く説明できないけど、とにかくすごいえ！…！」

「一瞬、師匠の動きが見えなくなりました… ……」

一夏は直感的に俺の技術の本質を見抜いたらしいな。

箒は一部分だけだが俺の動きが見えたのか。

2人とも剣の才能なら俺と同等、若しくはそれ以上だな。

未恐ろしい2人だぜ……。

だが、まだまだ負けるつもりはねえがな。

「まあ、しっかりと鍛錬すればこれくら

ッ!？」

殺気っ!!

「ふんっ!!」

「シッ!!」

突如俺の頭目掛けて振るわれた竹刀を俺は横薙ぎに払って弾く。

「ちっ…惜しかったな…」

襲撃者はすぐさま後ろに飛び退いて俺の剣の射程から離脱する。
舌打ちしながら俺を睨む襲撃者の正体は…

「はあ…また貴女ですか…千冬さん」

長い黒髪をなびかせ、10人中10人が美人と言っだろう美しい顔立ち。

一夏のただ1人の肉親にして姉の織斑　千冬さん。

ちなみに精神年齢では俺の方が圧倒的に上だが、肉体年齢では千冬さんの方が上なので“さん”を付けている。
今では敬語も普通に使えるんだぜ。

「やはり黒羽を討ち取るのは一筋縄ではいかんな……」

「いきなり死角から襲われる俺の気持ちを考えて欲しいんですが……」

一回千冬さんに剣を教えた時に、その延長線上で模擬戦をしたんだが、その時に俺が勝っちゃってよ。

それ以来千冬さんは対抗心を燃やして俺に仕掛けてくるんだわ。
毎回毎回死角から襲われる俺の気持ちを考えて欲しいぜ……

「断わる」

わお……見事な即答。

中断構え

千冬さんは正眼の構えで俺を見据える。

そしてお互いに相手を見据えて数分。

千冬さんが動いた。

「はあっ!!」

「ふっ」

千冬さんは俺の胴体目掛けて竹刀を振るう。
俺は縦に斬り上げてその斬撃を弾く。

「くっ!」

「そこ!!」

竹刀を弾かれて隙が生まれた所に俺は竹刀を振り下ろす。
これが俺の戦い方。
長い得物によって相手より長い間合いを誇り、その間合いに入ってきた相手の得物を弾き、その弾かれた隙を斬る。
俺が前世で培った、あの混乱とした世界で生き残るために編み出した俺だけの技。

「この…程度で!!」

「うおっ!?!」

だが千冬さんはその決定的な隙を円を描くような綺麗な足捌きで覆す。

そのまま回転の力を利用して俺に逆袈裟斬りを放つが、俺はすぐさ

ま後ろに飛んで回避する。

まさか自分の剣を届かせるために、敢えて退かずに向かってくるとはな……

やっぱり千冬さんはスゲえな。

ちよつと驚いたぜ。

「危ない危ない……。もうちよつとで一撃もらう所だった……」

「ふん。そんな余裕の表情でよくいう。

この程度の攻撃……。お前なら造作もなく躲せるだろう」

それは買い被りつてやつだぜ。

今の攻撃はそれなりに焦ったんだぜ。

千冬さんの才能は本当に凄い。

あれは俺よりもあるな。あと十年もしたら追い抜かれるんじゃないか？

「そこまで過大評価しないでください。

それにしても千冬さんは日に日に強くなってきましたね。

どれ、俺もちよつとだけ本気を出しますか」

でも、一夏も筈もそうだが、千冬さんにも負けてやるつもり毛頭ない。

今はまだ俺が最強を名乗らせてもらう。

俺は自分の中にあるスイッチを入れた。

「　　っ！！」

俺の雰囲気が変わった事に気付いたのか、千冬さんは表情を一層険しくする。

だが、こうなっちまった俺は並大抵の事じゃ止まらねえぜ？

「出来るだけ長く持ち堪えるんだ　　。
せいっ！　　はっ！！」

俺は瞬時に千冬さんを俺の間合いに入れて斬撃を繰り出す。
その数は2つ。一息の内に左右から2つの斬撃が千冬さんを襲う。

「くっ！　　…このっ　　…」

ほお…、あれを防ぐか…　　。さすが千冬さんだ。
なら、これならどうだ？

「そら、まだまだ行くぞ　　。
シッ！　　ふんっ！　　どらっ！！」

今度の斬撃はその数を増やして3つ。
袈裟斬り、胴斬り、逆袈裟斬りの順番で千冬さんに襲いかかる。

「っ！… …まだまだ！… … あっ！？」

だが、最後の逆袈裟斬りを受ける時に千冬さんの手から竹刀が弾き出された。

まあ、あれだけの攻撃を受けたら手の力も保たんわな。逆によく堪えた方だ。

「… …これで終わりですね」

「ああ…、私の負けだ」

切先を千冬さんに向けて試合終了。

こうして俺と千冬さんの戦いは幕を閉じた。

~~~~~

千冬さんとの試合が終わったあと、俺たちは仲良く4人でわいわいやっていた。

「千冬姉もすごかったけど黒兄もすごいな！

途中から竹刀が見えなかったぜ!!」

「すごいです師匠!!」

2人は目をキラキラさせながら俺を見つめる。  
ヤメろヤメろ……。…。

そんな真っ直ぐな眼差しを向けないでくれ。  
眩しすぎるぜ。

「本当に黒羽は強いな。  
後半は手も足も出なかったぞ」

千冬さんは俺の事を褒めてくれる。  
こんな美人さんに褒められると少し照れるな…。

「千冬さんだつて強いじゃないですか。  
最近はメキメキと上達してきましたし、あと十年もしたら追い抜かれますよ」

「それは嬉しいことを言ってくれ。  
これも優秀な師匠がいたからこそだな。  
なあ、師匠？」

千冬さんはそう言って意地悪そうな笑みを浮かべる。  
この人、俺が師匠と呼ばれるのがイヤなの知ってて言うてくるんだ

もんなあ……。

「やめて下さいよ。」

別に、俺はただ「力を抜け」と「相手の全体を見る」としか言つてませんよ。

師匠らしい事はしてません」

「だが、お前の指摘があつたからこそ私はここまで強くなつたんだ。まだまだ黒羽には勝てないがな。」

お前には本当に感謝している。ありがとう」

飾り気のない言葉で千冬さんは感謝の言葉を言う。

その純粋な笑顔と真っ直ぐな瞳に思わず見惚れてしまった。

「ゴホンッゴホンッ!!」

話しはそれくらいにして。

今日の朝メシで卵焼きが上手く焼けたんだ。  
皆んなで食べよう」

「本当!?!」

「師匠の料理だ!!」

顔が紅潮しているのがバレないように咄嗟に話題を変える。

幸い2人はこの話題にすぐ釣れた。

だけど千冬さんだけは「むう」と頬を膨らまして不機嫌な声を出す。

くそ。可愛いじゃねーかコンチクショウ。

「それじゃいただきます！」

「あ、コラ！ズルいぞ一夏！」

そんな俺の葛藤も知らずに2人は卵焼きをパクつく。  
呑気でいいなあゝ…

「ほら、千冬さんも…」

俺はなんとか千冬さんの機嫌を直してもらったために卵焼きを千冬さんに差し出す。

「ああ…。いただく」

千冬さんもただどくではあるが卵焼き掴んで口へと運ぶ。

「…美味い」

短く、それでいて確かな言葉が聞こえた。  
よかった。これで「不味い」なんて言われたらトラウマもんだぜ。



「お前は本当に料理が上手いな。  
見かけによらず、意外な特技だな」

「一人暮らししてますから。  
それに“見かけによらず”は余計です」

そんな軽口を言い合いながらも楽しく時間は過ぎ去っていく。

筈だった

「クウウウ口くうううん！！！」

「うげえええええ！？」

突如ウサ耳が現れた。

比喩なんかじゃなく本当にウサ耳を付けた奴が現れた。

しかも俺の鳩尾に向かってヘッドダイビングしながら飛来してきや  
がった……。

マジで痛ええ… …

「超天才美少女。束ちゃん参上!!」

俺の鳩尾に飛来してきたウサ耳は俺の事などなんも気にせずに、まるで特撮ヒーローの登場シーンをマネするように叫ぶ。

こいつの名前は篠ノ之 束。

篝の姉にして生粋の天才…もとい天災であり、自分の興味のないものには何処までも無関心になる人格破綻者。  
まあ俺からしたらただの変態だ。

ちなみにこいつは千冬さんと同じ年だが俺はこいつにだけは敬語は使わねえ。

「あ、クロくん今失礼な事考えているでしょ？」

「別に、俺はド変態がやってきたなあって思ったのと、俺の鳩尾に激突してきたこの痴女を今すぐにでも斬りたいと思っただけだ」

「はっ!? 変態って呼ばれた! その後に痴女とか言われた!」

「安心しろ、他意はない」

「ううう…。ちーちゃん…。…。クロくんがいぢめるよおお…。反抗期だよおお…。…」

そんな事を宣いながら千冬さんに泣きつく。  
のたま

分かったと思うが俺はこいつがキライだ。

こいつは色々な発明をしているんだが、その狂気の産物をよく俺に試す。

なんでも俺が「他の人より頑丈だから」っていう理由でこつちとしては勘弁してもらいたい。

「で、お前は どうしてここに来た？」

千冬さんは束の目的を聞いたです。  
もしまたよく分からんもんを俺に試そうとするのなら斬る。

「うんとね、それはね。」

クロくんの手料理の匂いがしたから駆けつけてきたの」

「  
チッ」

「なんか舌打ちが聞こえた!？」

「碌でもない用件だったら斬ろうと思ったただけだ。

惜しい……」

「なんか平然とクロくんが怖いこと言ってるよおお……」

束はヨヨヨと言いながら泣く。まあ嘘泣きだけどな。皆んなも馴れたもんで華麗にスルーする。

「まあ、俺の料理を美味しいと言ってくれるのは素直に嬉しいからなほら、食えよ。そしてさっさと研究に戻れ」

好い加減このやり取りも飽きたので東にも卵焼きを差し出す。  
東は俺を色んな騒動に巻き込んでキライだが、嫌いじゃねえ。  
俺もなに言ってるかわからねえが、キライと嫌い。この違いをみんなは分かってくれると俺は信じている。

「わーい ぶつきらぼうだけど優しいクロくんは東ちゃんは大好きだよ」

表情を180°一変させて東も俺の卵焼きをパクつく。  
そつえばこの中で俺の料理を一番楽しみにしてるのって、よく見たら東なんだよな……  
今度なんか作ってやつか。

「やつぱりクロくんの料理は世界一だね。  
さっすが東ちゃんのお婿さん」

「は？」

いきなりなに言い出すんだこいつは？  
ま、こいつの言う事だから冗談にきまつ

「な！？ななな、何を言い出すんだ東！！」

で、何故に千冬さんが慌てるし…

「あつれ〜？なんでちーちゃんはそんなに慌ててるのかな？  
なんでかな？なんでかな？」

「ぐっ… …そ、それは… …」

千冬さん…俺をチラチラと見ないでください。  
俺に一体どうしろと？

「もしかして、ちーちゃんもクロくんの事が好きなの？」

「なっ！？」

「だあああああ！！その口封じてやる！！」

束の突拍子もない妄言に俺も動揺した。

ち、千冬さんが俺の事… …んな訳ねえ！

第一。俺なんか千冬さんと釣り合う訳ねえじゃねえか！！



~~~~~黒羽の訓練~~~~~  
私刑

「そらそらどうしたあ!!」

防ぐばかりじゃ勝てねえぞおお!!」

「ちよつ…無理無理!!」

竹刀が見えな　　あああ!!竹刀が切られたあああ!?

黒兄ストップ!ストオオオッブ!!」

「ん~~~~~?」

何言ってるか聞こえないな~~~~~?

おらおらあ!!休んでる暇なんかないぞおお!!!

死にたくなかったら馬車馬のように走れええ!!」

「ひっ!?黒兄!防具に切れ目入ってる!!切れ目入ってるよ!?
これ死ぬ!これ死ぬって!!」

「人は死んで初めて己とはなにかについて答えを見つけられるんだ
よおお!!!!」

「イヤだよ!まだ小3でそんな答え見つけたくないよ!!
できれば60歳からその答えを見つけないよ!!」

「誰が口答えしていいって言ったああああ!!!!」

「いまさらあああああああああ!?!」

~~~~~  
私刑 訓練終了~~~~~

「あ~~~~~。スッキリした~~~~」

一夏との訓練が終わってなんだかスッキリしたぜ。

ん？一夏か？一夏なら床でピクピクしながらなんか「あ~~~~」…」  
とか言ってるぞ。

死んでないし大丈夫だろ。

一夏も存外に頑丈になったな。

今度から束の実験台は一夏にさせっかな…

「お、黒羽も終わったのか…」

どうやら束の制裁も終わったようだな。

束も床で這いつくばり「プスプス…」と湯気が登っている。

「千冬さん…良い仕事してますね」

「ふ…お前もな」

俺たちはお互いに拳をコツンと当てる。

なにかお互いに共有できるものがあると感じた瞬間だった。

「さてと、そろそろ戻るか」



「そうですね」

そして俺たちは道場を出て朝の訓練を終えた  
いまだ床に転がっている存在を放置して…  
…

ちなみにアノ2人は箒が残って甲斐甲斐しく世話をしていたらしい。

## 狂気の夜

あれから約4年の月日が経ち、俺たちは中学生となった。  
え？いきなり飛ばしすぎだった？

だって仕方ねーじゃん。

変わった事があるとしたら、束が世界を変えるような大発明をした。  
その束が行方不明になった。

そして篠ノ之家は一家離散してしまった。

その時に中国から留学生が来た。名前は凰 鈴音。

そして一夏が鈴のフラグを建設した。

とまあ、変わった所はそんだけだ。

ん？多過ぎるじゃねーかって？

仕方ねーな。じゃあ1つだけ、束の発明したやつを説明しよう。

正式名称 インフィニット・ストラトス

略式名称 IS それが束の発明したもんの名前だ。

現行兵器を圧倒的に凌駕する性能を持つ、今や世界最強の兵器だ。

ここまでの説明だと、前の世界の AC を思い出すな。

アレも俺の世界じゃ最強の兵器だったしな。

つと、話しがずれたな。

だが、このISには1つだけ問題があった。

ISは女性にしか反応しないのだ。

今や世界の中核であり要であるIS。

そして、そのISは女性にしか反応しない。

世はまさに男尊女卑ならぬ女尊男卑の世界へと変わってしまった。

おかげでこっちはいい迷惑だぜ。

今や“女性”というだけでISにすら乗れない女性も威張ってきや

がった。

なんか…こういうのは嫌いだ。

努力すらない奴が偉いなんて到底納得できない。

それが許されるのは子供だけだ。

ああいう奴等を見てると前の世界の「ろくでなし共」を思い出す。

「黒羽：少し殺気を抑えてくれ。  
息苦しくて堪らない」

おっと、つい殺気がにじみ出ちゃったみたいだ。  
ちなみに俺の隣にいるのは織斑 一夏。

ようやくコイツも俺を黒兄と呼ぶのをやめてくれた。

あの時は嬉しくて試合中に一夏の防具を真つ二つに斬っちゃった。  
あと数cmズレていたら一夏が死んでいたな…

「おっと、済まん済まん。  
少し考え事をしてな。つい……」

一夏に指摘されてすぐに殺気を収めた。

俺の殺気から開放されて一夏の呼吸も大分楽になる。

「…黒羽の考え事は一々殺気を出すものなのか？  
その殺気を受ける俺の気持ちの事も考えてくれよ……」

「だから済まんって言ってるだろ。」

それに、この程度の殺気で狼狽えるな。  
俺の本気の殺気はこんなもんじゃすまねえぞ」

「マジかよ………」

「マジだ。本気と書いてマジだ」

全く、一夏は口も達者になってきたな。

それにこんなシヨボい殺気を受けたくらいで情けない……

あ、そっか。一夏はあまり殺気を受けた経験が無いんだよな。

「一夏…帰ったら殺気に馴れる訓練をしような」

「げっ………」

「なんだ？そのあからさまな嫌そうな表情。

まあ、別にお前が嫌ならしないがな。強制はしないさ。

お前の“強くなりたい”と言った言葉が嘘ならな」

「…それを言われたら断れないの知ってるだろ……

でもやるさ。確かにイヤだけど、嫌ではないさ」

「よし、素直でよろしい」

そんな話を話しながら、俺達は空港のロビーを出た。

あ、言い忘れてたが俺達は今ドイツにいる。

なんでも、IS同士で競うISの世界大会。【モンド・グロッソ】

が、ここドイツで行われることになったんだ。

出るのは勿論、織斑 千冬さん。

ちなみにこのモンド・グロッソはこれで二回目で、第一回のチャンピオンは千冬さん。

ここで優勝すれば二連覇の大偉業だ。

やっぱり千冬さんはスゲえぜ。

千冬さんはブレード一本で世界一の座に登りつめたんだから。

ブレード一本で最強のレイヴンにのし上がった俺を思い出して少し懐かしかったなあ…

…

「さてと、会場は… … あっちか」

会場を見つけるために周りを見渡すと、会場はすぐに見つかった。

野球場を遥かに超える大きさ。

沢山の人が押し寄せ長蛇の列を作っている。

ここが第二回モンド・グロッソの試合会場。

「ほら、さつさと行くぞ一夏。

もし遅れたら千冬さんに怒られる。

お前が怒られるのは別にいいが、俺が怒られるのは困る」

「うわ、サラッとヒドイこと言いやがる」

そんな軽口を言い合いながら俺達は会場へと向かった。

ちなみに俺達は出場選手の親類って事で別口から入れてもらえた。

いやゝ。さすがに俺もあの長蛇の列に混ざりたくなかったから並ば

ずに済んで良かったぜ。

~~~~~

「いや、スゴかったな、千冬さん。」

俺は千冬さんの試合が終わったあとにそう呟いた。

いや、本当にスゴいんだわコレが。

今まで千冬さんの試合はTV中継とかでしか見れなかったんだけど、実際に見てみるとより一層スゴイ。

一機無双

まさにこの言葉がしっくりくる。

他を全く寄せ付けない無類の強さ。

ブレードたった一本で銃器を打ち破る。

その姿は前の俺が戦っていた姿と同じだった。

いや、前の俺は色々と泥くさい戦いをやっていたからそれ以上だな。

「だな。本当に千冬姉はスゴいよ。自慢の姉さんだ」

一夏も俺の言葉に肯定して「うんうん」と言っている。

たった今、準決勝が終わって休憩中。

あと2、30分もしたら決勝戦だ。

相手の方も一応見ていたが、このまま行けばまず間違いなく千冬さ

んが勝つな。

そうすれば世界大会二連覇だ。

「あ、今の内になにか、つまめるもんでも買つか。
黒羽、お前は何かいい？」

「お、悪いな。それじゃあホットドック。それとコーラ」

「あいよ」

そう言つて一夏は売店の方に行つた。

まあ、注文は全部ボタンを押せば頼めるし、言葉も21カ国に対応しているから一夏でも買えるだろう。

にしてもこの会場も中々にスゴいよなあ…

設備は全て現行の最新設備を設置しているし、試合映像は立体映像で投影される。

それに売店の規模もかなりデカイし、ポップコーンから始まりケバブ。

果ては寿司も取り扱っている。

その取り扱っている商品数の多さに沢山のお客が集まっている。

ほら、そう言っている内にまた1人、ポロシャツを着たおっさんも売店に　　ッ！？

おかしい…

いま俺の後ろを通り過ぎたおっさんはあまりにおかし過ぎる…
おっさんが俺の後ろを通り過ぎる瞬間。

その一瞬の間に様々な情報が俺の中に入ってきた。

明らかに異常すぎる鉄の匂い。

おそらくは刃渡り20cm程のナイフ。

それに鉛の匂いと一般人じゃ絶対にしねえ火薬の匂い。

それから察するには拳銃。

最初は軍人かと思ったが歩き方や構えが荒すぎる。

このおっさん

真つ当な人間じゃねえっ

放置するのはあまりに危険。

この会場には大勢の観客達がいる。

そんな所で乱射事件なんて起こしてみろ。

あつという間に地獄絵図の完成だ。

俺はおっさんに気付かれないように少し離れたところで尾行していた。

~~~~~

俺が尾行を開始してから6分。

ついにおっさんが動いた。

クソったれな事におっさんの目的は一夏だった。

おっさんは一夏を呼び止めて人気のない場所まで誘導して睡眠薬が  
なんかの薬を嗅がせて一夏を眠らせた後、そのまま黒いワゴン車で  
トンスラこきやがった。

俺は人ごみで上手く動く事が出来ず、誘拐を阻止できなかった。

「クソが！こんな事なら一夏に人を見極める訓練をしとけばよかった！！」

だがそんな事を言っても現状は変わらない。

今は“たら・れば”を言うよりも一夏を助けなければ！！

一夏を誘拐した理由はおそらく千冬さんの大会二連覇を阻止するた

め。

この世界大会で優勝した国は他国よりも大きなアドバンテージを得る事になる。

なにせ今はISが中心で世界が回っていると言っても過言ではないからな。

そして千冬さんが大会を二連覇すれば日本は強大なアドバンテージを誇る事になる。

それを快く思わない国はごまんという。

だから唯一の肉親である一夏を誘拐して決勝戦を棄権させるつもりなんだろう。

「だが、そんな事はさせねえ… …」

一夏を助けて千冬さんの名誉も守る。

なにより俺の大切な家族を傷付ける事は何があっても俺が許さねえ

… …

そのためなら俺は【狂気の夜】として敵を殺す。

そもそも俺の業はそのためにあるんだ。

「さあ… …行くぜ… …」

俺は心を絶対零度の冷徹さに変えて、家族を傷付ける奴等を塵殺するため、街中を驚異的な速さで駆け抜け車を追った。

~~~~~

「此処か… ……」

ワゴン車を追ってみれば、会場から少し離れた廃倉庫についた。
最初は追い付けるかどうか不安だったが、この世界大会のおかげで
沢山の車も押し寄せて軽い渋滞状態になっていて思いのほか楽に追
跡できた。

「人数は… ……外に4人…中に6…7… ……8人の計12人か…
…」

俺は地面に耳を当て、その響きから人数を割り出す。

これも前の世界で培ってきた技術だ。

AC乗りにとって…特に有名なAC乗りにとって最も怖いのがAC
に乗る前の襲撃だ。

如何にACを巧く操ってもACに乗らなければただの人間。

かく言う俺も数えるのが億劫になるくらい襲撃を受けた。

それにACじゃ活動出来ないような所でミッションもやっていたし
な。

これくらい出来て当たり前だ。

「さてと… ……1人を殺してからチンタラしてると中にいる奴等に
怪しまれて一夏が危険になる。

まずは1人。そのあと速攻で他の奴等も片付ける」

見た感じ、常に無線でお互いを確認しあっている様子はない。これで難易度は更に低くなった。

だが、軽くみない、慢心はしない。自分の持てる力を全て出す。迷いはない、躊躇しない。一切の後悔もなく相手を殺す。

今の俺は世界最狂の【狂気の夜】なのだから…

「ん？…なん　ガッ」

ワザと物音を立てて男を誘き出し、即座に男の背後に着いて首の骨を折る。

そしてすぐに男の武器を奪う。

まず、刃渡り20cm程のナイフ。

そして拳銃はベルギーのFN社開発のF i v e - s e v e n。ファイブ・セブン

装弾数は20発でマガジンが2個。

確か、貫通力が高すぎるって理由で政府組織か法執行官しか販売されてない筈だ。

よくもまあ、こんな危ないもん手に入れたな。

だがこれで手持ちが楽になった。

まずは1人。ここからは時間の勝負だ。

なに、俺は暗殺任務を請けおっていた事もある。

馴れたもんさ…

「あがつ」

2人目は後ろに回って喉元をナイフで切り裂き…

「がは」

3人目は1人目と同じように首の骨を折り…

「ぐふっ」

ラストは喉にナイフを投擲し絶命…

男達は叫ぶ暇なく死んだ。

ここまでで要した時間は1分未満。
な？ 馴れたもんだろ？

「後は中にいる奴等を殺すだけ。

試合開始まであと15分ちよい。

いや、決勝戦だから確か挨拶があつた筈だ。

それを考慮して約30分。お釣りが返ってくるぜ」

俺はより一層気を引き締めて、倉庫の中へと歩みを進めた。

一夏side

「…
…
…くそ」

俺は自分の不甲斐なさに憤った。

売店で買い物をしている最中に俺は誘拐された。

誘拐犯の話しを盗み聞きた所、どうやら千冬姉の優勝を阻止するために俺を誘拐したみたいだ。

これじゃあ千冬姉に迷惑をかけちゃう……っ

なんのために……なんのために俺は今まで鍛錬してきたんだっ！！！！

「
:
:
:
:
ツ
」

俺は悔しさのあまり唇を噛み締める。

情けない……あまりにも情けない……

自分の無力さに腹が立つっ
…
…
…

「お、おい！なんだテメエ ガハッ」

すると、突如男達が声を荒げた。

俺も何事かと思つて視線を向ける。

そこにいた人物は

「よお、一夏。」

俺のホットドックとコーラはどうした？」

俺が…俺達が最も懂れる人物。
その強さを目標としている俺の兄貴分。
真鴉 黒羽だった。

黒羽 side

「 よお、一夏。

俺のホットドックとコーラはどうした？」

これと言った策が見つからず、俺は正面きって入ってきた。
ちなみに最初に声を出したヤツは喉切って殺した。

「な…なに馬鹿なこと言ってたんだよ！？
この状況見てからもの言え！！」

む？ジョークを言って和ませようとしたが怒られた…
一夏はもう少し柔軟な脳みそとジョークを受け止めるデカイ器をだ
な

「テメエ、なにもんだ！？
どこから入ってきやがった！？」

そしてなに人が考え事してる時に話しかけてきてんだお前は。

しかも質問の内容が頭悪すぎんだよ…

「どこからって…見ての通り正面からだろ」

「み、見張りがいた筈だぞ！！」

「んなもん殺したに決まってるだろ…」

お前頭悪すぎ…」

はあ…

なんか見た感じこいつがボスっぽいな…
超小物だな。そういえばあまり時間が無いんだった。

よし、すぐに殺そう…

「うるせえ…」

《 パンツ 》

俺の腕から乾いた破裂音が響いた。

それと同時に男の頭から赤い液体とピンク色したゼリー状のものが飛び出した。

そして遅れること数秒。男はもはや血と肉が詰まった、ただの袋として地面に落ちた。

「そ、そんな…ボス…」

やっぱりこいつがボスで間違いなかったみたいだな。
下っ端どもが慌ててやがる。

「お、俺はもう下りる！これ以上付き合ってられねえ！！」

「そ、そうだ俺も！！」

おいおい…
ボスが死んだ瞬間に尻尾まいて退散かよ…
まあ、頭が死んじゃ確かに終わりだろうけどよ…

この狂気^俺の夜が許す訳ねえだろ…

「なに巫山戯たこと言ってるやがる…
デメエら全員皆殺しに決まってるだろ…」

それから乾いた破裂音、計6回。
後に残ったのは俺と一夏だけの2人となった。

「さてと、これで終わり。
一夏。怪我ない」

「何でだよ……」

「ん？どした？」

「なんでそんな簡単に人を殺せるんだよ！？
なんでいつも通りに笑っているんだよ！？
人を殺したんだぞ！？」

「………一夏」

「く、くるな！！」

「……ッッ！！！」

その目……
拒絶の意思が込められた目……
俺はその目を知っている……

あの目は俺を恐れている目だ。

前の世界で助けてきた人達に散々浴びせられた目だ。

そっか…そうだな…

人を平然と殺す俺が恐くない訳ないよな…

例えこの世界でも…いくら善人面しようと…所詮俺は人殺し。

この手は血の色に染め上げられている。

今更…覆しようがない…

「…分かった」

長い沈黙のあと、俺は一夏にナイフを投げる。

「それを使つて早く会場に向かえ。

千冬さんが心配する」

こうなつた以上、もう俺はここには戻れない。

別に皆んなのヒーローになりたかつた訳じゃない。

恨まれるのも拒絶されるのも馴れた。

あとは俺が消えればそれで全て収まる。

時間はあと20分以上ある。

歩いても充分に間に合うから大丈夫だろう。

俺は一夏に背を向けて歩き出そうとした、その時
。

「へえ……随分と凄くないか。餓鬼」

突如空から声がした。

俺が空を見上げると、そこには

「I……S……」

八本の脚を生やした。まるで蜘蛛を思わせるような機械。
世界最強の兵器。ISが俺の目の前にいた。

撃たれる鴉（前書き）

オータムのアラクネって画像とかで出てないんですかね？

なんかよく分からないから妄想で書いてしまいました。（いつも妄想だけど．．．）

あと、オータムのキャラも上手く把握出来ませんね．．．

Wikipediaだと口が悪くて短気としか書いてなかったのだから．．．

まあ、いつも通り妄想100%で書いてますので、どうぞ。

撃たれる鴉

黒羽 side

(マズイ………)

俺は目の前の相手を見て焦っていた。

まさか現行兵器最強を誇るISが出てくるなんて想定外すぎる。

だが、それ以上にヤバイのはISに乗っている女の方だ。

肉食獣を思わせる獰猛な目。体から漏れだす血の匂い。

この女……俺と同じ「ろくでなし」だ。

人を平気で殺す、度し難い「狂人」

この手のヤツは目的のためなら息をするかのように人を殺す。

俺と同じでな……

「一夏……そこに置いてあるナイフを使ってすぐに逃げる……」

「え……？」

「いいから早く逃げろ!!死ぬぞ!!」

俺は声を荒げて怒声を飛ばす。

相手の実力は未知数だが伊達に世界最強の兵器を名乗っている訳ではない。

相手の目的次第では一夏は死ぬ。

それだけは何としても避けなければいけない。

「んな事させつかよ」

だが、その願いは叶わなかった。

女のISから突如爆音が鳴り、ナイフは跡形もなく吹き飛んだ。

「はっ、餓鬼の小細工が通用する訳ねえだろ」

「．．．．．クソ」

「その織斑一夏つてえのは今回の依頼の要でな。

逃がさず、殺さずに、つてのがウチのスポンサーのご要望だ。

逃がすつもりはねえよ」

．．．成る程．．．．．これはいい事を聞いた。さっきの情報
は勝機の光だ。

この女は一夏を殺すつもりはない。

なら、戦略の組み立てが可能だ。

大丈夫だ、勝てる。勝利の糸は確実に手繰り寄せれる。

「だがそれ以外は特に指示されてねえ。

だから餓鬼。死んでくれや」

女は凶暴な笑みを浮かべてその八本の脚を俺に向ける。

上等．．．お前的人格、性格は理解した。

これで勝利の戦略は完成した。後はお前を引き寄せるだけだ。

「おもしれえこと言うな小娘。」

なにそんな程度のオモチャ持ったぐれえで悦に浸ってんだよ。

ようやく飛べるようになった雛鳥風情が大鴉に勝ったつもりか？

おら来いよ、さっさと来いよ。格の違いってヤツを教えてやる」

「デメエ．．．．．餓鬼ツ．．．．．殺す！！！」

よし、乗った．．．．．

これで策の第一段階は終了だ。

後は期をみて随時次の段階に引き込む。

兵器は所詮兵器であって、戦闘のアドバンテージには足り得るが、それ単体が戦闘の勝敗を決めるものではない。

その事を俺が教えてやるよ。同じ「狂人」の先輩としてな。

勿論授業料はお前の命で払ってもらうぜ．．．．．

「さあ来な！かわいい雀ちゃん！！」
スパーロウ

その羽を筆取り取ってやるよ！！

精々チュンチュンとかわいく囁っているんだなあああ！！！！」

「言ってるや餓鬼があああああ！！！！」

女はより一層怒りを露わにして俺に向かってくる。
こうして世界最強の兵器ISと、世界最狂の狂気の夜との戦いが幕
を開けた。

s i d e o u t

「死ねや餓鬼イ!!」

まず戦闘の口火を切ったのは女の方だった。
女は黒羽に向かって一直線に飛び、その、人を殺すのに充分過ぎる
凶器である脚で黒羽を串刺しにせんとして突き刺す。

だが女の使用する脚の数は一本。

それは人間の相手ごときに本気を使いたくないという彼女のプライ
ドか、或いは人間程度の敵に本気を出すまでもないという彼女の慢
心か、それは彼女自身にしか分からない問いだろう。

わかる事はただ一つ。黒羽相手にその行動は軽率だったという事だ
けだ。

「なんだ？攻撃なのか、それ？」

黒羽は体を捻って女の刺突を回避する。

そして女に向けて容赦なく銃を突き付け引き鉄をひく。

発砲音の数は計6つ。

頭に2発、心臓に2発。凶悪犯罪者を一瞬で射殺するために主にアメリカで使われてる射撃法（コロラド撃ちと言う人もいる）で、そして2発は脚の関節部分に外れてしまった。

「っ．．．んの餓鬼やああ！！！」

だがISが最も誇るものは使用者を守るその防御性能。
女に向けられて放たれた弾丸は女に届く事なく、シールドに阻まれて力なく地面に落ちた。

女は自分の攻撃が躲かれ、そして逆に攻撃された。
この屈辱的な2つの出来事によって更に憤慨の表情をみせる。
女は自分の憤怒の感情をその脚に乗せて、黒羽を潰そうと大きく脚を振り下ろす。

「おいおい、子供のお遊戯か？」

その必殺の一撃を黒羽は嘲笑を浮かべて避ける。
そしてお返しだと言わんばかりに銃を撃つ。
頭、喉、そして心臓。数発は脚に当たってしまったがその攻撃は全て急所を狙い澄ましていた。

「はっ、なんだその動きは？」

お前ヤル気あんのか？

まさか戦闘^{ヴァーシ}処女じゃねえだろうな？」

黒羽は銃のマガジンを変えながら女を挑発する。
その顔はまさに嘲りの表情だった。

「殺す．．．．．殺す．．．．．殺す．．．．．殺すッ
！！！！

テメエだけは殺す！！絶対に殺す！！何があっても殺すッ！！！」

女の顔はこれ以上ない程に憤怒の表情で塗り潰されて歪む。
女の口から吐き出される言葉はもはや呪詛となっていた。

これが．．．これこそが黒羽の策だとは思わずに．．．．．
ズルズルと、ゆっくりに．．．女は黒羽の術中に落ちて行く．．．
．．．

「好い加減に死ねやああ！！！！」

女はありつたけの憤怒を乗せて黒羽を叩き潰す。
だが女の攻撃は感情が大きくなるのに比例してどんどん大振りになっ
ていく。

「遅えよ。阿呆」

だがそんな予備動作見え見えの攻撃など躲すに容易い。

黒羽は難なく避けて銃を撃つ。

女が脚を振り下ろした地面には小クレーターが出来上がり、女の攻撃の威力の高さを物語っている。

だが黒羽には当たらない。

一発さえ当たればすぐに終わる。だけどその一発が当たらない。

それが余計に女を苛立たせる。

「戦闘処女ヴァージンって言われてキレたか？
ブレイガール

戦闘殺人者を証明したいなら俺を殺してみろよ。

さあ、俺はここにいるぜ。お前の眼前に立っているぜ。俺を殺してみな。

お前に．．．お前程度に出来るんだったらな．．．．．」

「こ．．．こんつの餓鬼がああ．．．．．

こつちが下手に出てりゃ調子に乗りやがってえええ．．．．．

舐めくさんのも大概にしるやああああ！！！！」

もはや女の感情は憤怒とは呼べず、それは憎悪にまで膨れ上がっていた。

こめかみは痙攣を起こし、血管はもう破裂寸前。

女はもう冷静な判断を下せない状態まで掻き回されていた。

これが黒羽の狙っていた策だった。

黒羽はこの女がかなりの激情家だという事を見抜いていた。

だから黒羽は女をこれでもかと言っくくらいまで怒らせて攻撃を単調にさせたのだ。

『激情は最大の敵。冷静は最高の戦友也』とは誰の言葉だったか．．

．．．

黒羽は見事に『冷静』を戦友に、『激情』を相手に差し向け、勝てない相手を、勝てる相手にまで引き下げたのだ。

だが、言うは易く行うは難し。

黒羽の行っている行為は超危険な綱渡り。

一歩間違えれば己が人体ミンチになるような事をやっているのだ。そんな事をして冷静でいられるのは彼が培った経験の賜物だろう。

「やめだ．．．もうやめだ！！」

これ以上テメエに付き合うつもりはねえ！！

こっからは本気でぶち殺してやるよ！！」

だが、これ以上コケにされれば女も黙ってはられない。

黒羽への憎しみのために、このどうしようもない殺意を鎮めるために、女はとうとう背中にある全ての脚を黒羽に向ける。

今までは一本だったから何とか立ち回ってきた。

だが、今やその数は8倍の八本。

いくら女が冷静な判断を下せない状態でも、その数を増やせば補うに余りある。

黒羽の勝率はもはや0に近いと、誰が見ても思っだろう。

だが．．．．．

「　　」

黒羽は静かに、一瞬しか分からなかったが確かに笑った。
まるでこの展開が初めから分かっていたかのように．．．
こうなる事を待ち望んでいたかのように．．．

「それがお前の本気か．．．．．いいぜ。来いよ」

もう女を挑発する必要がなくなったのか、黒羽の語気は幾分穏やかなものへと変わった。

黒羽は手に持った拳銃を捨て、代わりにナイフを二本手に持つ。
そして女に悟られないように静かに息を整えていく。

「これで．．．終わりだああ！！！」

女はこれで終わりだと思ったのだろう。

その顔には歓喜の表情が浮かんでいた。

それはそうだろう。女がこれから繰り出す斬撃の数は8つ。

対して黒羽の斬撃の数はどこをどう見ても2つ。

この構図を見れば小学生でも女が勝つと分かるだろう。

目の前に厳然とある現実を覆しようがない。

黒羽を斬殺せんと八方向から“現実”が襲ってくる。

だが

「せやあつつつ！！！！！」

“現実”は“奇跡”の前に呆気なく消えた。

黒羽は一息の内に4本．．．計8つの斬撃を生み出した。

その8つの“奇跡”は、女の8つの“現実”を弾く。

彼の十八番である弾く斬撃だ。

だが、その奇跡の代償として、ナイフは粉々に砕け散った。

ISと普通のナイフでは材質から根本と異なったために砕けたのだろう。

そのまま黒羽はISの横に潜り込み．．．．．

「　コレ、貰うぜ．．．．．」

あろう事がISの脚を？ぎ取った。

まず黒羽はISの脚を脇に挟み、そのままグルンと縦に回って、まるで蜘蛛の脚を捻じり切るかのように？ぎ取った。

「なっ！？．．．．．なんだと！？」

女もさすがにこの常識外の出来事に目を丸くした。

絶対の好機であり、確実に仕留めるはずであった8つの斬撃。

それを無情にも弾かれ、次に主武装である装甲脚が破壊されたのだ。それも生身の人間がだ。

女の頭の中は混乱でグルグルになっていた。

だが、これにはちゃんとタネも仕掛けもある。

いくら黒羽が人間離れた技術を持っていたとしてもISの装甲を破壊する事は不可能だ。

そこで皆んなに思い返してほしい。
不思議に思わなかっただろうか？

あの黒羽の精密すぎる射撃。寸分変わらず急所を狙い撃っていた。
なのに何故、時折黒羽の弾丸は外れていたのか。

黒羽の腕なら全弾急所に当てる事も可能だった。

だが黒羽の弾は外れた。しかも外れた場所は全て脚の関節部分。 . . .

もうお気付きだろうか？

黒羽の弾は外れていたんじゃない。しっかりと命中していたのだ。

最も弱い関節部分に

そう、急所への射撃は全てフェイク。

本当の目的はこの脚を奪う事だったのだ。

それを悟られないために急所への射撃を繰り返していたのだ。

ファイブ・セブン

黒羽の使った拳銃はFive-sevenという拳銃。

弾の形はライフル弾をそのまま小さくしたような形で先端は鋭く尖り、100m離れた所で撃つてもボディーアーマーを貫通しうる程の高い貫通力を誇っている。

それをゼロ距離で十数発も受けたのだ。しかも最も弱い関節部分に . . .

いくらISでもそれは耐えられなかったのだろう。

結果、黒羽によって脚は？ぎ取られてしまった。

「ほお . . .これがISの武装か

俺の使う大太刀と同じ長さだな . . .じっくりくる」

黒羽は脚だったものを掴み、確かめるように振る。
どうやらお気に召したようだ・・・

「さてと．．．これでお前と同じ土俵に立ったって訳だ．．．
．．．

「そんじゃま．．．行くぜ？」

黒羽はここが最大の勝機と悟ったのか、初めて自分から相手に向かう。

その大太刀を携える姿はえらく堂に入っていた。

「く、来るな！来るんじゃないええ！！」

女の顔にはもはや恐怖しかなかった。

女は黒羽の策が分からなかったから力だけでISの脚も？ぎ取ったのだと思ったのだろう。

ここまでくれば体裁なんか関係ない。

残った七本の脚を黒羽にむけて銃火器を乱射する。

だが黒羽は前に一夏にこう言った事がある……

もつと全体を見るように心掛ける。

「そうすれば剣だろうが銃弾だろうが余裕で避けられる」と。

そして、その言葉は違える事なく現実のものとなった。

「うおおおおおおおっ!!」

黒羽は雄叫びを挙げて弾雨の嵐に突っ込む。

普通ならあつという間に八子の巢にされ、自らの血肉が辺りに散乱するだろう。

だが黒羽は当たらない。その鉛弾が押し寄せる死の嵐を黒羽は避ける。

必要最低限の動きで躲し、時には大太刀で防ぎながら、黒羽は不回転の覚悟を以って突き抜ける。

「これでっ・・・」

「ひっ!？」

そして黒羽は女の眼前に立ち、大太刀を振り上げた。

女は残る七本の脚を総動員させて黒羽の攻撃を防ごうとする。

相手の一に対してこちらは七。純粋な質量差ではこちらが圧倒的に上だった。

だが黒羽は、もう一人の幼馴染みである箒に以前こう言った事がある。

『力を抜けば抜く程、剣の一撃は鋭くなり重くなる。その気になれば鉄塊をも斬る事が出来るぞ』と。

そして、その言葉も違う事なく現実のものとなった。

「　　終わりだあぁっ！！！！」

「がはっ！」

振り下ろされる白刃の一閃。

ISの七本ある装甲脚は一閃の下に切断され、衝撃はそのまま女に伝わり吹き飛ばされ、壁に激突した。

「はぁ．．．はぁ．．．。これでチェックメイトだな」

黒羽は数呼吸して息を整え、止めを刺すために女の方に歩み寄る。

「クソが．．．何だつてんだよ．．．．．お前は一体何なんだよ！？」

「．．．おれはただの狂人さ。お前と同じな。守りたい大切な人達のために人を殺す度し難い狂人さ」

「守りたい．．．だと？あの小僧の事か？
あいつはお前を否定したんだぞ。
なのに何故お前は守ろうとする！？」

「．．．．．例え一夏が俺を否定しても、俺にとっては守りた

い存在である事には変わらない。だから俺は守る」

女の言葉に一瞬辛そうな表情をする黒羽。

おそらく拒絶された時の事を思い出したのだろう。
だがそれでも彼は止まらない。

「守りたい・・・か。ならこんなのはどうだ？」

「ッ!？」

黒羽の言葉を聞き、女はこれまでの表情を一変させ、喜色の色を浮かばせて凶笑する。

ISの特徴の1つとして、武器を量子化して機体に保管できる能力がある。

女の手には光の粒が集まり、やがて1つの銃器となった。

「守ってみせな。狂人」

そして女は引き鉄を引いた。

あろう事が殺すなど言われた一夏に向かって・・・

一夏side

怖かった。

なんの躊躇いもなく、当たり前のように人を殺す黒羽が怖くてたまらなかった。

例え俺を助けるためだとしても、逃げた誘拐犯まで殺すのは俺には到底理解できなかった。

そして俺は黒羽を拒絶した。

もしかしたらそこで俺は殺されるんじゃないかと思ったけど、黒羽は俺の側にナイフを投げてそのまま立ち去ろうとした。

その時、いきなりISが現れた。

もう駄目だ．．．．．

世界最強の兵器ISが出てきた瞬間、俺はもう助からないと諦めた。

だけど黒羽は諦めていなかった。

黒羽はISと向き合い、真っ向から勝負した。

無謀だと思った．．．。いくら黒羽でもすぐに殺されると思った。

でも黒羽は生き残っていた。

ISの攻撃を紙一重で避け、その隙に銃を放つ。

一撃即死の嵐に身を置きながらも、黒羽は終始戦いを有利に進めていた。

そして、なんと黒羽はISの脚を？ぎ取ったのだ。

その？ぎ取った脚を大太刀にして、黒羽はISに突っ込んでいった。

ISは銃火器を乱射したが、黒羽はその弾幕を避けてISの目の前に立ち、七本の脚を一刀の下に斬り伏せた。

以前、黒羽が言っていた『 相手をよく見れば銃弾だって躲せれる』や、『 その気になれば鉄塊だって斬れる』を思い出した。

あれは全部本当の事だったのか．．．．．

黒羽はISの方に歩み寄る最中、操縦者の女となにか言い合っていたが、ここからだとして少し聞き取れなかった。

そして、あともう少しの所で黒羽がISの所に着こうとした時、女は突如銃を取り出して俺の方に照準を向けた。

俺は縛り付けられて動けない。

引き鉄を引かれれば俺は間違いなく死ぬだろう。

色んな出来事が走馬灯のように頭を駆け巡った。

ISの方から発砲音が鳴り響き、俺は無駄だと分かりながらも目を瞑った。

「．．．．．」
「．．．．．」

おかしい．．．．．

さつきから全然衝撃が来ない．．．．．

もしかしてもう死んだ？

いや、それだったら縛られてる感覚もなくなっている筈だ。

という事はまだ俺は生きている事になる。

（一体なにが．．．．．）

そう思い、俺は恐る恐る目を開けた。

[illegible]

そして俺は目の前にある光景を疑った。

┌
 <
 └

俺の目の前には体からおびただしい程の血を流し、足元に血の池だまりを作りながら、黒羽が直立不動で立っていた。

「な．．．なんで．．．お前が．．．」

[illegible]

俺の問いかけに黒羽は答えない。

その代わりに赤い雫が池だまりに落ちて音を出す。

「ア．．．ハハ．．．．アッハッハッハハハハ！！！！
こいつ．．．本当にこの小僧を守りやがった！！」

女は狂った笑い声を上げる。まるで面白い出来物を見ているみたい

それよりもこの女は何を言った？守る？

「そんな．．．．．それじゃあもしかして．．．．．」

「ああそうさ！こいつはお前を守るために身代わりになったんだ。

「守りたい人」とか抜かしながらな．．．。

良かったな小僧。この馬鹿のおかげでお前は助かったんだぜ．．．。
クックククク．．．．．」

そんな．．．。黒羽は俺を守るために．．．。
黒羽を拒絶した俺なんかのために．．．。
なんで．．．．．なんで．．．．．。

「おっと、もうこんな時間か。
これで取り敢えず依頼は完了だ。
じゃあな、糞餓鬼ども」

それだけ言つて、女は逃げていった。
後に残ったのは縛られてる俺と、血に濡れた黒羽だけだった。

「．．．．．黒羽．．．．．なあ、黒羽．．．．．
」

俺は黒羽に呼びかけるが、黒羽は答えない。

黒羽は俺を守るために身代わりになった。

それなのに．．俺は黒羽を怖れていた．．拒絶してしまった．．
．．．

後悔と自責の念が俺の頭の中をグルグルと駆け巡る。

「黒羽．．答えてくれよ．．なあ、黒羽っ．．．．」

黒羽に謝りたい．．．

怖がった事を謝りたい、拒絶した事を謝りたい。

俺を守ってくれた事に感謝したい．．．

俺の目から涙が流れてくる。

でも黒羽は答えない、答えてくれない。

まるで死人みたいに

「あ．．．．．」

そう思った瞬間に俺の中のナニカが決壊した。

黒羽は．．黒羽は．．黒羽は．．黒羽は．．黒羽は．．

俺を守るために．．．

死んだ
.
.
.
.
.
.
.

「あ．．．ああ．．．．．あ．．．あああ
あああああああああ　あ　あ　あああ
あ　あああ
」

まるで壊れたダムみたいに様々な感情が押し寄せ。
俺の精神は崩れた．．．．．

撃たれる鴉（後書き）

黒羽、黒羽って．．．なんか流し読みすると関羽って見えませんか？
え？違う？そうですか．．．．．

取り敢えずこれで一回戦闘描写は終わりです。
拙い文でしたけど如何でしたか？

あと、ISって武装に対しての攻撃にシールドって張りましたっけ？
漫画だとよく分からないんですよ．．．．．
もし武装に対してもシールドを張るのならこの戦闘は矛盾しますが、
そこは突っ込まないでください。

あと一話書いたら本編に突入させるつもりです。
作者お得意のご都合主義で。
それでは皆さん。また。

帰る場所・・・（前書き）

ハッハーツ！！

一睡もしないで執筆したぜ！！

もう無理限界死ぬ！！

いつも通りカナリおかしい所があるけど見ておくんなせえ！！

帰る場所

千冬 side

弟の一夏が誘拐されたと聞き、私は決勝戦を棄権して一夏の救助に向かった。

ドイツ軍から一夏の監禁場所を教えてもらい、すぐに救助に向かったのだが

「なっ!?! これは」

私は目の前に広がる惨劇の光景に言葉を失った。

誘拐犯と思われる男達の死体。外にも4人の死体が転がっていた。そして所々にある生々しい銃痕。

それらが事態の凄惨さを語っている。
だが、それよりも酷いのが

「一夏 黒羽」

茫然自失状態の最愛の弟と、私が最も憧れる偉大な人物。真鴉 黒羽が血の海を作りながらも尚屈せず直立不動で、まるで一夏を守るように立っていた。

「黒羽っ！．．．おい黒　　っ！？」

私が黒羽に近付いた瞬間、途方もない程のプレッシャーが私を襲った。

私はそのプレッシャーを受け、まるで心臓を鷲掴みにされたみたい
に動けなくなった。

私はこのプレッシャーを放出した人物がすぐに分かった。

目の前にいる黒羽がこのプレッシャーを放った人物だった。

なんとという精神力か．．．．．

体は既に死に、意識すら無いというのに心は全く死んでいない。

黒羽から感じる想いは、「守りたい」の純粋な想いだけ。

その想いだけで黒羽はこの血の海で屈する事なく立ち続けた。

まるで英雄録から出てきた英雄のように。

私はその姿を美しいと思ってしまった．．．．．

「って、なに場違いの事を考えている！！

聞こえるか医療班！重傷者が一名いる！！

しかも瀕死状態だ！すぐに来てくれ！！

いいか！何があっても助けるんだ！！」

ISのセンサーで生命反応は辛うじて捉えている。

だが、反応はかなり微弱で、いつ死んでもおかしくない危険域だ。

私はインカムから医療班に指示をとばす。

黒羽の方は、私ではこれ以上どうする事も出来ない。

あとは一夏の方だ。

見たところ外傷は無いようだが安心はできない。
私はすぐに一夏の縄を切り、一夏の様子を見る。

「おい一夏！大丈夫か！？怪我はないか！？」

「ち．．．．．ふゆ．．．．．ねえ．．．．．」

「

良かった．．．．．
意識はしっかりある。

「そつだ私だ。お前の姉の千冬だ。怪我はな」

「あ．．．ああ．．．．．千冬、姉．．．俺が．．．俺が、黒
羽を．．．．．こ、殺したんだ．．．．．」

だが一夏は突如頭を抱えだし呻き声をあげ出した。
マズイ！精神が崩れかかっている！！

「一夏！しっかりしろ！！」

「あゝあああああゝあああゝあああああゝあゝあああああゝ
あゝあああゝ．．．．．！！！！！！」

「っ……………」

すぐさま首に手刀を当てて一夏を気絶させる。

あのまま精神の崩壊が進めば自我が壊れて命の危険に及んでいただろう。

今まで一緒に過ごしてきた黒羽が目の前で瀕死の重傷を負ったのだ。おそらく自分を守るために。

心に多大な傷を残していたとしても何ら不思議じゃない。

そして、その後に来た医療班達に黒羽と一夏を頼み、私は1人、この惨劇の舞台で立ち尽くしていた。

「……………クソッ!!」

私は自分の不甲斐なさを近くにあった柱に殴りつける。

柱はいとも簡単にその原型を保てなくなり飴細工のように曲がった。だが、私が欲しいのはこんな力じゃない…………

「……………世界最強?……………ブリュンヒルデだど?

馬鹿馬鹿しい……………

大切な家族2人も守れなくてなにが世界最強だ……………っ!
!」

私は強くなりたかった……………
家族を守るために強くなりたかった……………

そして世界最強になったと思えばこのザマだっ．．．
黒羽は瀕死の重傷を負い、一夏は心に多大な傷を残した。
結局．．．私は何1つ強くなってなどいない．．．
周りが見えていなかった、ただの愚かな小娘だった．．．
「．．．．．私は．．．．．こんなに無力だ．
．．．．．」

家族を守る力が欲しい．．．
あの黒羽のように、大切な人を守る力が欲しい．．．
私の呟き誰にも聞こえる事なく、孤独に辺りに響き、まるで私自身の罪状のように静かに木霊した。

黒羽 side

誰かの泣いている声がする．．．
暗い、暗い．．．僅かな光すら差し込まない暗黒の世界で。
悲痛な泣き声だけが響く．．．

「どこだ．．．どこにいるんだ．．．
いったいどうしたんだ．．．？」

呼びかけてみるが、返事は返ってくる事はなく泣き声だけが響く。

なんとか手探りで探してみるが、気付いたら俺の手の感覚は無くなっていた。

歩いて探そうとしたら足の感覚までも無くなっていた。

自分の体を見てみれば、俺の体は何1つ無くなり消えていた。

それなのに意識だけはハッキリとしている。

上下左右のない空間に浮いている感覚がヒドく気持ち悪い・・・

•

「……たたく、一体なんだってんだよこの世界は……」

どれだけそうしていたのか・・・

一分か？それとも一日か？はたまた一ヶ月か？

どうやらこの世界は時間もあやふやらしい・・・

それなのに泣き声だけは鳴り止むことなく、この世界に響く。

遣る瀬無い気持ち溜まり、段々とイライラしてきた・・・

「ん、なんだ？ 光か？」

だが、俺の目の前にイキナリ光が生まれた。

光は暗黒の世界に次々と亀裂を入れていき、やがてガラスが割れたような音を響かせて暗黒の世界を書き換えた。

「はーい、はい。」

新しく出来た世界は俺の見覚えある世界だった。

俺はつい最近までここにいた。

この世界は一夏が監禁されてた場所だ。

そして気が付けば泣き声は俺のすぐそばで聞こえてた。

それに、消えていた体もちゃんとある。

俺は泣き声の方に視線を向けてみると．．．

「一夏．．．．それに俺か．．．．」

やっぱりと言うべきか．．．

俺の視線の先には血まみれ状態の俺と、泣き崩れている一夏の姿があった。

「おいおい．．．．なに泣いてんだよ一夏．．．．
折角の男前が台無しじゃねーか．．．．」

ここは泣くんじゃなく喜ぶところだぜ。

お前は助かったんだからよ。だから笑いな。

もしかして俺のために泣いてんのか？

俺なんかのために涙を流しちゃいけねえ．．．

こんな狂人に涙を流すなんざ勿体無さ過ぎる．．．

「にしても俺はすげえボロボロだな．．．
これ死ぬんじゃないか？」

自分の事になると途端に軽くなる。

よくもまあ見事な絵に描いたようなボロボロ具合。

あの女の撃った弾は榴弾タイプか．．．

爆発して飛び散った鉄片が体にめり込んでいやがる。

まあ、これが普通の弾だったら一夏にも貫通して死んでいただろうな。

女はそれを分かって撃ったのか知らねーが、俺には幸運だったな。だが血を流し過ぎている。

これは下手したら．．．いや、下手しなくても死ぬな。

人の生死を見分けるのには馴れてんだ。

これは死んだな。

「．．．．．だが．．．大切な人を守れば本望だ．．．．．」

最後は一夏に拒絶されちまったがな．．．．．
だけどそれも当然だ。

俺の本質なんて所詮はただの人殺し。

拒絶されても仕方ねえ．．．寧ろ人として真つ当な反応だ。

それでも俺には守りたい大切な人である事には変わらない。

もう．．．俺には悔いはねえ．．．．．

「おっと、そうはイカの時時計」

「ッ!？」

俺の後ろで突如女性の声が聞こえた。
いつの間に俺の死角に入ったんだ？
ってか、イカの金時計って古っ！！もうそれ死語じゃねえか！！
こ　亀のマンガ以外聞いた事ねえぞ・・・

「ハロハロ」　一応初めましてだね、黒羽」

あんな前時代的なセリフを言った女が誰なのか確かめるために後ろを振り返ってみると、まるで真夜中を思わせ、光すら飲み込むような漆黒の髪と、絶世の美女と言っても過言ではない圧倒的な美貌を持つ女性が、お気楽な声を出してヒラヒラと手を振っていた。

「・・・あなた・・・誰だ・・・？」

「あたしかい？あたしの名前は　だ。ほら、あなたの」

・・・なんだ？

所々話しの内容が途切れて聞こえない。
まるで音声 that 濁っているような感じがした。

「すまねえ。要所の部分が何言ってるかさっぱり分からねえ」

「あ、そうか・・・」

黒羽はまだあたしを知らないんだっ たね。

OK。さっきの事は忘れて。

そのうち会う事になると思うけどさ、それまでは待ってておくれ。
会った時にあたしが誰だか分かるはずだから」

「分かった。あんたの事はひとまず置いておこう」

「サンキュー」

なんとまあ随分と軽いノリで．．．．．
見た目は20代前半の絶世の美女なんだが．．
言動が意外と幼いな．．．．．
見た目が見た目だからより一層そう思う。

「で、あんまり時間がないから単刀直入に言うけどさ、黒羽はまだ
死なないよ」

「ん？どういう事だ？」

「黒羽を死なせたくない人が居るって事さ。

真鴉 黒羽の人生はここで終わりじゃないんだよ」

俺を死なせたくない、か．．．．．
随分とその人は変わり者のことで．．．．．

「あ、黒羽いま変なこと考えているでしょ？」

む、考えていることを読まれたか．．．．．

「黒羽が死んだら悲しむ人がいるんだから。
もつと自分の命を大切にしなければダメなんだぞ」

「．．．耳が痛いお言葉で．．．．．」

「ふう、全く黒羽は．．．．．
つと、もう時間みたいだね」

「お？」

気が付けば俺の体は虫食いにあつたみたいに所々消えていた。
成る程．．．もう少しで目覚めるのか。
てか、俺が言つたんだが虫食いつて表現、なんか嫌だな。

「そんじゃまたね、黒羽。
言い忘れていたんだけど寝起きはスツゴイ地獄だから。
覚悟しとくんだね」

「ホントに今更だな．．．
まあ、ある程度は想像していたからいいけどよ．．．．．」

「うん それでこそ男の子だ」

「あ、おい！頭撫でんじゃねえよ！！」

あんたみたな美人に頭撫でられるなんて、恥ずかしくて堪ったもんじゃねえ！！

つてか本当に美人だな．．．．．
笑顔がこれほど似合ってる人なんてそうはいない。

それに意外とデカイな．．．

なにがつて？それは．．．その．．．．．む、胸がだな．．．
．．．

つてなに变なこと考えていやがる！！

「あははゝ。なんだい？照れてんのかい？
可愛い所もあるんじゃないかい黒羽」

「ほつとけ！！」

そんなやり取りをやっている間に俺の体はどんどん消えていく。
気が付けば肩より下はもう完全に消えていた。

「さてと、これで暫らくお別れだね。
じゃあね黒羽。またいつか会おうね」

「おう、名前も知らない美人さん」

「あはは、嬉しいこと言ってくれるじゃないか」

くそ．．．お返しに照れさせようとしたら平然と返してきやがった．
．．．．．
そればかりか言った俺の方が恥ずかしい．．．
ちくしょうめ．．．完全に誤爆した．．．．．

「またね。あたしの相棒．．．．．」

「え？いまなんて」

女性が言った言葉が聞き取れず、聞き返そうとした瞬間に俺の意識はブツンと途切れた．．．．．
あの言葉は濁って聞こえなかった言葉の１つに違いない．．．
俺にはそう思えてならなかった．．．．．

~~~~~

「ん．．．．．ここはツ　　痛つうううう．．．．．  
！！！」

目を開けた瞬間、俺に訪れた感覚は寢覚めの感覚ではなく、想像を絶する痛みだった。

「ま．．．マジ痛えええ．．．．．しかも全身から．．．．．  
．．．．．」

あまりの痛さに大声で叫ぶことすら出来なかった。

女の人が寝起きは地獄って言ってたからある程度は想定していたが、  
これは想定外すぎるぜ．．．．．

「真鴉さん。体温測りま．．．．．」

俺が想像を絶する痛みに悶えていた時、看護婦さんがやってきた。  
ただ看護婦さんは俺を見るなり動きを止めた。

俺なんか変なことしたか？

「．．．．．や、やあ？」

何故か疑問文で聞いてしまった．．．！

「せ、先生！真鴉さんが．．．真鴉さんが目を覚ましました！！」

看護婦さんはまるで幽霊を見たような慌てぶりで部屋から飛び出していった。

全く失敬な．．．．．

俺は自分の体の具合を確かめるために、全身からくる痛みを堪えな

がら両腕を天井にのば．．．．．す．．．．．

「左腕が．．．．．ない．．．．．」

天井にのびた腕は右腕の一本だけ。

左腕を見てみると、俺の左腕は肩から先が無くなっていた。

「それに．．．右目も．．．．．か．．．．．」

右目に幾ら力を入れても右の目蓋は開く事が無かった．．．．．

それに右目の感覚がひどくカラッポだ．．．

これは確実に俺の眼球は無いな．．．あの榴弾の鉄片を受けて潰れたか．．．．．

「．．．．．ふう．．．．．」

俺は深い溜め息を吐いて目を閉じる。

体の一部分が無くなったのは別にいい．．．．．

それ以上に俺の心を占めているのはアノ一言だ．．．．．

『く、くるな!!!』

「っ．．．．．!!!」

くそ．．．震えが止まらねえ．．．．．  
拒絶されるのは馴れているはずだ．．．．．  
なのに．．．なのになんで俺はこんなにも怯えている．．．．．

「ああ．．．．．そうか．．．そうだったのか．．．．．  
俺は　　」

あそこは俺の居場所なんだ．．．．．  
前の世界では俺の居場所なんて何所にもありはしなかった。  
だから拒絶されても大丈夫だった。また別の場所に行けばいいだけ  
なんだから。

それを“馴れている”と俺は勘違いしていた．．．．．  
だけど、この世界で俺は初めて自分の居場所を見つけた．．．  
だから．．．拒絶されるのが怖い．．．．．  
この居場所を失うのが堪らなく怖い．．．．．  
俺が初めて見つけた．．．どこにでもある、ありふれた日常を．．．  
皆んなと笑いあえるこの世界を．．．．．

「．．．怖えよ．．．．．拒絶されるのが怖え．．．．．  
っ」

俺はベッドに包まり、ただ怯えてガタガタと震えてる事しかできな  
かった．．．．．

あの忌まわしい事件から一ヶ月の時が経った．．．

結局あの事件は詳しく報道されず、私が世界大会を突如棄権したとしか報道されなかった。

そして私はあの日を境にISに乗る事をやめた．．．

それでいい．．．私にとってISは過ちであり、後悔であり、そして罪だ．．．

“力”をただの“暴力”と履き違えていた愚かな小娘の大罪だ．．．

ISに乗る事をやめたのはこれ以上罪を重ねない為の私なりのケジメだ。

あのあと黒羽と一夏は病院に運ばれ、黒羽はなんとか一命を取り留めた。

医者曰く、生きていたのは奇跡に近いです。だそうだ。

だが、その奇跡の代償は大きく、左腕、そして右目を失った。

そして今も意識不明の状態で、

医者は、もう一度奇跡が起こらない限り目を覚ます事は無いでしょう．．．

う．．．、と言っていた。

それでも私は毎日欠かさず見舞いにいつている。

そして一夏も酷かった。

体は全くの無傷だったが、心には致死量の傷を負っていた．．．

最初の頃は鎮静剤を打ち込まなければいけないほど酷く、私が側にいても収拾がつかない事もあった。

黒羽が生きていると聞いた時から大分精神も落ち着き、自宅療養が許されるまで回復してきた。

だが私は知っている．．．一夏は毎夜ベッドで泣き、ろくに眠れて

いない事を．．．．．

一夏が泣いている姿を見る度に．．．黒羽の見舞いに行く度に．．．私は自分の無力さと愚かさを痛感する．．．．．だが、私は逃げない。目を逸らさない。

これらは全て私が招いた罪だ。逃げる事は絶対に許されない。これが私にできる唯一に罪滅ぼしなのだから．．．．．

「千冬姉、ご飯できたぞ」

自己嫌悪に陥っていた思考を一夏が引き戻す。

もうそんな時間になっていたのか．．．

随分と長く考え込んでいたらしい．．．．．

「ああ、分かった」

そういえば家事は全て一夏に任せっきりだったな．．．．．

私は年長者だというのに、それらしい事は何一つ出来ていない．．．

．．．

それに、いつもはここに黒羽がいて楽しい食卓だった筈なのに

「千冬姉、なんか顔色悪いぞ？大丈夫か？」

いけない．．．

また自己嫌悪に陥ってしまった．．．

「あ、ああ．．．大丈夫だ．．．」

「本当か？あんまり無理するなよ？」

「お前こそ無理するなよ」

「なに言ってるんだよ千冬姉。俺はもう大丈夫に決まってるだろう」

嘘をつけ．．．

そんな貼り付けたような笑顔で納得する方が無理だ．．．

私に氣を使いおって．．．

お前の方がよっぽど無理しているではないか。

プルルル、プルルル．．．

突如電話の着信音が鳴り響いた。

相手は．．．病院からだと．．．？

まさか黒羽になにかあったのかっ！？

「はい、織斑です！なにかあったんですか！？」

「織斑さん！ありましたよ！おおありです！！」

真鴉さんが目を覚ましたんです！！」

待て．．．今なんと言った．．．．．？

黒羽が．．．黒羽が目を．．．．．覚ました．．．だと？

「黒羽が！？それは本当ですか！？」

「はい、本当です！！二度目の奇跡が起こりました！！  
本人たつての希望で面会を望んでおります。  
すぐにでもお越し下さい」

「分かりました！では！」

私はもの凄い勢いで受話器を置く。その時に受話器が壊れてしまった  
つが関係ない！

黒羽が．．．黒羽が目を覚ました！！

「おい一夏！すぐに病院に行くぞ！！

黒羽が目を覚ました！！」

「ほ．．．本当か！？黒羽が目を覚めたのか！？」

「ああ本当だ！今から面会に向かう、すぐに準備しろ！！」

「お、おう！！」



一夏の顔がようやく喜びの表情となった。  
あんなハリボテのやつなんかじゃない．．．本当に心の底から笑った。

私もすぐにスーツを着て準備をし、一夏と一緒に病院へと向かった。

## 黒羽 side

一夏と千冬さんが面会に来る。

目を覚ました後、俺は医者から軽い健康診断を受けて、面会しても問題ないと言われてすぐに2人の面会を希望した。

それを受けた2人はいの一番に向かってきているらしい。

すぐに来てくれる2人を俺は半分嬉しく思い、もう半分は怖くなっていた。

（もしまた拒絶されたらどうする．．．．．）

頭の中で悪いイメージが浮かんでくる。

それを頭を振るって追い払い大丈夫だと自分に言い聞かせる。

（大丈夫だ．．．2人はすぐ面会に来てくれるじゃないか．．．．．）

大丈夫．．．俺を拒絶していたらそもそも面会なんかに来たりしない．．．．．）

コンッコンッ

突如ドアからノックが聞こえた。

来た！！

「・・・どうぞ」

俺は軽く深呼吸をして気分を落ち着かせる。  
そしてノックの主に入ってくるよう促す。

「・・・失礼する」

「・・・」

千冬さんは一言いって入室し、一夏は一言も発せず無言のまま入ってきた。

「やあ、千冬さんと一夏。

俺からしたらほぼ先日振りだけど、2人からしたら一ヶ月振りかな？」

俺は心の動揺を探られないように、おどけて挨拶する。  
千冬さんはそれを見て一瞬目付きを鋭くした。

やっぱ千冬さんには暴露<sup>ばうろ</sup>たか．．．  
一夏は俺の左腕と右目に着けてある眼帯を見て表情を苦しげなものに変えた。

「さて、私は一度先生の所に行ってくる。  
それまで2人で話しをしている。  
色々と積もる話もあるだろうからな」

千冬さんは俺達の雰囲気を感じ取ったのか、最もらしい言い訳をして一度退室する。  
本当に千冬さんは出来た人だぜ．．．

「．．．．．」  
「．．．．．」

ただど後に残ったのは重苦しい沈黙だけ。  
俺は一夏に一体なにを言えいいのか分からない．．．  
おそらく一夏もそうだろう．．．  
だが、ここで逃げてちゃ何も始まらない．．．  
まずは会話だけでもしないと．．．

「．．．．．一夏．．．．．その．．．俺  
「済まなかった!」は．．．」

俺が喋った瞬間、一夏が頭を下げてきた。

「黒羽にずっと言いたかったんだ．．．．．  
あんな酷いこと言ってごめん．．．。」

黒羽を怖がってごめん．．．。

俺を守るために左腕と右目を犠牲にしてごめん．．．。  
そして．．．俺を守ってくれてありがとう．．．っ」

一夏はそれからも涙を流しながら「ごめん、ごめん」と何度も謝った。

バカヤロウが．．．．．お前が謝る必要なんてどこにも無いじやねえか．．．．．

全く．．．とんだ大バカヤロウだぜ．．．．．

「一夏．．．．．」

俺は一夏の頭の上に手を置き、確かめるように頭を撫でた。  
そして

「ふんっ！！」

殴った。それも思いつきり。

頭からゴンツと鈍い音が響きとても痛そうなお音だった。

「いつてええええええ！！  
なにしやがる黒羽！！！」

「バーカ、男がメソメソ泣いてんじゃねえよ。

男が泣く時は女房に浮気がバレて許してもらった時だけだ。  
せつかく助かったんだから笑いやがれ。

「じゃねえと殴るぞ」

「もう殴ってるじゃねえか！！」

それに・・・俺のせいで黒羽は左腕と右目を・・・」

「お前が負い目を感じる必要なんざねえんだよ。

寧ろ男にそんなこと思われるとか気持ち悪い。

お前が負い目を感じていいのは俺がお前守って死んだ時だけだ。  
それでも殴るけどな」

「結局殴るんじゃねえか！！」

そんな事を言い合い、最後は看護婦さんに注意されるまで俺達はギ  
ャアギャアと騒いでいた。

「さてと、そろそろ千冬さんも戻ってきたころだろう・・・  
ほら一夏、お前は退室しろ。シッシッ」

「俺は犬かよ・・・退院したら覚えておけよ・・・」

「ごめん、忘れた」

「そうかよ。じゃあな」

最後まで軽口を言い合って俺達の会話は終わった。  
その途中

「なあ、黒羽．．．．．」

「なんだ？ナースの更衣室は部屋を出て右から3番目の部屋だぞ」

「違いよ！！全くお前は．．．．．  
その．．．ありがとうな」

「それは俺のセリフだってーの」

そう言つて一夏は部屋を出た。  
それから入れ替わるように千冬さんが入ってきた。

「話しは終わったか？」

「ええ、千冬さんのお陰で。ありがとうございます」

「なに、気にするな。その様子だと一夏と和解したようだな」

やっぱ千冬さんには見抜かれていたか．．．．．

この人に隠し事はできんな．．．

「千冬さんも聞いたんでしょ？俺の事．．．」

「ああ、一夏から大体の事はな」

「怖くないんですか？俺は人殺しですよ。

それもどうしようも無いくらいの．．．」

「それがどうした」

俺の言葉に、千冬さんは全く歯牙にも掛けない様子だった。

「お前が何者であろうと、命を賭して一夏を守ったお前を否定しない。

私にとって、お前も一夏も大切な家族なのだから」

家族。千冬さんはいま俺の事を家族と言ってくれた．．．。

こんな「ろくでなし」を家族と呼んでくれるなんて．．．。  
俺の胸がじんわりと温かくなってきやがった。

「千冬さん．．．ありがとう．．．ごじます．．．」

くそ．．．．．涙が止まらねえ．．．

それどころかどんどん増えてきやがる．．．

「泣けばいい。今は私の胸で存分に泣け。」

お前の強い所も．．．弱い所も．．．私は全て肯定しよう．．．  
．．．」

千冬さんは優しく俺のことを抱きしめ、ゆつくりと．．．静かに．．．  
．．．慈しみの籠った言葉で語りかけてくれる．．．

「う．．．うあああああ．．．．．っ  
怖かったっ．．．．．拒まれるのが堪らなく怖かった．．．  
．．．っ

ここは俺の大切な居場所なんだ．．．  
だから．．．だから．．．．．俺は．．．．．っ  
」

「そうか．．．．．大丈夫だ．．．  
お前の居場所はここにある。お前の帰る場所はここにある。  
だから安心しろ．．．私が全てを受け入れよう．．．」

千冬さんは俺の背中を何度もさすり、俺は千冬さんの胸で思っ存分  
泣いた。

ああ．．．人ってこんなにも温かいのか．．．  
俺は人の温かさを知りながら暫らく泣き続けた．．．

~~~~~


「
／／／」

で、暫らく泣き続けたんだが、少し落ち着いた瞬間に、俺は千冬さんに抱きしめられてた事を思い出して顔を真っ赤にした。
千冬さん aussi 思い出したのか、顔を真っ赤にさせている。

やべえ．．．もの凄く恥ずかしい．．．／／
俺．．．千冬さんに抱きしめられて．．．
そして頭はその．．．千冬さんの胸に．．．や．．．やわ．
．．．やわらか　ええい！煩惱！！

「な．．．なあ黒羽．．．」

「は、はい！」

ヤバ．．．声裏返った．．．

「その．．．この事はお互いの秘密しよう．．．」

「そ．．．そうですね．．．そうしましょう．．．」

これはお互いのために秘密にしておこう．．．
本当は世の男性に自慢したいが、俺のガラスのハートが木っ端微塵に粉碎されるのがオチだ．．．

「よし．．．それでは私はもう戻る。
安静にしとくんだぞ」

「りよ、了解です。
あ、あと千冬さん」

「ん？なんだ？」

「その．．．あまり自分を責めないで下さいね。
悪いのは千冬さんじゃないんですから．．．」

「．．．気付かれていたか．．．
黒羽に隠し事はできんな．．．」

やっぱりこの人も負い目を感じていたんだよな．．．
千冬さんは他人にも自分にも厳しい人だからな．．．
色々と背負い込んでいるんだろう．．．

「それはお互い様ですよ」

「ふ、そうか、それもそうだな」

千冬さんの表情は幾分か柔らかいものになった。

これで解決した事にはならないが、重荷を減らす事はできただろう。

「ありがとう黒羽．．．、それではな」

そう言つて千冬さんは部屋を出ていった。

そして部屋には俺一人だけになってしまった。

だけど俺の心にあるのは孤独じゃない。

優しい温かさが俺の心を満たす。

「良かった．．．本当に良かった．．．．．っ」

ダメだ．．．思い出すとまた涙が流れてくる．．．

涙を流すなんていつ以来だ．．．？

とつくに枯れ果てたと思つてたんだがな．．．

まだ俺にも涙があつたなんてな．．．

「ああ．．．目が無くなつても涙は流れるんだな．．．」

俺は流れる涙を止める事なく、静かに涙を流し続けた．．．

~~~~~一方その頃~~~~~

(か．．．家族か．．．．．黒羽と私が家族．．．．．悪  
くないな．．．．．  
いや、寧ろいい．．．ああ．．．すごくいい．．．．．)

「どうしたんだ千冬姉？顔が真っ赤だぞ」

「う、うるさい！」

「いつてえええ．．．．．っ！！！」

なんて事がありましたとさ。

帰る場所・・・（後書き）

千冬とのフラグを建築中だぜ！！

そして黒羽が眼帯キャラに！

ラウラと被つちまったが気にしないでくれ！

それに眼帯を着ける目の場所も違うから安心してくれ！！

これで長かったプロローグは終わりだ！！

次回からIS学園に入学するぜ！！

楽しみにしてくれ！！

ヒャッハー！！

## 主人公説明（前書き）

本編に入ったので主人公説明を挟みました。

主人公のイラストを書いてみました。

生涯で一番本気で書いてみたので、喜んでいただけたら幸いです。  
ヘタクソですけど．．．．．

## 主人公説明

まがらす  
真鴉 黒羽

本作の主人公

前世・・・というか、別の世界で死んだ男が新しく生を受けた、いわゆる転生者。

神社に捨てられてたのを神主さんに拾われた。

本人は前の世界でも親がいなかったので、捨て子だったと知っても気にしていない。

前世で培ってきた技術もそのまま引き継いでいるので剣術は凄く巧い。というより、もはや人外クラス。

一夏や箒、千冬にも剣を教えてて師匠（千冬の場合は嫌がらせの意味が強い）と仰がれるが、本人はそう呼ばれるのを嫌がる。

その他にも色々とぶっ飛んでいる技能を身につけている。本人曰く「あの世界で生き残っていくには必要だった」と言っている

一人暮らしのお陰で料理の腕はかなりのもの。

美味しいものを食べて喜ぶ顔を見るのが好きで、よく皆んなに料理を作っては振舞っている。

一夏に料理を教えたのも黒羽で、その点でも一夏から師匠と仰がれている。

性格は多少ふざけた所もあるが、面倒見が大変良く、一度面倒みると決めたら最後まで面倒みる。ふざけたり冗談を言ったりするのは場を和ましたり、緊張を解すといった意味合いが強い。時たま意味もなく言ったりもするが・・・

非常に頼りがいがあり、同年代からも兄貴分として慕われている。

一夏は黒羽のイメージを「お気楽な大樹」と称している。

また、家族や人の繋がりを誰よりも大事に考え、傷付ける者はどんな手段を用いて・・・例えば自分の命を犠牲にしでも殺す。

束を「自分にしか興味がない破綻者」だとするなら、黒羽は「他者にしか興味がない破綻者」だろう。

束が黒羽に興味を持ったのは「自分と同じ位置にしながら真逆の方向を見ている」からなのかもしれない・・・

第二回モンド・グロッソで誘拐された一夏を助けるために左腕と右目を失い、右腕にも多大な傷を負った。

再び剣を握るのに地獄のようなリハビリにも耐え、一年半の歳月を経て剣を握れるまでに回復したが、全盛期のように剣は振れない。

一夏は今でも黒羽の傷を自分の責任だと思っており、その事を黒羽は心配している。

容姿は短い黒髪で、182cmと一夏よりも高く、面倒見のよい性格故が一夏と同じくらいモテる。

だが、他人（主に一夏）に向けられる好意は気付くクセに、自分に向けられる好意には疎い。

それに加えて、自分の体は左腕も右目も無いキズモノだから好意を向ける相手などいない、と思い込み尚更鈍感に磨きがかかっている。

主人公イラスト

> i 3 3 5 9 2 — 4 2 5 5 <

ヘタクソですみません・・・



## 自己紹介（前書き）

肌寒くなってきた季節。

皆さんは如何お過ごしですか？

作者は風邪をこじらせました。頭がぐわんぐわんします・・・

ようやく本編に入りました・・・

色々と思う所があると思いますが楽しんで読んでいただけたら嬉しいです。

## 自己紹介

黒羽 side

あの、モンド・グロツソでの事件から3年の年月が過ぎた。その3年の間に様々な事があつという間に流れていった。

俺はあの事件の後、約一年半もの間病院で過ごし、地獄のようなリハビリに耐えて、何とか剣を握るまでに回復した。

だが右腕の方も相当なダメージを負っていたらしく、3年経った今でも全盛期のように剣を振れない。

全盛期では一気に四回斬撃を放てたんだが、今では半分の二回しか一気に斬撃を放てない。

今の強さは片腕も失ったんで、全盛期のちょうど四分の一って所だろう。

今じゃ千冬さんと戦っても、良くて引き分けにしかならねえ・・・

そして、一夏がより一層力を求めるようになった。

どうやら俺がこんな事になったのも自分の責任だと思って背負いこんでいやる。

俺は気にしてないって言ってるんだが、一夏はまるで聞きやしねえ。

・・・

いつか無茶しねえか心配だな・・・

全く・・・困った幼馴染だぜ。

あ、あと一夏に惚れていた鈴が国に帰っちまった。

その時は俺がまだ入院していたから見送りの言葉を送る事ができなかった。

あいつとは友達として結構仲良くやっていたんだがなあ．．．  
残念だぜ．．．．．

とまあ、慌ただしくもあり、楽しくもあつた出来事ではあつたんだが．．．

そんな程度の出来事は、今まさに現在進行形で起こっている目の前の出来事に比べれば、新聞のコラム程度でしかない。

「はあ．．．．．なあ黒羽．．．ここだよな．．．．．」

「ああ．．．間違いなくここだ．．．．．」

どこかの超名門校を思わせる立派過ぎる校門。

西洋建築の豪邸を思い浮かべる校舎の外装。

軽く見渡すだけでもその全容をうかがい知る事ができない膨大な広さ。

俺達が目の前にしているこの施設の名は

『 I S 学園 ．．． ．．． 』

世界最強の兵器であるIS。

その兵器の搭乗者を鍛え、育成する唯一の教育機関。IS学園。

勿論、ここに入っているのは関係者のみ。

では何故俺達がここに居るのか。...

答えは至極単純明快。俺達も関係者。...というか、女性にしか反応しないISを俺達が動かしてしまっただからだ。

時を遡ること2ヶ月前。...

俺達も中学3年生になり、99%以上の中学生が否応なく経験する受験シーズンに身を投じていた時、俺達は私立藍越学園の試験会場である公共施設に行ったんだが。...

迷った。それも思いつきり。かつてない程に。

俺が着いていながら全く情けない。...

ここで来た道を引き返せば俺達の人生もまた変わっていたのかもしれないが、受験勉強でオカシクなった一夏が暴走し、「次に見つけたドアを開けるぞ！それでいたい正解なんだ！...見える！俺にもドアが見えるぞおお！！」って言うて突っ走っていきやがった

んだ．．．．

やっぱアレか．．．．俺と千冬さんがやった『ドキドキ夏文武両道計画！一夏を合格させるんDEATH！』が、相当キツかったんだろうな．．．．  
少し反省．．．．

と、話しがズレちゃったな。すまんすまん。

そして一夏は見つけたドアに何の躊躇いもなく入ったんだが、そこは監越ではなくIS学園の試験会場だった。

当然、IS学園の試験だからISは当たり前前に置いてある。

よく分からない物ほど触りたくなるのは男の子の性。

動く筈ないと分かっているながら俺達はISに触ったのだが．．．

．．

動いちゃった。

女性にしか反応しない筈のISが、何故か俺達に反応した。

それから試験官に見つかり、すぐさま試験に移り、連日テレビで報道され、世界各国から検査の嬉しいお誘いがあり、そいつ等の手から逃れるためにIS学園に入学。ってな感じでトントン拍子に事が進み、俺達はIS学園にいるって訳だ。

これで回想終わり。そろそろ話しに戻ろうか。

「黒羽．．．俺達のクラスってどこだっけ．．．？」

「クラスか？．．．ちょっと待ってる．．．．．ああ、あった。  
あった。」

ええと．．．一年一組だつてよ」

俺はカバンに手を突っ込んで所属クラスが載ってあるプリントを引っ張り出す。

一年一組か．．．．．一夏と“一”繋がりで良い感じじゃねえか。

「さつてと．．．．．んじゃま行きますか。  
入学初日から遅刻とか色々とマズイだろ」

「なあ黒羽．．．本当に行くのか？」

一夏の奴まだ渋っていやがるのか．．．

まあ、無理もないがな．．．．．

今までの日常からいきなり非日常に放り出され。

しかもそれが、ある意味俺達三人のトラウマであるISだもんな．．．

渋るのも仕方ないっか．．．．．

「お前の気持ちも分からんでもないが、ここが今の俺達にとって一番安全な場所なんだよ。」

実際問題、俺達は世界中のお尋ね者であり、研究者達が喉から手が出るほど欲しがっている実験動物だ。モルモット

相手は世界。たかだか高校生のガキが戦うのは些かデカすぎる」

「で．．．でもよ．．．．．」

「だから俺達はこの三年間で強くなる。心も体もな。権威や権力、権勢にも屈しない力を手に入れる。」

少なくとも俺はそうするぜ。

お前はどうするんだ？．．．．．織斑 一夏」

俺は敢えて一夏を“織斑 一夏”と呼び、問いかける。

ISの開発で世界は変わった。しかも劇的にだ。

そして、俺達の出現で世界はまた大きく変わろうとしている。

その時に必ず世界は動乱し、混乱し、うねり狂う。

その真っ只中に俺達は立たされるだろう。もちろん一夏もだ。

ならば、俺達は自分の立ち位置を自分で決めなきゃいけない。

他の誰でもない、自分自身の意志でだ。

このIS学園での三年間で俺達は強くなり確固たり立ち位置を築く。まだ早いと思うが、今ここで聞かなくちゃならねえ。

“織斑 一夏”の意志を。

「．．．．．分かった。」

俺もこの三年間で強くなる。

黒羽の言う“強さ”ってのはまだ俺には分からないけどさ。

この三年間でその“強さ”も理解して、必ず俺も強くなるよ」

ほお．．．．．いい面構えじゃねえか．．．．．

それに俺の言った“強さ”をただの腕つぶしだと勘違いもしてねえ。まあ、“強さ”の意味をただの腕つぶしの“強さ”だと思っていたら殴っていたがな．．．

一夏も随分と成長したじゃねえか．．．．．  
真っ直ぐと強い意志の込もった眼で俺を見てきやがった。

「よし、それでこそ俺の幼馴染だぜ。」

んじゃあ早くいくぞ。

これ以上のんびりしてたらマジで遅れちまう」

「ああ、行こう」

そして俺達はデッカイ校門をくぐり、広大な敷地を抜け、豪華な校舎の中へと入っていった．．．

それぞれに誓った想いを胸に刻んで．．．．．

~~~~~


で．．．俺達は早速一年一組の教室に行ったのだが．．．

（お．．．．．重い．．．．．っ！！）

教室の空気が異様に重い．．．

いや、“俺達の”と言った方がいいか．．．．．
それもそのはず。だってこの教室には

女子しかいないんだから．．．．．

いや、分かってはいたんだがなあ．．．

これは予想以上にツライぜ．．．．．

なんたつて俺達はこのIS学園では絶滅種とも捉えられる“男”だからな。

そしてその男の1人である一夏はイケメンの分類に入るほど格好いい。

それに物珍しさと相成って一夏には女子の熱い視線が送られているま、俺のナリはこんなだから一夏のような視線は送られねえだろう。（注意！！ 本人は全く分かっていません！！）

今はS H Rの時間だが、ここは慣れるしかねえだろう。
一夏。俺も頑張るからお前も頑張るんだぞ。

「はいっ。私はこのクラスの副担任、山田 真耶です」

目の前で女性特有の丸い可愛い文字を黒板に書くのは副担任の山田先生。

生徒達とそう変わらない体型、サイズが合っていない服、ずれたメガネ。

なんつーか・・・その姿は「背伸びをした子供」をイメージさせる。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「はい」

『・・』

って俺だけかよ！？

皆んなもうちよつと反応しようぜ

ああもっ！山田先生、そんな目をキラキラさせて俺を見てくださいー！！

「えっと、じゃあ最初のSHRは皆さんに自己紹介してもらいましょう」

そして始まる自己紹介。

あいっえお順からどんどんと進んでいき、やがて「お」の織斑になった。

だが一夏は．．．．．ありやダメだな．．．．．
女子の視線による機銃掃射で八チの巣状態。机に突っ伏していやがる。

「織斑くん、織斑くん、．．．．．織斑 一夏くん」

「はっ、はいっ」

見かねた山田先生が一夏の目の前にでる。
ようやく反応した一夏だったが驚いたのか、イスから大きな音をたてて立ち上がる。

そのせいで山田先生がすこし怯えちゃった。

「お、大声出しちゃってごめんなさい。
怒ってる？起こってるかな？」

ゴメンね、ゴメンね！

でもね、あのね、自己紹介って「あ」から始まって、今「お」の織斑くんなんだよね」

「つか山田先生怯えすぎだなあ．．．
あそこまで怯えられると、こっちの方も申し訳ない気持ちになってくる。」

「いや、あの、そんなに謝らなくても．．．
しますから、自己紹介しますから」

「ほ．．．本当ですか？ウソじゃありませんよね？ウソだったら先生泣いちゃいますよ？」

すでに涙声、涙目の状態でそんなこと言われてもなあ．．．
とりあえずは2人とも落ち着き、一夏は自己紹介するため皆んなの方に向き直る。

緊張しまくってすげえガチガチだな．．．
頑張れ頑張れ～～～

「えー．．．えっと、織斑 一夏です。
よろしく願います」

おいおいおい、たったそんだけか？
女子は「それだけ？」とか「他にないの？」っていう視線を飛ばしてきてるぞ。

ほら、どうすんだ一夏？

「その．．．．．以上ですっ」

『ガタツ！！！』

ま、そんな事を期待するだけ無駄か。

いや、ある意味では期待通りと言った方がいいのか？

それにしてもこのクラスはノリがいいなあ

机からズリ落ちて．．．まるで昔のお笑い番組みたいな反応だな。

．．．．．おや？なにやら見慣れた人が．．．．．

「挨拶もまともにできないのか馬鹿者」

これはこれは．．．．．なんと言うべきか．．．．．
黒でピシッと決めた千冬さんが現れた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

さっきのオドオドとしていた態度は何所へやら．．．
今は熱っぽい視線へとシフトチェンジしている山田先生。

「ああ山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

対する千冬さんも山田先生の質問に平然と答える。

あらら．．．一夏の奴 固まっちゃった．．．

「諸君。私がこのクラスの担任を務める織斑 千冬だ。

君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。

出来ない者には出来るまで指導してやる。

逆らってもいいが私の言う事は聞け。いいな」

そして、固まった一夏を華麗にスルーして、千冬さんは毅然とした表情で生徒に言い放つ。

「．．．．．き．．．．．」

き．．．．．？

「キャーーーー！！！！」

千冬様よ！本物の千冬様よ！！」

うおっ！？

なんだなんだ！？いきなり大声出しやがって！？

一瞬だが教室が揺れたぞ！？

「ずっとファンでした！！」

「お姉様に憧れてこの学園に来たんです!!」

「私、お姉様のためなら死ねます!!」

「お姉様のペットになりたいです!!」

これはアレか？

現役時代の千冬さんのファンってやつか？

まあ、あんなにカッコ良く戦っていた千冬さんに憧れるのも分からなくはないが・・・

一番下の奴!!お前は一体何を言い出すんだ!?

「全く・・・毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。それとも何か？私のクラスにだけ集中させているのか？」

あゝあ・・・あの表情はマジで鬱陶しいて思っている表情だ。人気が高いのも考え物ですね。千冬さん。

「きやあああああつ!!」

お姉様!もつと叱って!罵って!!」

「でも時には優しくして!」

「そしてつけあがらないように躑をして!」

「く・・・首輪を・・・（ハアハア）」

おおい！！こいつ首輪を持参してきてるぞ！！
なんかもう怖えよ！誰かつまみ出せよ！！

「　　ち．．．千冬姉．．．．．なんで．．．．．」

ようやく思考の伝達回路が修復したのか、一夏が声をかける。
だがなあ一夏．．．千冬さんは公私の区別をくつきりと分ける人なのは　お前もよく知ってるだろ．．．．．
そんな家にいる時みたいな口調で話せば．．．．．

「学校では織斑先生と呼べ。馬鹿者」

パン！！

ほらな、叩かれた。

「．．．．．はい、織斑先生．．．．．」

一夏も分かったらしく、頭を押さえながらではあるが頷いた。
てかアレ痛そうだな．．．．．
俺もやられないよう注意しとこ．．．．．
一夏と千冬さんが姉弟なのを知り、クラスの女子が多少ざわついた

が、滞りなく自己紹介は進んでいく。

すこし高飛車な金髪のお嬢さま。

それと．．．お、箒もいたのか！！懐かしいなあ．．．手を振ってやろう．．．．．

「次。真鴉 黒羽」

おっと、自己紹介も俺の番か。

どれ、不甲斐ない一夏に代わって俺がいつちやるか．．．
心なしか女子の目にも期待の色が見えている。
その期待に応えてやるとするか。

「真鴉 黒羽だ。そこにいる一夏や織斑先生とは子供の頃からの付き合いだ。

趣味は剣術と料理。特技は潜入活動スニッキングや破壊工作サボタージュ、その他諸々etc．

．．
ちなみにこの左腕は世紀末霸王との間に繰り広げた死闘の際に失い、
右目は直死の魔眼なので眼帯で封じている。
皆んなくれぐれも注意してくれ。以上」

「なに真顔でしれっと嘘言っている」

パシッ

イテテ．．．叩かれちゃった．．．．．
でもあまり痛くない。

一夏の自己紹介のヘマもあつたんで大目にみてくれたんだろう。
女子の方も何人が笑ってくれてる人達もいるしな。

「なんだ？特技が潜入活動スニッキングや破壊工作サボタージュつて．．．．．
お前だと出来そうだから妙に説得力がある。
それに世紀末霸王だの直死の魔眼だの．．．
そんな嘘 誰が信じるんだ？」

「えっ！？今の嘘だったんですか！？
どこからどこまでが嘘なんですか！？」

千冬さん．．．ここに信じてる人がいますよ．．．．．
てか山田先生．．．言った俺が言うのもアレなんです、こんな嘘
信じちゃダメでしょう．．．．．

「と言う事で黒羽。やり直せ」

マジか．．．一体どこがダメだったんだ？
特技の部分は本当に出来るから問題ないとして．．．．．
やっぱアレか、世紀末や直死の部分がダメだったのか？
うーん．．．．．よし、直死の魔眼は危ないから写輪眼で
ってオーケーオーケー！！分かった、分かったからその縦にして
振り下ろそうとしている出席簿をしまつてくれ千冬さん。
ちゃんと真面目にやりますよ。

「じゃあ、特技の部分は銃弾避けと鉄塊斬りに変更。
左腕と右目は．．．．．まあ事故で失ったようなもんだ。
これから一年間、クラスメイトとして宜しく頼むわ」

『よろしく〜！！』

歓迎の声、賑やかに鳴る拍手。

どうやら女子達には受け入れられたみたいだ。

どうだ一夏。これが　　っておいおい．．．

まゝた苦い顔してらあ．．．

アノ事故は自分のせいってか？

全く．．．ズルズルと引きずりやがって．．．．．バカ野郎が．

．．．．．

「よし、これで自己紹介は終わったな。

これでSHRは終わりだ。

諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらっ！！

そのあと実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。

いいか。

いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。

私の言葉には返事をしろ」

まるで軍隊の教官のような言葉を生徒に言い放つ千冬さん。
まあ当たり前だよな。

ISに関わるということは軍隊に関わるということだ。

なんたつて世界のパワーバランスを担っているんだからな。

“力”持つ者にはそれ相応の責任が必要だ。

それを分かっているのか、生徒達も表情を真剣なものにさせる。
安心したぜ．．．これで普通の女子校みたいな軽いノリだったら俺
がブチ切れていたところだ。

そして俺達はIS学園で初めての授業を受けた．．．．

自己紹介（後書き）

全然話が進まない・・・
早くセシリアとの決闘を始めたい・・・

己が罪・・・（前書き）

進まない・・・全然本編が進まない・・・

己が罪・・・

黒羽 side

ハラハラ ワクワクな・・・でもないか・・・
とりあえず、バタバタと慌ただしい自己紹介タイムも終わり、IS
学園で初めての授業を受けた。

丁度 今は一時限目が終わって休み時間だ。

「どうだった一夏？

大丈夫そう・・・じゃないな・・・」

「く・・・黒羽・・・」

一夏はまるで糸が切れた人形のようにグデゥっとなって、机に自分の体を広げる。

まあ無理もないか・・・

ここはIS学園。当然の事ながら授業内容はISの事に関するものだ。

ハッキリ言って授業内容は超難しい。

反重力物理学やらエネルギー流動法則やら・・・どこかの専門大学・・・いや、大学院レベルの単語や定理がポンポンと湯水のように出てくる出てくる。

かく言う俺もノートに書くだけで精一杯。

あとで自習をしないといけないな・・・

だが、一夏の状態の原因は なにも授業内容だけじゃない。

「じょ．．．女子の視線が．．．．．」

「やっぱりか．．．．．」

そう、一番の原因は俺たちを見つめる視線。

別に嫌悪といった視線ではない。寧ろ 友好的な視線だ。

だが、その視線も高密度に、長時間も向けられたら流石に辛いものがある。

特に一夏にはそのルックスと千冬さんの弟という情報も加わって視線を集めている。

「ちよつといいか？」

そんな状況にため息をはこうとした瞬間、突然声をかけられた。俺たちは振り返ってみると．．．．．

「ほ．．．箒か．．．．．？」

一夏が驚きの声をあげる。

やっぱり自己紹介の時なにも聞いていなかったな．．．
声をかけた主は俺たちの幼馴染の篠ノ之 箒だった。

「よお箒。随分と久し振りだな」

「はい、師しよ　ゴホン。」

「そうだな、黒羽」

お、箒も俺を師匠と呼ぶのをやめたか！

6年の年月で箒もようやく分かってくれた。

逆に師匠と呼ばれたらどうしようか迷っていたところだ。

「そうかそうか！箒も俺を師匠と呼ぶのをやめたか！偉いぞ箒！！」

「わ、こら！頭を撫でるな！」

おっと、ついクセで頭を撫でてしまった。

箒も年頃な女の子だからな。少し短慮だったな。

「済まん済まん。思わずやってしまった。

箒もそういうお年頃だからな。

それに、俺じゃなくて一夏に撫でてほしいんだろ？」

最後の方は箒にしか聞こえないくらいの小声で話す。

俺が頭を撫でた瞬間、僅かだが箒は一夏の方を見ていたからな。

6年の年月を経ても恋は変わらず・・・か・・・

青春だねえ」

「な！？・・・ななな、何をバカな事を言っている！？」

俺の言葉を聞いた篤は面白いように顔を真っ赤にして狼狽える。
ははは、そんな大声出すと一夏に気付かれるぞ？

「篤？いきなり大声出してどうしたんだ？」

「気にすんな一夏。篤が少し一夏と話しがしたいんだとよ」

「お、おい黒羽！！」

いきなり2人つきりは緊張するか？

篤はかなり慌てだした。

だがなあ篤・・・もう少し積極的にかねーと、この朴念仁相手じゃ60歳いっても気付かねーぞ？

「まあまあ篤。折角こうして再会したんだ。

これをチャンスに“運命の再会”を印象付けて一夏にポイントを稼いどけ」

「だ・・・だがな・・・・・・私にも心の準備というものが・・・」

「そんなんでいいのか？よく聞けよ箒。」

このIS学園は俺と一夏を除けば女子しかない。

そして一夏のルックスも良いときた。

お前より積極的な女子が現れれば一夏はあつという間に取られるぞ？

この学園には美少女が多いからな」

俺は先程と同じように小声で箒に語りかける。

すると、箒の顔はみるみると血相を変えていった。

一夏が他の女子と仲良くしている場面を想像したんだろう。

いいねえ〜・・・純情だねえ〜・・・

「・・・一夏・・・ちょっと来てくれ・・・

場所は・・・廊下でいいか？」

お、ようやく決心したか。

箒にしちゃあ上出来じゃねえか。

よし、あとでご褒美として卵焼きを作ってやろう。

「え？別にいいけど・・・って黒羽は？」

このバカ野郎が・・・

なんでこの場面でその言葉が出せんだよ・・・

箒の気持ちを1ミクロンでも理解すればそんな言葉ださねえだろうが・・・

「俺は後でいいんだよ。
ほら、さっさと行きやがれ」

俺は足で一夏を小突きながら廊下に行けと促す。
箒の気持ちを無駄にする訳にはいけないからな。

「イテテ、分かったから小突くなよ．．．
それじゃあちよつと行ってくる」

渋々といった様子だが一夏は教室を出た。
全く．．．箒が不憫すぎてならないぜ．．．．．

「黒羽．．．その．．．あ、ありがとう」

「ん。気にすんな。これ位どうってことない。
ほら、箒も早く行きな。貴重な時間が減ってくぞ」

「ああ、分かった」

一夏と2人つきりなのが よつぽど嬉しいみたいだな。
箒はまるでルンルンと聞こえそうな足取りで一夏に着いて行った。
恋せよ乙女。頑張れ乙女。
俺は事の成り行きを見守るとするか．．．

「ふう．．．．．さて．．．．．」

突然だがここで問題。

この大量の視線を二分していた一夏が筈と一緒に رفتちまった。
今やこの場に男は俺ただ一人。

となるとこの視線．．．もとい、女子の関心はどうなる？

『ジ〜〜〜．．．．．』

答えは簡単。女子の視線は俺だけに注がれる事になった。

これは落ち着かねえな．．．

このままズルズルと引きずれば女子の視線が止む事はない。

これからのためにも俺がなんとかするしかないか．．．．．

「皆んな。そんなにジロジロと年頃の女の子に見つめられたら俺も
流石に困る。」

丁度今は休み時間だ。

俺に聞きたい事、質問したい事があればドンドン言ってくれ。

時間はそこまで多くはないが、可能な限り答えよう。

皆んなとの親睦を深めさせてくれないか？」

俺はクラス中の女子を見渡して宣言する。

少し芝居がかっていたか？

あまり慣れない事をするもんじゃないな．．．

『
．．．．．
．．．．．』

クラスのみんなは俺の言葉を聞くなりシーンと静まり返った。
だけどそれは悪い方の静けさじゃない。

俺の言葉を頭で再認識しているといった感じだな。

そして、ようやく頭の整理が終わると、目をキラキラと輝かせて
．
．．．．

「じゃ、じゃあ私から!!」

「あ、ズルい!私が先だよ!!」

まるで雪崩を思わせるような勢いでみんなが俺に殺到した。
てか多すぎだな．．．

これじゃあ話しもまともに聞けねえ．．．．

「はいはいみんな落ち着いて落ち着いて。」

そんなに一辺に話されちゃあ答えれるもんも答えれねえ。

まずは順番。1人ずつで頼む。

それじゃあ最初は君から」

なだれ込むみんなをまずは落ち着かせて、近くにいた女子から質問

を促す。

思いの外、他の皆んなも分かってくれたようで 不満を言う事はなかった。

皆んな結構 聞き分けのいい子達だな・・・

「それじゃあ私から・・・

真鴉くんの事はなんて呼べばいい？」

「別に真鴉でも黒羽でも構わない。

いつその事 愛称をつけてもいいぞ。

悪意ある愛称以外は許す。気軽に呼んでくれ。
それじゃあ次」

「はいはい私！

さつき篠ノ之さんと話しをしてたけど2人は知り合いなの？」

「筈とは小さい頃からの知り合いだ。

自己紹介の時も言ったが、一夏と織斑先生とも小さい頃からの仲だ。
いわゆる幼馴染ってやつだな」

「つぎ私！

黒羽くんの好きなタイプはなんですか？」

好きなタイプか・・・

やっぱアレか・・・女の子は色恋沙汰に敏感なのか？

「そうだな・・・今まで考えた事もなかった・・・

よし、これから探すとしよう。
質問の答えはそれでいいかな？」

俺の言葉を聞いたみんなは『ボールゾーンなし．．．．．』と
言ってメモを書いていた。
一体どうしたんだ？

「それじゃあ私がカーくんに質問するね」

はて．．．カーくんとな？

「それは俺のことかな？」

「そだよ。真鴉の鴉でカーくんだよ。
あ、私の名前は布仏 本音だよ。
よろしく」

異様に袖丈が長い手で握手をしてきた本音。
その間延びた声と眠たそうにしている雰囲気は のほほん を想
像させる。

「早速愛称で呼ぶか．．．
いいねえ、こちらこそよろしく。
で、質問するのは？」

「さっき自己紹介で趣味は料理って言ってたでしょ？」
カーくんの作る料理は美味しいの？」

「そうだな．．．．．振る舞ってきた人達には不味いと言われた事はない。

よし、今度皆さんにご馳走しよう。

美味しいと言ってもらえて笑顔になるのが俺が一番好きだからな」

料理は本当に素晴らしい。

相手の事を考えて作らないと美味しくならないし、それを喜んでもらえた時の笑顔はとても嬉しい。

自然と俺の顔からも笑みが零れる．．．．．

『．．．．．
．／／／
』

すると、突然みんなが静かになりだし顔を少し赤らめる。
はて？一体どうしたんだ？

「なあ本音。みんなはどうしたんだ？」

俺は唯一いつも通りの本音に聞いてみる。

「それはね、カーくんがとてもいい笑顔だったからだよ。」
私も少しカッコイイって思っちゃった」

「そうなのか？ありがとう？」

なんかよく分からないが、褒められたらしい。
とりあえずお礼だけは言っておこう。

黒羽は全く知らないが、皆んなに見せた笑顔はとても魅力的な笑顔だった。

着けてある眼帯の刺々しい雰囲気から優しい雰囲気になり、そのギヤップにクラスの皆んなは見惚れしまったのだ。

「あやや、カーくんは朴念仁さんか・・・」

本音がボソツと漏らすが、その小声は黒羽の耳に届く事はなかった。

side out

黒羽がクラスの皆んなから質問されていた同時刻、第と一夏は教室の喧騒から離れて2人つきりになっていた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

．．．．．

だが、お互いは一言も喋らず黙したままだった。

箒は意中の人と２人つきりで頭が軽いパニック状態に陥ってしまい何を話せばいいのかわからなくなってしまう、

一夏はただ、呼び出したのは箒だから最初に喋るのも箒だろう。と思案して黙っているだけだった。

この場に黒羽がいたら、「女の子に先に喋らすなんて何を考えていやがる！まずはお前から喋れ！」と、叱喝していただろうが、いない人の事を言ってもどうしようもない．．．．．

「一夏．．．その、元気だったか．．．．．？」

沈黙に耐え切れなくなったのか．．．

はたまた面白い人と話す時間が減っていくのを焦ったのか．．．この空間の第一声は箒だった。

「ああ、元気．．．だな。今は．．．．．」

一夏も答えようとした瞬間に言い淀んだ。

「元気だったか？」この言葉を聞いて一夏は反射的に過去を思い返してしまった。

その過去を占める大半の記憶が、アノ事件．．．．．

自分の無力さ故に起こってしまった事件。

自分の心の弱さ故に死に瀕した師であり兄である大親友。

無数のチューブが体に巻きつけられ死んだように眠る光景．．．

．．．
今でもその光景は鮮明に．．．まるで忘れてはならない罪状のように脳裏に焼き付いて離れない。

そして繰り返す後悔と自責の念に駆られる日々。

答えの出ない自問と自答。

やり場の無い怒りと、執拗に求めた力。

まるで抜き身の刀のような雰囲気をそこら中に振り撒き、中学では【狂犬】なんてアダ名も付けられた。

そんな事を約半年前までやっていたのだ。

箒の問いに“今は”を付けるのが一番の正解だと思っただろう。

「つと．．．それより、去年の剣道の全国大会で優勝したんだってな。

おめでとう箒」

だが、それは自身の罪科であって他の人に見せる物ではない。

それを分かっている一夏は咄嗟に話題を転換する。

「なっ．．．なんでそんなこと知ってるんだ!？」

幸いな事に箒には気付かれなかったみたいだ。

いや、思い人の賞賛の言葉に気付けなかったんだろう。

これぞ、恋は盲目・・・少し意味が違うな・・・

「なんでって・・・新聞で見たし・・・」

「なぜ新聞なんか読んでいる!？」

はたから見ればメチャクチャな言葉だろうな・・・
それとも箒は一夏が新聞を読まない奴だと認識してたのだろうか・・・?

「なぜって言われてもなあ・・・」

流石にそんなムチャな質問を答える術を持たない一夏は多少呆れた表情をしながらため息をはいく。

そこからまた最初と同じように沈黙が続いてしまった。
だが、またしてもその沈黙を箒が破った。

「なあ一夏・・・黒羽に何があつたんだ？」

だけどソレは踏んではならない地雷だった。
いや、彼女からしたら どうしても聞かなければいけない事柄だろう。

一夏が黒羽を家族と思っているように、箒にとっても黒羽は大事な家族なのだ。

自分に剣を教えてくれた人で、いつかその背中に並び、そして超えたいと思い、困った時には真摯に相談にのってくれた大事な大事な兄貴分。

その彼に会った時、“嬉しさ”の感情よりも“何故？”の感情が強かった。

右目に着けた眼帯、左肩から先が無い腕。

この6年間で痛々しく変わった彼に一体何があったのか？

その答えは一夏や千冬なら知っているはず。

だからこそ彼女は一夏に問うた。

踏んではならない地雷だと分かりながらも．．．．．

「っ．．．．．あれは．．．．．全部、俺が悪いんだ．．．．．っ」

苦虫を噛み潰したような．．．なんてもんじゃない。

まるで自分の傷を掻き毟って決るような苦痛の表情を一夏は浮かべる。

「なんでもない」なんて誤魔化しが言えればなんと楽なことか．．．

．．．
だけど一夏は言わない。断じて言わない、言ってはいけない。

そう言ってしまったら　きっと彼の心の中にあるナニカが根元から瓦解するだろう。

でも全ては言えない。アノ事は黒羽も関わっているのだ。

自分1人が軽々しく全てを語ってはいけない。

だから一夏は全てを肯定するしかなかった。

自分の過ちを．．．自分の罪を．．．．．

キンコーンカーンコーン

この海の底のような重たい空気が漂うなか、場違いな軽いチャイム音が鳴り響いた。

それを聞いて他の生徒達も次々と自分達の教室に戻っていく。

「そろそろ . . . 戻るか」

「ああ . . . そうだな」

それに少し遅れて一夏たちが歩き出す。

筈は思い人の力になれない自分の不甲斐なさに苛まれ、一夏は自身自身の無力を呪いながら

2人はどんよりとした雰囲気を出しながら教室へと向かった . . .

. . .

己が罪・・・（後書き）

長くなりそうだったので一旦区切ります。

字数多くしたいな・・・

でも今書いているネギま！が忙しい・・・

変な電波を受信してゼロの使い魔もストックを貯めてるし・・・

そしてPSSのダークソウルがメツチャムズイ！！

いやぁ・・・一夏が思い詰めてますね・・・

そしてそれを乗り越えて強くなる一夏。

黒羽より主人公っぽいな・・・

開幕の鐘（前書き）

筆が進んだので投稿します。

原作を買いました！！一巻だけですけど・・・

これで支離滅裂な話しは書かない・・・はず・・・

開幕の鐘

黒羽 side

ふう．．．皆んなの質問が終わって今は二時限目だ。
少しは皆んなと仲良くなれて、あの大質量の視線は驚くほど激減した。

だが、教室に戻ってきたアノ２人の雰囲気がムチャクチャ沈んでいやがった．．．．．
一夏の様子から察するに俺の傷絡みだな．．．
はあ．．．なんとか出来んもんかね．．．．．？

「　　と言うことで、ISは最初　宇宙進出を目的にして発明されたんですが、当初は一笑に付されました。
ですが、白騎士事件を発端に各国はISを兵器として着目。
今ではアラスカ条約制定によってスポーツのイメージが強いものになっていきますね」

つと、今は授業中だったな．．．
考え事しながら授業内容を覚えるなんて偉業は俺にはできない。
今は授業に集中しねえと．．．．．

「これでISの大まかな成り立ちは終わりです。
早速教科書に移りましょう。
テキストの７ページを開いてください」

最初は簡単な歴史だったんだが、今は超難解な単語や方程式が右へ左へと飛び交う。

かああ！！まだ7ページでなんでこんな難しいんだああ！？

「それじゃあ　ここまでで分からない人はいますか？」

山田先生の言葉に誰も手を上げない。

まあ、そりゃそうだよな・・・
皆んな予習ぐら

「先生・・・分かりません」

と思いきや手を上げた人物がいた・・・
つと言つても一夏だがな。

お、少しだが鬱オーラが弱まっている。

「どこが分からないんですか？織斑くん？」

「えーと・・・正直に言ってもいいですか？」

「どうぞどうぞ遠慮なく！
なんたつて私は先生なんですから！！」

頼られるのが嬉しいのか、山田先生は先生の部分を強調してエッヘンと胸を張る。

その姿や行動だと先生には見えませんよって言ったら山田先生が泣きそうだから止めておこう。

「その．．．全部です」

「へ？」

次の瞬間、山田先生の自信は一夏の言葉の前に木っ端微塵に砕け散った。

流石が一夏！俺たちに出来ない事を平然とやってのける！！
そこにシビレもしないし憧れない！！

「全部って．．．．．」

「はい。全部です」

山田先生は確認のためにもう一回聞くが、一夏の言葉は変わらない。
と言うか、なに一回目より自信満々で言ってたんだよ．．．

「その．．．．．真鴉くんはどうですか？」

やっぱり一夏がコレだから俺もそうだと思われるわな．．．
つか、なんでオメエは仲間を見るような視線で俺を見るんだよ一夏。

残念ながら俺はオメエとは違うんだよ。

「いえ、大丈夫です。

確かに難しいですが、ノートに書いているので後で自習しますし、それでも分からなかったら先生に聞きますんで」

「そうですか．．．良かったあ．．．．．」

俺の言葉を聞いて、山田先生は安堵の声を漏らす。

「．．．なんでだ．．．．．?」

そして一夏よ．．．．．

お前はなんで裏切られたような視線を俺に向けるんだ?

よし、あとで私刑．．．もとい、鍛錬をしてやろう．．．

この学園には道場もあつたはずだからな。

うし、腕が鳴るぜ．．．．．

「入学前に参考書を渡しただろう。読まなかったのか?」

すると、突然 千冬さんがやってきた。

参考書というのはIS学園に入るにあたっての、学園規則から始まり、ISに関しての知識がビッシリと網羅している物だ。俺がなんとか頑張っているのも、この参考書によるところが強い。ちなみに参考書は物凄くブ厚い。

タウ ページとなんら遜色ないほどの厚さだった。

「参考書？．．．．．参考書ってなんだ黒羽？」

「ほらアレだ、タウ ページだ」

「ああアレか！資源ゴミの日に捨てちまった！」

「この馬鹿者！！」

一夏の言葉と同時に振り下ろされる出席簿。

千冬さんの表情は、さながら般若の如くだった。

．．．今さっき思ったんだが、なんであの出席簿は原型を留めていられるんだ？

あんだけスゴイ破壊力を実現しながらヘコんですらないなんて．．．．．

材質が特別なのか？

それとも千冬さんクオリティーなのか？

うん、分からないな．．．．．

「ちゃんと必読と書いてあった筈だ。

あとで再発行してやるから一週間で覚えろ。
いいな？」

「いや、でも千冬ね．．．織斑先生、それは流石に」

「いいな？」

「．．．．．ハイ。織斑センセイ．．．．．」

疑問文という名の命令に、一夏は従うしかなかった。

一夏の今の心情は、「理不尽」ってところか？

うーん．．．一夏の気持ちも分からなくはないが、俺達は社会という集団で生きてかなくちゃいけないんだ。

それが、望む望まないに関わらずな。

それが嫌なら仙人か修行僧にでもなるしかねえんだ。

「なあ一夏。

人とは集団の生き物なんだ。

お前は「好きでここにいていい訳じゃない」と思ってるかもしれんが、人生なんて理不尽の塊さ。

今の状況をヤダヤダと言っているのは子供だけだ。

どう理不尽な事に出会わないのか．．．ってのも大事だと思うが、今ある理不尽をどう楽しむのか．．．ってのが、俺が一番大事だと思うぜ？」

「黒羽．．．．．」

気付いたら俺は一夏に語りかけていた。

千冬さんに注意されると思ったが、千冬さんは腕を組んで聞きに徹

している。

山田先生やクラスの皆さんも耳を傾けていた。

よし、それならいっその事 最後まで言ってみるか。

「それに、今でこそスポーツという形で落ち着いているが、ISは立派な兵器だ。

正しい知識、運用方法、兵器であるという認識。

それらを理解しなきゃ重大な事故 事件に繋がる。

そうなれば自分自身、或いは大切な人を傷付ける事になっちまう。
お前はそうなってもいいのか？」

「っ！！・・・。。。。それは・・・。。っ」

一夏が思ったのはおそらくアノ事件。

古傷を抉るような真似はしたくないが、一夏に発破をかけるならこれほどピッタリな言葉はない。

「・・・。。。。分かった。。。。」

織斑先生、あとで参考書を受け取りにいきます。

ちゃんと一週間で覚えますから」

一夏は目に見えてヤル気を出し、その眼には一種の決意の炎が宿っていた。

よし、発破がけは成功したぜ。

「流石だ一夏　　っと、授業中の勝手な私語、済みませんでした。
山田先生、織斑先生」

「気にするな。お前が言っていなかったら私が言っていたからな」

「そ、そうですよ！

それに．．．すこしカッコ良かったですし．．．．．」

ん？山田先生の言葉が最後まで聞き取れなかった。

それに、何故クラスの皆んなまで顔を赤くしてるんだ？

もしかして風邪か？季節の変わり目は体調を崩しやすいからな。保健室に行かなきゃ駄目だぞ？

ツン、ツン．．．．．

そう思っていると、隣の女子から突つかれた。
はて？なんか言いたい事でもあるのか？

「どうしたんだ？」

「さっきの真鴉くん、カッコ良かったよ。
思わず胸にジーンときちゃった」

「さっき．．．ああ、一夏に言ったアレか。
寧ろ変じゃなかったか？キザ過ぎるだろ」

「そんな事ないよ。」

なんかこう．．．ISが兵器なんだって、改めて実感して、一層気が引き締まったよ。

あ、私の名前は鷹月 静寐。よろしくね、真鴉くん」

俺は否定するが、静寐は賞賛の声をやめない。

なんだかなあ．．．こういうのはこそばゆいな．．．

「真鴉くんを最初見たとき、眼帯着けてて怖そうだなあ、て思ってたけど、休み時間の時やさっきの言葉を聞いて、見た目と全然違うんだなって思った。

なんかこう．．．頼れるお兄さんって感じ？」

お兄さんか．．．

確かに精神年齢では圧倒的に上だからそう見られるか。
体は一応同年齢だから、あまり思われたくないが．．．

「はは、そいつはどうも。」

つと、授業に集中しねえと。

織斑先生に叩かれちまうぞ」

「そ、そうだね．．．

私もアレは勘弁したい．．．」

俺達は話しを区切って授業に集中した。

くそ．．．やっぱ難しい．．．．．
これは徹夜コース決定だな．．．．．

~~~~~

「　　ちよつとよろしくって？」

「へ？」

「ん？」

二時限目も終わり、異国の言葉と聞き違うかのような難解語の嵐も過ぎ去ったかと思つたら、突如声をかけられた。

声をかけた相手は、僅かにロールがかつたキレイな金髪が特徴の女子だった。

たしか名前はセシリア・オルコットだったけ．．．

腰に手を当てる俺達を見るその様は、女尊男卑社会が生み出した『いかに』現代の女子だった。

この雰囲気．．．実際は良いところの身分．．．お嬢様なんかじゃないのか？

「訊いてますの？お返事は？」

どうやら素っ頓狂な声を出して返事をした一夏がお気に召さなかつ

たらしく、今や一夏の方に視線を向けている。  
それを見て他のクラスメイトも聞き耳を立てた。  
はあ．．．なんかメンドくさい事になりそ．．．

「あ、ああ。訊いてるけど．．．．．どういう用件だ？」

一夏もこつこつという手合いは苦手だからな。  
返事がつい　ぶっきらぼうになる。  
それを聞いた彼女は　かなりワザとらしく声をあげた。

「まあ！なんですよ　そのお返事。  
わたくしに声をかけられるだけでも幸運なのですから　それ相應の  
態度というものがあるんじゃないかしら？」

「．．．．．」

あゝあ、一夏のやつ絶対にため息はいているな。  
まあ、あんなこと言われれば仕方ないっか．．．

「悪いな。俺　君が誰だか知らないし．．．」

やっぱり自己紹介の時に何も聞いていなかったか．．．  
千冬さんが担任の先生だったのが相当　衝撃だったんだな。  
実際俺も衝撃的だったし。

一夏は率直な気持ちを伝えるが、彼女はまるで信じられないものを見るかのような目であからさまにため息をはいた。

「はぁ．．．信じられせんわ．．．．．  
その貴方。貴方ならわたくしをご存知ですわよね？」

おいおい．．．なんで俺に聞くんた．．．．．  
こういう手合いはあまり関わりたくないんだがな．．．．．  
自己紹介の時に言ったといえさ、まずは自分から名乗るってのが礼儀じゃねえのか？  
礼を失する相手の名前を答えてやるほど俺は優しくないんだぜ。

「ああ知ってるぞ。  
確か セシ．．．セシリ．．．セ．．．．．クロワツさんだよな」

「なっ！？」

「黒輪さん？外国人なのに日本の苗字使ってるんだ？珍しいな．．．  
．．．」

「違う違う一夏。黒輪さんじゃなくてクロワツ“さん”だよ。  
ちゃんと『ッ』を付けるのを忘れるな。  
あと『さん』のアクセントにも気を付けろよ？」

「違いますわ！！あと一文字の所でどうして そんな変な名前が出てくるんですの！？」

貴方ワザと間違えましたわね！？  
わたくしの名前はセシリア・オルコット。  
イギリスの代表候補生ですわ！！」

机をバンツて叩きながら物凄い剣幕で怒鳴るクロワツ．．．もとい  
セシリア。

どうでもいいが、手 痛くないのかな？

ん？一夏の頭にクエスチョンマークが浮かんでる。  
なんか分からない事でもあったのか？

「なあ、質問いいか？」

「ふん。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしく  
てよ」

へえ．．．本当に貴族だったんだ．．．流石イギリス。

オルコットか．．．．．あとでGo g l e 先生に頼んで検索  
でもしてみつか．．．．．

でもな貴族さんよ．．．一夏は俺達の遙か斜め上をいく男なんだぜ。  
そんな安請け合いしちまうと．．．．．

「代表候補生って、何？」

ガタタツ！！

あ、聞き耳を立てていたクラスの子が数名ずつこけた。  
セシリアにいたっては人間を見る目じゃねえぞ．．．．  
仕方ない．．．ここは助け舟を出すか．．．．

「一夏。代表候補生つてのは、国家代表IS操縦者の候補生つてことだ。

参考書にかいてあ．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
まあその．．．いわゆるエリートってやつだな」

「おお、そうだったのか！」

「そう！エリートなのですわ！！」

お、復活した。

できれば してほしくなかったけど．．．

「本来なら、わたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくすることだけでも奇跡．．．幸運なのよ？  
その現実をもう少し理解していただける？」

おい待て．．．．

コイツは今なんつった．．．．？

選ばれた人間？幸運だと？

なんだよその選民思想．．．

勝手に自分の価値観を他人に強要してんじゃねえよ．．．  
人の幸福は人の数によって違うんだよ．．．  
それを強要するなんて、侵略行為となんら変わらねえじゃねえか．  
．．．

「お、おい．．．それ以上言うと黒羽が」

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。

男でISを操縦できると聞いていましたから、少しは知的さを感じさせるかと思っていま」

「話しの途中で悪いが、ちょっといいかな？」

いけない　いけない．．．  
つい頭に血がのぼった．．．  
ここで怒っちまったら色々と面倒だ．．．  
少し冷静になれ．．．

「一夏をあまり責めないでくれるか？

確かに俺達はISの知識は皆んなより低い。

それは、君たち女の子が以前からISの知識を学び、俺達にはその機会が無かった所によるものが強い。

言い訳のように感じるかもしれないが．．．

だが、知らなければ学ぶというのが人間の美德だ。

今はまだ俺達二人とも未熟者だが、これから皆んなと一緒に学んで、皆んなに追い付きたいと思っている。



判定を下すにしては、今は時期尚早だと思わないか？」

「黒羽．．．．．」

「ただし、参考書を捨てた件は大きな減点だがな。  
寧ろ もっと怒られてもいい」

「グッ．．．．．相変わらず辛辣なお言葉で．．．．．」

当たり前だ。

俺はどちらの味方でもないから お互いの非を注意するぞ。  
その方が余計なわだかまりを抱えなくて済むからな。

「．．．ふん．．．．．確か真鴉さんでしたっけ？

殿方にしては随分と立派な方ですね。少なくとも隣にいる方よりも．．．ですけど。

いいですね。確かに判断を下すのは些か時期尚早というものですわね。

今回は貴方のご高説に免じて退いてあげますわ」

まるで値踏みするような視線を俺に向けたあと、彼女は自分の席に戻っていった。

ふう．．．ようやく戻ったか．．．．．  
だがその前に．．．．．

「一つ、忠告しておこう．．．

あまり人を見下すような言動はしない方がいい。

それと、自分の価値観を他人に押し付けるな。

人の幸せは人それぞれだからな。

でないと、怒らせなくていい奴を怒らせる事になるぞ」

「．．．そう．．．．．」

心の片隅にでも置いておきますわ．．．．．」

セシリアはまるで興味が無いとばかりにそう言って、振り向きもせず自分の席に座った。

「はああ．．．．．」

焦ったああ．．．．．

オルコットさんがあ言った時スゴイ焦ったぞ。

黒羽を怒らせた！ってね。

それにしても、よく怒らなかつたな？」

「俺は人斬り包丁か何かか？

そんなにホイホイと怒ったりしねーよ。

入学初日でキレルとかしたくねーしな。

みんなとは仲良くしたいからよ。

それに、一応忠告はしておいた。

向こうはそれを聞いたか分からねーけどな」

「そうか．．．ひとまずは安心だ。

黒羽が怒ったら空気が重くなるからな。

アレはできれば受けたくない．．．．．」

「ははは、大丈夫だ。安心しとけ。」

ただし、次はねえけどな・・・」

俺の最後の言葉はチャイムにかき消されて一夏に届く事は無かった。  
そして、ソレが現実になる事は誰も知らなかった・・・  
.

~~~~~

「
それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性につい

て説明する」

ところ変わって三時限目。

一、二時限目とは違って千冬さんが教壇に立っている。

よっぽど大事な事なのか、山田先生までノートを持っていた。

やっぱアレか。世界最強に登りつめた人の知識は伊達じゃないんだな。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな・・・」

ふと、思い出したように千冬さんが言う。

クラス代表者つてのは・・・まあクラス長なもんだ。

ほら、小学校とかでもあつたら？委員長とか色んな名前で。

ちなみに隣にいる一夏は ちんぷんかんぷんな表情をしていた。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。

対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・ま

あクラス長だな。

一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

一夏の様子を察したのか千冬さんが補足を加える。

そしてざわめき立つクラスの皆んな。

なんかイヤな予感が・・・

「ハイハイ！織斑くんを推薦します！」

「私は真鴉くんを推薦します！」

やっぱりそうなるか・・・
メンドクせーな・・・なんとかして一夏に押し付けられねーかな・・・
・・・

「では候補者は織斑 一夏と、真鴉 黒羽・・・他にはいないか？
自薦他薦は問わないぞ」

「え！？お、俺！？」

「織斑、席に着け邪魔だ」

ようやく事態が飲み込めたのか、立ち上がる一夏。
それと同時に振り下ろされる出席簿。
見事なテンポの良さ。これだけ見るとコントみたいだな。

「自薦他薦は問わないと言った。
他薦された者に拒否権はど無い。
選ばれた以上は覚悟をしろ。
お前も少しは落ち着いている黒羽を見習え」

いや、落ち着いているじゃなくて どうやって一夏に転嫁しようか
絶賛思考中なんです。

「待ってください！

こんな事 納得できませんわ！！」

思案に耽っている最中、突然甲高い声が思考の糸を断ち切った。
パンツと机を叩いて立ち上がったのはセシリアだった。

さてと．．．俺の堪忍袋の緒は保ってくれるかな．．．．．？

「そのような選出は認められません！

大体 男がクラス代表者なんて、いい恥晒しですわ！

わたくしに．．．このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

ふう．．．どうやら人を見下すな。って言葉は聞いていなかったらしい．．．

一夏。そんなにブルブルと怯えるな。

俺の堪忍袋くんの緒はまだ半分も残ってるんだから。

「実力から行けば わたくしがクラス代表になるのは必然。

それも物珍しいという理由で極東の猿にされては困ります！！」

ははは．．．．．次は国の侮辱ときたか．．．．．

あれ？どうしたんだ一夏？

顔面蒼白じゃないか．．．体調が悪いなら保健室に行ってこい．．．

．．．

「いいですか！？」

クラス代表は実力トップがなるべき！

そしてそれは わたくしですわ！！

大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、
わたくしにとつては堪え難い苦痛で

」

プツン．．．．．

あゝあ．．．切れちゃった．．．．．

「　　おい．．．好い加減にしとけよ小娘．．．」

一夏 side

「　　おい．．．好い加減にしとけよ小娘．．．」

やつちまった．．．

やってしまった．．．．．

オルコットさんが黒羽を怒らせちゃった．．．．．

教室の空気が一瞬で深海の底のように重くなる．．．．．
こうなった黒羽は千冬姉でも収拾がつかないぞ．．．．．！！

「黙って聞いていれば 他を見下すような事を言いやがって．．．

．．．

お前は一体何様のつもりだ？」

「何様って．．．わ、わたくしはイギリスの代表候補生ですわ！」

黒羽の威圧感をなんとか耐えたオルコットさんは、体にある胆力を振り絞って黒羽に言い返す。

でもなオルコットさん．．．今の黒羽に何を言っても無駄だ．．．

．．．

黒羽が怒るという事は絶対相手に非がある時だけなんだから．．．

．．．

「そうだろうな。お前は代表候補生だ。

じゃあお前に訊くが、代表候補生ってのは他人を自由に嘲る権利を持っているのか？」

「そ、それは．．．．．」

黒羽の言葉にオルコットさんが口を噤んだ。

オルコットさん．．．ここで言い返せなかった時点で あんたの負けだ．．．．．

「勿論無いよな。」

他人を自由に嘲る権利など何処にも存在しない。

お前のやった行動は犬畜生に劣る行為だ！！

恥を知れ小娘！！！」

「　　ッ！？」

黒羽の一喝が教室を揺らしたような錯覚を覚える。

オルコットさんは呼吸を荒くして立っているのもやっとなだ　　。

「　　いいか、セシリア・オルコット。」

今のお前にはそれなりの権力もあるし発言力もある。

だがな、腕力だろうと権力だろうと、目に見える見えないの差こそあれ、これらは立派な“力”だ。

“力”にはそれ相応の“覚悟”や“責任”を持たなければいけない。だがお前にはソレが無い。

“覚悟”も無く、“責任”すら持たずに振り回す“力”はただの“暴力”と一緒にだ」

「　　．．．．．」

オルコットさんは黒羽に言い返さない、言い返せない。

それは黒羽の言葉に途轍もない重みがあるからだ。

まるで先達の人が語るような　　。

黒羽の言葉にはそんな重みが込められていた。

「そして、お前は自分を裏切った」

「え．．．．．？」

突如 黒羽の威圧感が霧散して、まるで悪い事をした子供を窘めるような口調で語りかけた。

ふう．．．どうやら黒羽の怒りは“良い”方の怒りだったみたいだ。

「お前はこんな事をするために代表候補生になった訳じゃないんだろ？」

お前の眼を見れば分かる。その眼は真っ直ぐな者にしか宿らない瞳だ。

自身の才能。それに驕る事なく、慢心もせず、ただひたすらに努力を積み重ねてきて勝ち取ったんだろ？

おそらくは大切なモノを守るためにな」

「っ．．．．．！？」

オルコットさんの表情は今までとは明らかに違う表情だった。どうやら黒羽の言葉がオルコットさんの核心を突いてみたいだ。黒羽は相手の本質を見極めるのが得意だからな。

「そんなに頑張ってきたアンタがあんな事を言ってしまった．．．だが、アンタはまだ若いからこれから学んでいけばいい。」

“力”を行使する“覚悟”を。“力”を持つ者の“責任”を．．．さつきも言ったが、学ぶのが人間の美德だからな。でも、これから先も学ばなければ、アンタはアンタ自身を裏切った事になる。

アンタはそれでいいのか？セシリア・オルコット」

「．．．．．わたくしは．．．．．」

オルコットさんから感じる刺々しい雰囲気は今も感じられない。

これなんだよ．．．．．

黒羽が怒る時は、まず相手の悪い所を徹底的に問い詰めて、相手にまず自覚をさせ、その後に関手の良い所を言うんだ。

普通の人は頭ごなしに怒るが、黒羽は怒ったあとのケアも忘れない。俺も黒羽に怒られた時があつたけど．．．．．うん、最後の一言がなかったらきつと自殺していた．．．．．

．．．．．あ、1人だけいた。黒羽が一切ケアしなかった相手

が。

実は中学にもいたんだ。オルコットさんみたいな人は。

いや、オルコットさん以上に酷かった。あそこまでいくと　もう醜悪に近い。

男子を奴隷のように扱って、殴る蹴るは当たり前。

最終的には殺しても問題ない、なんて事を言い出した。

それを聞いた黒羽が怒っちまってさ．．．

相手の何から何まで全否定。それも殺気を開放してでだ。

女子は何度も気絶しかけたが、黒羽が無理矢理叩き起こしての繰り返し．．．

聞いてるこっちが鬱になりかけた．．．．．

最終的に女子は転校。噂じゃ精神に傷を負って病院に通っているなんて話もあった。

そして俺達のクラスはしばらく笑顔ができなくなった。

【笑顔が消えた三日間】って伝えられてて今でも怖れられている。たしか虐められてた男子までも黒羽を止めようとしていたな...

...

「二人ともそこまでだ。

話して決着がつかないのなら決闘で決着をつける。

勝負は一週間後の放課後、第三アリーナにて黒羽VSオルコット。

その翌日は織斑VSオルコット。と総当たり戦で行う。
以上。

それでは授業を始める」

千冬姉はパンツと手を打って話を締める。

ふう、一時はどうなるかと思ったけど、何事もなく良かった...
早速授業に集ちゅ...う...?

あれ?...なんで俺まで決闘する事になっているんだろう...
...

俺の疑問に答えてくれる人が誰もいなかった...

黒羽side

いやあ...ついキレちゃった...

入学初日で女子を怒るなんて最悪な滑り出しだな...

昼休みは食堂で皆んなとの溝を埋めるのに奔走したが・・・どうだろうな・・・

それと、皆んなから聞こえてくる『兄貴、お兄さん』って、一体なんだ？

「あ、まだ教室に残っていたんですね。織斑くん。真鴉くん。」

すると、山田先生がやってきた。ちなみに今は放課後。俺達は決闘に向けて自習中だ。

「どうしたんですか？山田先生」

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号が記された鍵を渡してくる。
お？鍵が2つ・・・俺と一夏は別の部屋か・・・

「あれ？俺達の部屋は決まっていないんじゃないですか？一週間は自宅から通学するって聞いたんですけど・・・」

「・・・さては政府の方針ですね？」

俺達は世界中が欲しがっている観察対象だからな・・・
モルモット

ホイホイと外を出歩くなんざ、フォアグラの鴨が葱を背負ってるよ
うなもんだ。

「そ、その通りです。よく分かりましたね。
つと、この事はくれぐれもご内密に．．．．」

山田先生は小声でヒソヒソと語りだす。
む．．．ち、近いな．．．．

「せ、先生．．．少し近いです．．．．」

「あつ、いいい、いやつ、そのつ．．．
べべ、別にワザとかではなくてですね．．．！」

いや、でももう少し近くにいたいなあ、なんて思わなくもないで
すけど．．．．」

山田先生は顔を赤く染めてクネクネと体をくねらせる。

．．．．この人 大丈夫なのか．．．．？

「部屋は分かりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できな
いので今日は帰ってもいいですか？」

そしてそれを華麗にスルーする一夏。

たまに思っんだが、俺はこいつが大物なんじゃないかって思っ時が

ある．．．．

「それは大丈夫だ。

私が手配してやった。ありがたく思え」

そして現れる千冬さん。

ああ．．．なんとなくだけど分かった気がする．．．

「まあ、生活必需品だけだな。

着替えと携帯電話の充電器．．．黒羽は鍛錬用の大太刀があれば充分だろう」

やっぱりね．．．

俺にはマンガとかゲームとかの娯楽品がないから別にいいけど。
一夏はそうじゃないらしいな。

「ところでお前達の部屋は二つあるんだが．．．
相部屋と個室．．．どっちがいい？」

『じゃんけん ポンッ!!』

千冬さんの言葉と同時に動き出す俺達の手。

古今東西、物事を決めるのに これはど単純で迅速で強制力を持つ

ものはない。

だがなあ　一夏あ．．．．．

俺の動体視力をナメるなよ．．．．．

動きが突如スローモーションになる。

俺達は未だに手を出す最中。

その時、一夏の手が僅かに動いた！

ゆつくりと．．．一夏の五本の指が開いていく．．．

貰ったあああ！！！！

一夏：パー

俺：チヨキ

「くっそおおお！！

負けたああああ！！」

「はっはっは！！勝利は我にあり！！」

俺は高らかに勝利の凱歌を歌いながら個室^{安住}の鍵を受け取る。

一夏も泣きながら相部屋^{地獄}の鍵を受け取った。

ふっふっふ．．．しばらくは落ち着いて過ごせれる。

「黒羽．．．大人気ないぞ．．．．．」

やっぱり千冬さんには　こんな小細工見　破られてたか・・・
でも告発するつもりはないらしい。
少しだけ呆れ顔だけど・・・

「なに言っているんですか？

ジャンケンで全く同時に出すなんて不可能ですよ。
たまたま、俺の手が後になっただけです」

「ふっ・・・そういう事にしておいてやろう」

よし、唯一の懸念材料であつた千冬さんも納得した。
これで俺は正式に個室だ。早速向かうとするか。

「よし、一夏。早速行くぞ！」

俺は未だ頂垂れている一夏を引きずりながら部屋へと向かった。

~~~~~

「ほお・・・ここか・・・」

そして着いたユートピア。

俺の部屋番号は「1126」

一夏の部屋番号は「1125」

お隣さんだな。

「それじゃあ俺は先に休む。また明日な一夏」

「     おかしい．．．どうも腑に落ちない．．．  
アレにはきつと細工があつたはずだ．．．．．」

一夏は俺の声が耳に入っていないらしくブツブツ言っている。

惜しいなあ．．．確かにズルはしているが、見破らなければお前の負けだ。

俺はブツブツ言っている一夏を放っておいて部屋に入った。

「おお．．．中々．．．．．」

まず最初に飛び込んできたのは大きなベッド二つ。

どうやらこの部屋は二人用らしいが、人数が余って俺の個室になったみたいだ。

外装も設備も、そこらのビジネスホテルより遥かに良いものばかりだ。

俺はすかさずベッドに体を預けた。

「ふう．．．．．」

隻眼で天井を見上げ、これからの事を考える。

目下の所はセシリアとの決闘。

生身での戦闘だったら圧勝だが、今回使うのはIS。

向こうの方に一日の長がある。まずはその差を埋める。

埋まらないまでも出来るだけ近付く。

その為に必要なのは知識だ。

これは参考書や教科書を読み漁ればいい。

あとは経験だな。

こればかりはISに乗らなきゃどうしようもない。

明日にでも訓練機の貸し出しを申請してみよう。

俺の業を上手くISにフィードバックできれば勝てる確率はグンと上がる。

「見るなああああああ！！！！」

「うおおおおおおお！！」

ん？突然 一夏の声が聞こえた。

もう一人の声は筈か．．．

って事は一夏の相部屋の相手は筈だったのか．．．

まあ、結果的にはオーライだな。

「成敗してくれる!!」

「なっ!?!? . . . なんで木刀でドアを貫通出来るんだよ!?!?」

ドア . . . 確か材質は木だったな . . .

そうか、箒もそれだけの技を身に付けたのか . . .

明日 久し振りに模擬戦でもしてみっかな . . . . .

それにしても相変わらず騒がしい二人だな . . .

小学校の頃から全然変わってねえ。

. . . . . よし、とりあえず俺は

「  
寝る!」

2人の夫婦漫才を聞くなんて御免だ。

俺はすぐさまベッドに包まった。

結構疲れが溜まっていたのか、俺はスンナリと目蓋を閉じて夢の世界へと旅立った . . . . .

後日 勉強ができなくて一夏に八つ当たりしたのもお忘れなく . . .

## 開幕の鐘（後書き）

ようやく一日が終了しました！

長かった・・・

私は他の作家さんよりグダグダ書いてるんでしょうか？

もう少し内容を薄くすれば早く書けるんですけど・・・

内容を少し編集

騒がしくも楽しい二日目（前書き）

どうしよう・・・

ペースが落ちてきた・・・

## 騒がしくも楽しい二日目

黒羽 side

「なあ箒．．．好い加減許してくれよ．．．．．」

「．．．．．」

バタバタと慌ただしかった入学から一日。

朝の食堂で、一夏と箒はなんともギスギスした雰囲気を漂わせていた。

なんでも昨日．．．一夏が自分の部屋に行った時なんだが、箒の風呂上がり姿を見たり、下着を見たりと、随分とスケベな事をしたらしい。

それで、昨日の今日でこんな感じだ。

「なあ箒

」

「うるさい」

俺が今日聞いた箒の第一声がコレだ。

取り付く島もない、とは まさにこんな感じだな。  
ピシヤリと一言で一夏との会話を区切る箒。

「  
ねえねえ、彼たちが噂の男子だつて」

「声かけてみよっか？」

「ちょっと待って、まだ心の準備が」

そして俺たちを見つめる女子たちの視線。

一組のみんなは昨日で随分と打ち解けたんだが、他のクラスはまだ興味があるらしい。

はあ．．．これ全部をどうにかするのは疲れるな．．．

「く、黒羽くん、織斑くん。

隣．．．座つてもいいかな？」

すると、トレーを持った3人の女子が話しかけてきた。

この子達は俺たちと同じ、一組の子か．．．

たしか、昨日 俺に質問してきた子達だな。

話しかけてきた子は、赤みがかった短髪が特徴の、名前は華燐。

もう1人は、メガネをかけた、セシリアと同じ金髪のミレイナ。

最後に、2人の後ろにいる少し大人しめな雰囲気を感じる、茶髪口  
ングの、美静。

どうたら一緒に食べたいらしいな。

「ああ、別にいい」 「鮭の塩焼き貰い」 ああ！俺の塩焼きがあ  
あ！！」



一夏が同伴を許可しようとした瞬間、俺は一夏のオカズを奪い取って黙殺する。

全く．．．こんな所で一緒に食べようものなら、箒がもっと機嫌悪くなるだろ。

そうなった箒の機嫌を直すのは、さすがに俺もめんどくさい。

にしても美味しいな．．．

これはいい勉強になる。

ちなみに俺は食堂の料理ではなく、自分で作った弁当を食べている。

「あの．．．もしかして私たち、お邪魔．．．だったかな？」

む、華燐たちが変な誤解をしちまった。

心なしか表情もシヨボンとしている。

折角 朝食を誘ってくれたのに、断っちまうのはいけないな。

ここは俺が応えるか。

「気にしないでくれ。ただの痴話喧嘩だ」

「お、おお、おい黒羽」

「さあさあ、俺たちに飛び火しない内に早く退散しよう。

テーブルは．．．あつたあつた、あつちに行こう」

箒が顔を真っ赤にして動揺するが、俺は無視して立ち上がって、弁当箱を持つ。

なんだ．．．やっぱり恥ずかしがっていただけか．．．  
さっさと素直になればいいんだ。

「箒、変な意地張るな。早く素直になれ」

俺はそれだけ言うと、華燐たちと一緒にテーブルへと向かった。  
どうでもいいんだが．．．  
なんで他の女子たちは羨ましそうな目で俺を見るんだ？

箒side

「箒、変な意地張るな。早く素直になれ」

黒羽はそれだけ言うと、別のテーブルに向かってしまった。  
意地．．．か．．．．．  
確かに張っているのかもしれない．．．  
いや、でも仕方ないだろう。  
いきなり一夏と相部屋になったのだぞ。  
緊張して維持も張るというものだ。

「．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．」

だが、確かにこのままではいけないな。

この学園にはライバルになりえる相手は沢山いる。  
このままいけば、一夏がとられてしまうかもしれない。  
それだけは何としても避けなければ・・・

それに、折角 一夏と相部屋になったのだ。  
千載一遇の大チャンス。

このままギスギスした雰囲気で過ごすのは私としてもよくないし、  
一夏の方も望んでいないだろう。

黒羽の言つとおり、意地を張るのはやめにしよう。

「なあ、一夏・・・」

「な、なんだ？」

「その・・・あの、すまな・・・かったな・・・」

「あ、ああ。俺も悪かった」

良かった・・・

これでひとまず一件落着だ・・・

ここから少しずつ、一夏と会えなかった6年間の溝を埋めていくと  
しよう・・・うん、そうしよう。

まずは何をしようかな？

私が一夏にしてやれる事は・・・

「・・・あ

不意に、一夏の料理に目がいった。

そういえば黒羽にオカズを奪われたのだったな。

まあ、私の事を思ってやってくれたので強くは言えないが・・・  
黒羽にはこういう所で本当に助かっている。

だが、このままでは一夏が少し可哀想だ。

よし、一夏に私のオカズを少し分けてやろう。

幸運な事に、一夏と私の料理は同じだ。

少し、だが確実に一夏との距離を縮めていこう。

もしかしたら黒羽はそれを見越していたのだろうか？

いや、それは流石に考え過ぎか・・・

「なあ一夏」

「うん？なんだ？」

「その・・・だな・・・お前のオカズを」

「オカズ？・・・もしかしてお前もか！？」

絶対にあげないぞ！これ以上獲られてたまるか！」

・・・いけない いけない、少し落ち着け・・・

一夏のコレは、何も今に始まったものではないじゃないか。  
ここで怒ってしまつては、さっきのが無駄になつてしまう。

心の中で深呼吸しろ・・・

「そんなに欲しいのならお代わりすればいいじゃないか・・・



目に涙を溜めて、抗議の声をあげる一夏を、私は一切無視して後片付けを始める。

全く．．．本当に信じられん。

いつもだったら黒羽が窘めるのだが、流石にこれは許してくれるだろう。

私は一夏を置いて、そのままテーブルを後にした。

黒羽 side

箒に一言いったあと、俺たちは別のテーブルに向かっていた。

まあ、箒は根は素直なやつだから大丈夫だろう。

少し不器用なだけだからな。

「真鴉くん、どうぞ」

テーブルに着いた時、美静がイスを引いてくれた。

この左腕と右目のせいなのか、よくみんなは俺に親切にしてくれている。

やっぱりみんなは良い子たちだな．．．

本当は俺１人でできるんだが、こういう好意には甘えておこう。

「ああ、ありがとな美静」

俺は美静にお礼を言いながら席に着き、弁当箱の包みを開ける。

それを見て、3人も席に着いた。

「そういえばさ、黒羽くんってオルコットさんと決闘するんでしょう？  
本当に大丈夫なの？」

華憐が言うのは昨日の事か・・・  
大丈夫・・・と言われれば大丈夫じゃない。  
なにせ、今の俺には経験、知識、ありとあらゆるものが不足しているからな。

「全然　大丈夫じゃない。  
だが決闘まで一週間もある。  
その間にできる事もあるだろう」

「うわぁ・・・案外あっさりと大丈夫じゃないって言うんだね・・・  
」

華憐は俺の言葉を聞いて少し呆れていた。  
だが仕方ないだろう。  
無理に意地張って嘘を言うより、本当の事を言っておいた方がいいからな。

「でも、さすがに代表候補生を見くびり過ぎですよ真鴉さん。  
私も同じイギリス出身ですけど、オルコットさんは結構な有名人です。」

もちろん、ISに関しての」

ミレイナは少し諭すような口調で俺には語りかける。

まあ、他の人から見たらそうかもしれないな。

だが、何故だか“負ける”イメージが全く浮かんでこないんだ。

“苦戦”するイメージは浮かぶんだけどな。

「そうか、ミレイナもイギリス出身だったのか。

良かったらだが、セシリアについて知ってる事を教えてくれないか？」

“情報”というものは闘いの中で最も大切なものだ。

それを元にして戦略を組み立てたりと、闘いの下地作りが出来るかな。

確かに自分の戦闘力、技量も大切だが、そんなものがすぐに上がる訳がない。

変動幅が少ない内的要因を信じるより、自分の闘いやすい環境を作れる外的要因の方が最も大切。っていうのが俺の自論だ。

「そうですね．．．と言っても限られた事しか知りませんが。

オルコットさんが使うISの名前は【ブルー・ティアーズ】

イギリスが開発している自立起動兵器を試験的に実装している中距離射撃型の機体です」

中距離射撃型か．．．漠然的にだが、戦略の組み立ては出来た。



あとは自立起動兵器だな．．．  
ざつくばらんに言っと、ガナムのファンル。  
それが相手の一番の強みであり、俺が攻略しなければいけない課題  
だな．．．．．

「ありがとうミレイナ。  
その情報だけでも十分に助かった。  
あとはその対応策と戦略を組み立てるだけだ」

「本当にそれだけで良いの？  
なんか随分と頼りないと思うけど．．．．．」

美静は少し不安そうな表情でそう言う。  
そんなに頼りないか？  
今の情報でも勝率は3割上がったぞ。

「そうだな．．．6割は大丈夫と言った所だ。  
あとは経験だけだが．．．まあ、そこも何とかしよう。  
最悪、ぶつつけ本番になるかもしれないがな」

「6割．．．結構高いんだね．．．  
私からしたら全然足りないと思うけど．．．」

まあ、美静たちからしたらそうだろうな。  
だが場数を踏んだ人間ほど、情報を重宝するんだ。

「よし、それなら1つだけ教えておこう。  
闘いは、大きく分けて2種類あるんだ」

『2種類？』

俺の言葉に、3人は首を傾げた。

ここからは学園の先生が教えない特別授業だ。

「そうだ。決闘当日。決着は蓋を開けて見るまで分からないなんて、ただのケンカと変わらない。

それまでの間に如何に相手の情報を得られるか、相手の闘い方を知れるのが、1つ目の戦い。

そして、決闘当日になって、今までに得た情報で勝敗が帰結するのが2つ目の闘いだ。

前者の方を“戦い”。後者の方を“闘い”と、俺は分けている」

『．．．．．』

3人は俺の言葉が分からないといった感じで聞いていた。  
別に仕方ないけどな。

あまりこの話を理解してくれる人はいなかったし。

「ま、要するに戦いは既に始まっているという事だ。  
ささ、早く飯を食べよう」

俺はそれだけ言うと、弁当の蓋を開けて飯を口に運ぶ。  
それを見て他の3人も食事を再開した。

「あの．．真鴉さん、それはもしかしてお弁当ですか？」

ミレイナは俺の弁当に気付いたのか、興味津々に見つめる。  
よく見たら他の2人も興味深く見つめていた。

「そうだな。俺が作った弁当だ。  
良かったら食べるか？」

『本当！？』

俺の提案に、3人がぐいつと身を乗り出した。  
あまりにも速すぎた反応に、少しビクリしてしまったのは秘密だ。

「お、おう。口に合うかどうかは分らんが、食べてもいいぞ。  
量は沢山あるからな」

少々どもりながらだが、3人の言葉に答える。  
俺の弁当の量は結構ある。  
多分だが、普通の2倍はあるんじゃないか？  
沢山食って、沢山動くのが俺のモットーだからな。

ちなみに今回の弁当は和がイメージだ。  
洋も中も作れるんだが、やっぱり和食が一番美味く作れる。

「そ、それじゃあ・・・」

「お言葉に甘えて・・・」

「いただきまーす・・・」

3人は、恐る恐るといった感じで料理を口に運ぶ。  
華憐が豆腐の揚げ物。

美静がほうれん草のおひたし。

ミレイナは俺の一番得意な卵焼き。

「ど、どうだ・・・？」

俺も恐る恐るといった感じで3人に感想を聞く。

初めての人が俺の料理を食べる時はいつも緊張する。

3人はしばらくの間、料理を味わうように食べたあと、顔を輝かせ  
て・・・

『美味しーい!!』

と、口を揃えて言った。

ほ．．．良かった．．．．．

「黒羽くん！この豆腐の揚げ物すつごく美味しいよ！！」

「おひたしの方も、ちゃんと歯ごたえが残っていて美味しかった」

「ああ．．．このふんわりとして、ほのかに甘い味．．．  
美味しすぎて虜になってしまいました．．．」

3人は思い思いの言葉で俺の料理を褒めてくれた。  
うん、そう言ってくれると とても嬉しい。  
やっぱり、誰かに料理を食べてもらい、美味しいと言ってくれるのは格別だ。

「そうか．．．そいつは良かった．．．」

うんうん、本当に良かった．．．  
右腕一本になって以降、思うように料理を作れなかったからな．．．  
これで少しは、あの頃に戻れたかな？

「ねえねえ黒羽くん。良かったらだけどき、私にも作り方教えてほしいな」

「あ、私も教えてほしい」

「私にも是非教えてください!」

作り方か．．．

別に隠すものでもないからいいだろう。

通常の工程に一、二工程ほど付け加えるだけだからな。

「ああ、別にいいぞ。

あとでレシピを書いて渡しておこう。

もしレシピだけじゃ分からなかったら言ってくれ。  
俺が直接教えるから」

「黒羽くんと．．．」

「ちょ、直接．．．」

「2人きりで．．．」

何故か3人はいきなり顔を赤くした。

一体どうしんだ？

そして周りにいる女子。肉食獣のように目をギラギラさせて見ないでくれ．．．

マジで落ち着かん．．．．．

「このっ．．．大馬鹿者!!」

ん？この声は箒か？

箒の方を見ると、頭を押さえて蹲る一夏。えらくご立腹の様子の子の箒。

さっきのような恥ずかしさではなく、純粹な怒りの感情が感じられる。

さては一夏のやつ、また余計な事を言つて箒を怒らせやがったな．

「はあ．．．全く仕方のない奴だ．．．」

俺はボソツと声を漏らし、食事を再開した。

はてさて．．．一体この先どうなることやら．．．

~~~~~

二時限目が終わった休み時間、山田先生が女性の下着の事を語りだしたりと、内心では少し焦りながらも、授業は滞りなく進んだ。
途中で山田先生が俺のことを見つけていたが、俺の顔になんかついていたかな？

「ねえねえ織斑くん。

今日のお昼ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」

そして一夏に質問攻めをする女子たち。

どうやらクラスの皆んなは、まだ一夏の方に興味があるらしい。俺は入学初日で皆んなの質問には答えたからな。

残るは一夏だけだ。

そして、何気に整理券を配っている女子数名。しかも有料で。うんうん。商売は良いことだ。しっかりと励めよう……

「千冬お姉様って、自宅ではどんな感じなの？」

「そうだな……案外だらしな」

パンッ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

いつの間に現れたのか……

千冬さんが一夏の背後に立ち、出席簿によって一夏の言葉は黙殺された。

ちなみに一夏曰く、自宅にいる時の千冬さんはスゴくだらしないらしい。

脱いだものは床に置き、缶ビールを飲んですぐに寝て、ろくに部屋も片付けていないとか。

俺が一夏の家に行った時はそんな姿は見たことがないがな。

それを話した後日、一夏が千冬さんにフルボッコにされていたが・
．．．それはきつと俺の見間違いだっただろう。

「そうだ、織斑に黒羽。」

お前たちのISだが、準備に時間がかかる。
学園が専用機を用意するまで少し待っている」

千冬さんの言葉にクラスがざわついた。

専用機

本来ならソレらは、国家、或いは企業に属する者にか与えられない、
まさに個人専用のIS。

だが俺たちは他の人たちと少々異なる．．．というか世界でISを
動かせる男だ。

目的はデータの収集。といったところだろう。

「織斑先生。それまでの間 訓練機での練習はできますか？」

「残念だが厳しい。」

予定は少なくとも2週間先まで埋まっている。

強引に割り込んだとしても、精々 一週間後くらいだろうな」

「．．．そうですか．．．．．」

一週間後．．．それだと既に決闘は終わっている。
なんとかISの感覚に慣れたかったんだけどな．．．
決闘当日のぶっつけ本番でモノにするしかないか．．．
少しばかり拙いな．．．．．

「それに、織斑もそうだが、特に黒羽にはある人物が全面的にバツクアップしている。

全くあの馬鹿者は何を考えているのか．．．．．」

そう言うと、千冬さんは心底呆れた表情になる。

千冬さんがこれだけの感情を露わにし、尚且つISに詳しい人間．．

．そんな奴を俺は1人しか知らない．．．

「．．．束の奴ですか．．．．．」

ISの発明者であり、天災の篠ノ之 束。

あいつが全面的にバツクアップしてんのか．．．

頼もしい以上に不安感がある。

あいつの事だ。真面目なモノなど．．．特に俺に関しては真逆のモノを寄こす割合が強い。

というか真面目なモノを貰ったことがない。

俺は心の中でため息をはいた．．．．．

「束って．．．もしかして篠ノ之博士のことですか？」

束の単語を聞き取ったのか、1人の女子が束の事を千冬さんに聞いた。

「ああ。束はISの開発者だ。
ちなみに、篠ノ之の実姉でもある」

『ええーっ！？』

千冬さんの言葉に、またもクラスがざわついた。
皆んなが箒に詰め寄り、束の事を教えてだの、ISの事を教えてだのと箒に聞くが．．．．．

「あの人に関係ない！」

突然の大声。

箒の声によつて、騒がしかった女子たちは目をパチクリさせ、シーンと静まり返り、何が起こったのか分からない様子だった。

「．．．大声をだしてすまない．．．
だが、私はあの人じゃないし、教えられる事は何もない．．．．．
」

それは明確な拒絶の意思だった。

篤は、もうそれ以上言いたくないとばかりに会話を無理矢理区切り、窓の方に顔を向けた。

やっぱり俺たちと別れた6年間になんかあったか．．．．．
といっても容易に想像できるがな。

世界中が欲しているISの開発者である束が、突如行方をくらましてんだ。

当然、束と連絡をとっていないか世界各国の政府から執拗な取り調べを受けたのに違いない。

6年前の突然の引越しも、おそらくはそれに関係してるだろう。

とっても悪い言い方をすれば、束が一家離散の原因だと言える。
とっても悪い言い方をすれば、だけどな。

ここは大事なところだから二度言っておく。

当時小学生だった篤にはさぞ堪えただろう。

思い人との突然の別れ。

バラバラになった家族。

連日の執拗な取り調べ。

束に対する気持ちガラリと変わるのも無理はない。

「あー．．．ゴホン。その、なんだ．．．

他にも一夏に質問したいことはあるか？

一夏が言えないことは俺が答えよう」

といつてもこの重い空気を見過ぐす訳にはいかない。
場の空気を変えるため、俺は適当な事を言ってみた。

「ちょ、おい黒」

「それじゃあ織斑くんに質問！
普段は家で何してるんですか？」

よし、どうやら皆んなも乗っかってくれた。
空気も幾分か軽くなる。

「そうだな・・・普段は友達と遊んだり、剣の鍛錬をしている」

（（なんだ・・・つまらない・・・））

「つまらない人生送ってるんだな・・・」

「お、おい！なんだよその　つまらないような表情は！？
そして黒羽は口に出してるし！」

「だって本当につまらないんだもん。なあ？」

『うん、つまんなーい』

俺の言葉に見事シンクロしてくれるみんな。
うん、皆んなと仲良くなれたのを実感する。

「他にはなんかないの？」

例えばホラ、男の子特有のアッチ系の本とか!？」

「ああ、それなら一夏のベッドの下に」

「だあああ！」

なに嘘言ってるんだ黒羽!!」

あらら・・・

一夏に邪魔されちまった・・・
まあ本当に嘘だから別にいいか。

それから、一夏のある事ない事を言いながら楽しく時間は過ぎていった。

「そういえばさ、いま思い出せば このクラスって有名人が揃っているよね」

「うんうん。担任の先生は千冬お姉様。

そして千冬お姉様の弟の織斑くん。

IS開発者の妹さんの篠ノ之さん。

よく考えたらスゴイ顔ぶれだよな」

一夏への質問．．．もとい、一夏弄りに飽きた女子たちは、このク
ラスのスゴさを会話している。
確かにそうだよな。

世界の超VIPとその親類。
何かの意思が働いてるみたいだ。

「あれ？そうなれば真鴉くんは？」

「世界でISを動かせる男．．．にしても既に織斑くんもいるし．．
幼馴染．．．だと、なんだかインパクトが少ないよね」

お？次は俺の話しか？

残念ながら俺にはそんな話はないんだ

「
なに、黒羽も随分と凄い奴だぞ」

すると、俺の思いと真逆の事を言い出す人がいた。
その人物は千冬さんだった。

．．．なんか嫌な予感が．．．．．

「千冬お姉様。それって どういう事ですか？」

「言葉通りの意味だ。ある意味、黒羽は織斑と篠ノ之よりも凄い奴
だ。」

なにせ．．．．．」

千冬さんは俺をチラリと見ると、意地の悪い笑みを浮かべ出した。
やばい！あの笑みを俺をからかう時の表情だ！！

「あのっ．．．織斑先せ
」

「黒羽は私の師匠だからな」

うおおおい！！

言っちゃったよこの人！！

そんなこと言ったら他のみんなが

『えええええええええ！？

真鴉くんが千冬お姉様の師匠おおおお！？』

「やっぱりかああああああつ！！！！」

雪崩の勢いと、雷のような大声で押し寄せる女子たち。

うつ．．．右耳しか閉じることができないから左耳がキンキンする．

．．．．．

これは昨日より勢いが強いぞ．．．

「ねえねえ！千冬お姉様のお師匠様って本当なの！？」

「いや．．．少しばかりアドバイスただけで師匠じゃない」

「謙遜するな。」

お前の教えがなければ、私は世界大会で優勝できなかっただろう」

ちよつとおおおお！？

なに火に油を注いじやってんのおおおお！？

俺がアドバイスしなくても充分　世界大会で優勝していたでしょうに！！

千冬さんの言葉により一層　圧力が増してくる．．．
ダメだ．．．もうこれ以上は．．．

「さあさあ、休み時間は終わりだ。
授業を始めるから席につけ」

皆んなに押し潰されようとした時、千冬さんがパンパンと手を叩いて場を鎮める。

皆んなも素直に従って席についた。

「ぜえ．．．ぜえ．．．ぜえ．．．

千冬さん．．．なにも、この場で言うことないじゃないですか．．．

」

俺は荒くなつた呼吸を整えながら、千冬さんを恨ましげに見つめる。千冬さんを織斑先生と呼ばなかったのは、せめてもの反抗だ。

「それは済まなかった。

お前だけ何もないと言われるのが癪だったから　つい・・・な」

「はあ・・・はあ・・・別にそんな事は気にしません。

それに、前から言ってますが、俺は千冬さんの師匠ではありませんよ。

そんなガラじゃないですからね」

「だが、お前のおかげで強くなったのも事実だ。

その事は今でも感謝している。

いや、感謝してもしきれないほどだ」

・・・なんか、そんなこと言われると恥ずかしいな・・・
思わず照れ笑いを浮かべながら頬をポリポリと掻く。

「まあ・・・感謝の言葉は素直に受け取っておくと思いますよ。
それじゃあ俺も席に戻ります」

そう言つて、俺も他の皆んなと一緒に席に戻る。

千冬さんも、いつもと同じ教師オーラを纏つて授業を始めた。

なんか・・・上手く丸められた気がしないでもないが、これで俺に
対する注目度は更に増しただろうな・・・

（はぁ・・・さて、皆んなからどんな質問が飛び出すことやら・・・）

俺は心の中でため息をはきながら、授業内容をノートに書き写した。

それから授業終了後。

一組だけでなく、他クラスの人も押しかけて、俺に色々と聞いてきた事をここに記しておく。

どうやら、俺が千冬さんの師匠だ。という話しがもう伝わったんだろっ。

女子の噂伝播能力の高さを垣間見た瞬間だった・・・

騒がしくも楽しい二日目（後書き）

本当は剣道場での闘いを書くつもりだったんだけどな・・・

次回は黒羽VS第！

お楽しみに（、ー、）ゞ

頂に座す（前書き）

ペースが．．．

ペースが遅くなってきたああ！！．．（ノ、）．．

だれか私に時間をください。．．．（>|<）．．．

頂に座す

黒羽 side

「うおおおっ!!」

「はあああっ!!」

ここはIS学園の剣道部が使用している道場。

授業も終わり、放課後となった今。

一夏と箒は互いに竹刀を握りながら、相手に向かって激突していた。

「面ッッ!!!!」

箒は一夏の頭に向かって勢いよく竹刀を振り下ろす。

鋭い風切り音。全くブレていない一直線の剣筋。

成る程・・・俺たちから別れた6年の間に箒も随分と強くなったな。
流石、剣道の全国大会で優勝しただけの事はある。

「フッ・・・・・・胴ッッ!!!!」

だが、一夏も俺とマンツーマンで鍛錬してきたんだ。

普通だったらここで終わる一撃を、一夏は巧く竹刀を滑らして箒の剣を逸らして、すかさず強烈な胴切りを繰り出した。

うん、まあ及第点といったところだな。

「まだまだっ．．．．．!!」

お、あの一撃を避けたか。

防御が間に合わないと思ったのか、箒は軽快なバックステップで．．
．予め織り込み済みであるかのように、一夏の射程範囲から逃れた。
今の足捌きは見事と言う他ない。

それに、きちんと相手の全体を見る事もできている。
でなければ、あんな見事な足捌きはできない。

「．．．．．」

「．．．．．」

そして、お互いの距離をとった事で、2人は沈黙する。
遠巻きに見ていたギャラリー達も、2人のレベルの高さに沈黙して
いる。

2人の戦いは一進一退、まさに互角の戦いだろう。

あ、そういえばみんなには事の馴れ初めを話していなかったな。
2人はもう暫く動きそうにないから、今の内に話しておこう。
それでは、回想シーンどうぞ。

~~~~~

「なあ箒。ISのこと教えてくれないか？  
このままだと何もせずに負けそうだ」

授業も一休みしてお昼時間。  
食堂にて昼食を食べていた時、一夏が箒にISのことを教えてほしいと頼み込んでいた。

ちなみに、俺が千冬さんの師匠だった話しは学園中に広まり、周りの女子達の視線は俺を圧死させるまでに増大していた。

「・・・下らん挑発に乗るからそうなるんだ」

一夏の願いに、箒は不機嫌なオーラを隠そうともせずに、そう答える。

それからは、「お前などもう知らん」と、言外に言い放ち味噌汁をすすする箒。

ふむ・・・どうやら朝の一件を根に持っているみたいだな。

ま、俺は詳しく知らんがな。

「いや、挑発に乗ったのは俺じゃない。  
オルコットさんと決闘の話をしたのは・・・」



一夏はそう言っつて、ジーと横目に俺を見る。  
なんだ？ 俺が悪いってか？  
まあ認めるけど。

「いやあ、すまんすまん。

俺もお前が巻き込まれるなんて思わなくてな」

「黒羽．．．全く悪いと思っっていないだろ。

まあ、あの時 黒羽が言い返さなかったら俺が言い返していたけどな」

「結局同じではないか。馬鹿者」

「ウグツ．．．相変ワラス辛辣デスネ．．．箒サン．．．．．」

箒の指摘にしょんぼりとうな垂れる一夏。

見てる分にはコントみたいで面白いんだが、確かに俺も独学で学ぶには良い加減 限界がある。

少しでも知ってる人からISのことを教えてもらいたい。

「箒、俺からもお願いだ。

手前勝手な事は重々承知している。

だが、今は少しでもISのことが知りたいんだ。

どうか教えてくれないか、頼む」

「く、黒羽、頭を上げてくれ。

貴方に頭を下げられては　こちらが申し訳なく思ってしまう」

俺は精一杯の誠意を見せるため、箒に頭を下げる。  
それを見た箒が少し慌て、敬語になりかけた。

「黒羽の頼みとあれば、断わる訳にはいかない。  
私でよければ引き受けよう」

「ホントか！？　よっしゃ　」

「ただし、一度　模擬戦をやる。  
今日の放課後、剣道場に来い。  
お前の腕が鈍っていないか見てやる」

俺たちの願いを聞く代わりに、箒からも模擬戦の提案をしてきた。  
模擬戦・・・か・・・  
俺も箒がどこまで強くなったのか見てみたいし、ギブアンドテイク  
っていう事で別にいいか。

「いや、俺としてはISの事を教えてほしいんだが・・・」

だが一夏はお気に召さない様子。  
箒の模擬戦の提案を渋りだす。  
別に一回くらい　いいじゃないか。  
あんまり心が狭いと女の子にモテないぞ？

まあ、実際には既にモテモテなんだがな。一夏は。

「なあ黒羽、お前も箒に言ってくれよ。

今は模擬戦よりも、ISの方が大事だって」

確かに一夏の言い分の方が、正しいっちゃ正しいが・・・

見る。箒がしょんぼり しちまったじゃないか。

一夏には残念だが、今回は箒につかせてもらっ

「ふう・・・仕方ないな。

一夏。お前に選択肢は2つある。

1つはお前の言う通り、模擬戦はせずにISの事をきっちりと教  
る事」

「2つ目を聞くまでもないよ。

俺は1つ目を選ぶ」

「だが、勉強方法は俺が決めさせてもらっ

うくん、そうだな・・・ 受験勉強の時にやったアレでいい  
か？」

ビクッ!!!

アレの単語を聞いた瞬間、一夏は面白いくらいに身体を強張らせて  
反応した。

ははは、やっぱりまだトラウマだったか。

「ア．．．アレって．．．．．」

あ、あの．．．黒羽さん？　じよ、冗談ですよね．．．？」

「いや、冗談じゃない。マジだ」

「アハ．．．．．アハハハ．．．．．」

一夏は、まるで悪い冗談であってほしいとばかりに、俺に懇願の目を向けてくる。

だが俺はその願いを思い切りバツサリと切り捨てた。

少しアクセントとして笑顔なのがポイントだ。

俺の言葉が本当だと悟ると、一夏は乾いた笑い声をあげることしかできなかった。

気のせいかな、身体がブルブルと震えているように見える。

「おい一夏！　何をブルブルと震えている！？」

黒羽！　一夏に何を．．．いや、アレとは一体なんだ！？」

どうやら見間違いはなかったようだな。

筈は一夏の肩を揺すりながらも俺にアレの事を聞いてくる。

「アレというのはな、一夏が受験勉強の時にやったやつだ。その名も、『ドキドキ　一夏文武両道計画！！一夏を合格させるん

DEATH!!」だ」

別に隠す事でもないので、アレの正体を素直に話す。

この計画の内容を軽く話すと、俺や千冬さんがテストに出そうな所を教科書からランダムに選択し、抜き打ちのテスト形式で行なう。

問題数は全部で25。合格点の80点に届かなかったら道場に強制連行してボロ雑巾になるまでフルボツ・・・もとい鍛錬。

どの教科がテストになるのかも分からない状態なので、一夏は全教科を勉強しなくちゃいけないっていう事だ。

このおかげで、一夏の成績は学年で上から4番目と急上昇した。

「・・・なんか途轍もなく物騒な計画の気がするが・・・  
特に最後の部分なんて・・・」

「ああ、言っておくが誤字ではないぞ。

五回連続で赤点をとると、D・E・A・T・Hのローマ字をもれなくプレゼントだ」

「あれ？ 震えが止まらないぞ・・・？

知ってるか？ それはPTSDっていうやつらしいぜ。

アハハハハハハハハ・・・！！！」

「一夏！ お前は誰と会話している！？

ここにはお前と私たちしかいないんだぞ！

戻ってくるんだ一夏ああ！！！」

おお、一夏の身震いが凄すぎて3人に見える。

箒もそれを見て流石に危ないと思ったのか、一夏の肩を激しく揺すって現実に引き戻そうと奮戦する。

だけど一夏は一向に、向こう側の世界から帰ってくる様子はない。まあ、一発で引き戻すことは出来るけどな。

「そういえばまだ話しの途中だったな。

2つ目は箒の言う通り模擬戦を行なうだ。  
で、どうするんだ一夏」

「是非 模擬戦を選択します！

いや、選択させて下さい！！

箒さん！ いえ、箒様！！

どうかお願いします！ 本当にマジでお願いします！！」

今まで全く戻ってくる様子じゃなかったのに、俺の言葉を聞くや否や音速の如き速さで戻ってきた。

そしてそのまま箒が救いの女神であるかのように物凄い勢いで頭を下げる。

このままいけば土下座までいきそうだな・・・

「あ、ああ・・・分かった。では放課後な・・・」

箒も一夏の変わりように若干引きながらも、模擬戦の約束を取り付けた。

一夏は嬉しそうに涙を流している。

ふう、これで大丈夫だな。

俺は放課後が来るのを楽しみに思いながら、食事を再開した。

~~~~~

以上、回想シーンは終わり。

事の馴れ初めは まあそんな感じだ。

お、丁度良いな。

2人がどうやら動き出すみたいだ。

「 はあっっ!! 」

「 せやっっ!! 」

2人から感じる気配が険しくなったと思った瞬間、2人は『ダンッ』と床を軋ませて一気に駆ける。

既に2人は自分と向き合っている相手が同等の実力を持っている事を知っている。

だからこそ、これ以上の打ち合いは無意味だと悟った。

技術の小出しではなく、自身が持つ全てを集結させて、最高の一撃を繰り出す。

2人は共に竹刀を振り上げ、面の構えをとる。

お互いの距離は縮まり、やがて剣の間合いに入った。

すれ違いざまに描かれる二本の軌跡。その軌跡の行き着く先に

パシン。と、小気味のいい音が・・・

静かな剣道場に二つ木霊した

「・・・引き分け・・・だな・・・」

「ああ．．．そうだな．．．．．」

そして静かに呟く2人。

続いて周りのギャラリから響く大歓声。

引き分けだというのに2人の顔はとても満足していた。

ああ．．．2人の闘いを見てたらなんだかウズウズしてきた．．．
いや、箒が予想以上に強くなってるんだぜ？
教えてた身としては是非とも直接確かめたい。

「なあ箒」

「む？ どうしたんだ？」

「俺とも模擬戦やろうぜ」

箒side

黒羽がいきなり模擬戦をすと言い出し、一夏との模擬戦の疲労を、少し休憩する事で回復させ、今は道場の中央で黒羽と相対している。
遠巻きに見ている観客達は、黒羽が千冬さんの師匠だった話を聞

いてキャツキヤと騒ぐ者もいれば、黒羽の隻腕隻眼を見て、本当に戦えるのか？ という疑いの目線。その他にも様々な視線が注がれている。

だがお前たちには分からないだろう。

黒羽と向かい合うだけで どれほどの胆力が必要なのかを . . .

. . .

「第、この6年間でお前がどれほど強くなったのか見せてくれ。さあ、思いつ切り打ち込んでみる」

私の両眼と黒羽の隻眼が合った瞬間、様々なものが勝手にイメージされ、嘘の感覚が現実のものとなる。

道着が重い . . .

まるで深海の底で鉛を付けて沈んでるみたいだ . . .

なんと雄大な . . .

雨風を . . . いや、雷雨や暴風をも ものともしない、踏破不可能な程の巨大樹が私の目の前にそびえ立つ。

考えたこともない . . .

今まで無意識に、反射的に、生きるためにやってきた . . .
呼吸とは . . . 一体どうすればいいのだ . . . ?

「くっ」

駄目だ。呑まれるな。

私は竹刀を強く握り締め．．手が白ばみ、血が滲み出てくるんじゃないかと思うくらいに握り締めた。

その痛みでなんとか平静を保ち、眼前に立っている黒羽を見据える。

やはり目に付くのが、右手に握られている長刀。

長さは六尺．．約180cmもの長い得物。

6年前より更に長くなっている。

そして、特に構えもせず自然体で佇む。

だらりと下げた腕。そこから繰り出されるであろう初撃は、私の左脇腹から右肩を斬る 逆袈裟斬り。
ならば

「フツ．．．．．!!」

息をはくのと同時に駆け抜ける。

あの長刀の前では私が先制攻撃できる可能性は皆無。

一太刀の元に斬り伏せられるであろう。

なら、攻撃をしなければいい。

初撃の軌道は既に分かっている。

それを全力で防御をし、私の一撃を叩き込む！

（黒羽が僅かに動いた！

来る！ まずはこの一撃を防御し
）

瞬間、世界が時を止めた。

欠かす事なく続けてきた鍛錬の賜物が、私の身体も、黒羽の身体も、周りの動きも、音も、その活動を一齐に停止した。

なのに私の思考だけは正常に．．．いや、狂ったように警告の鐘を鳴り響かせる。

『　　コノママデハ駄目ダ！！

上ヲ見口！ 上ヲ見口！ 上ヲ見口！ 上ヲ見口！！

上ヲ．．．上ヲ．．．上ヲ．．．上ヲ．．．上ヲ．．．上ヲ．．．

上ヲ．．．上ヲ．．．ッッ！！！！』

「っ．．．．．．．．．．」

考える事などしなかった。

身体に染み付いた剣士としての私が、反射的に左下に構えてた竹刀を頭上に構えた。

次の瞬間

「　　ぐ．．．．．．．．．．っ！！」

形容し難い衝撃と共に竹刀が振り下ろされた。
なんだ．．．？　なにが起こったのだ．．．．．？
何故　腕を下げていた筈の黒羽が竹刀を振り下ろしている？

「一体どうしたんだ筈。
全然なっていないじゃないか」

「はっ！？．．．　　うぐっ！！」

黒羽の声に気付いた時には、既に黒羽は綺麗な円を描き、その遠心力を付与した強烈な斬撃を繰り出す。
まるで叱りつけるように．．．
咄嗟に防ぐものの、踏ん張りが足らず、私は黒羽の射程圏外まで追い出されてしまった。

「相手の事も見ていないし、手に余計な力が入り過ぎている。
一夏との模擬戦の方が万倍良かったぞ筈」

だが黒羽は追撃をかけず、窘めるような視線を私に向ける。
手に残る痺れを感じながら、黒羽の言葉を繰り返した。
確かに．．．思い返してみれば酷い有様だ．．．．．
緊張で余計な力みが入り、黒羽の腕しか見ていなかった。
これでは．．．これでは余りにも無様。
私に剣を教えてくれた黒羽に対しても大変失礼だ。

「　　喝ッッ！！！」

私は身体中の胆力を腹に集結させ、無様な自分自身に対して叱喝の檄を飛ばす。

すると、あれ程　重く感じてた道着はいつも通りの重さになり、呼吸も楽になった。

「済まなかった。少し緊張していたようだ。
だがこれでもう大丈夫　だ！！！」

言うと同時に駆け抜ける。

黒羽の全体を見ているが、全くと言っていいほど隙がない。
一種の剣士としての理想像に少し見惚れるが、今はそんな事を考える暇はない。

隙がないのなら私が作り出せばいいだけの事。

私は黒羽の間の内と外の狭間で一気に踏み込み、全力で竹刀を振り下ろした。

「うん、良い踏み込みだ。脱力もきちんとして来ている」

だが、黒羽は涼しい顔をして私の竹刀を受け止め、感想を述べる。
この人から褒められて嬉しいと思う反面、さっきの一撃を容易に止められて口惜しさが残る。

「よし、そんなじゃま次は俺からいくぜ。
頑張って防げよ?」

「くっ………!!」

横から衝撃と鈍痛がやってくる。

こんな間合いを詰められた状態でどうやって竹刀を振り回すのかと思ったら、黒羽は舞踏を思わせるような綺麗な動きで後ろに回りだし、そのまま私を斬りつけた。

成る程、先の一撃もそうやって攻撃されたのか……

しっかりと防いだ筈なのに、私の手はジンジンと痺れ、腕の骨が軋むような鈍い痛みがやってくる。

私は溜まらず後退をして、黒羽との距離をとった。

彼我の差は約三步半といったところだろう。

「そろそろ次が来るぞ。

休んでる暇なんかあるのか?」

だが黒羽は止まらなかった。

黒羽が一步踏み出した瞬間、三步以上あった差は二歩以上も詰められて、私に竹刀を振り下ろす。

「ぐっ……二歩一撃かつ!!」

二歩一撃とは、一步踏み出したと思わせ、事実二歩踏み出す武術の

高等歩法だ。

竹刀が軋む音がする・・・

手の感覚が無くなりそうになる・・・

防御してもダメージが通るなんて、そんな理不尽な攻撃があるか？

「さてと、まだまだ行くぜ？」

そんな理不尽な攻撃が連続で繰り出される。

『パシン』なんて生易しい音なんかじゃない。

『バシンッ！』『ビシンッ！』と明らかにオカシイ音が竹刀からする。

このまま竹刀を手放したら私は楽になれるだろうか？

この鈍痛から開放されるだろうか？
なら

「こ・・・のっ！！」

「おわつと・・・」

なら、手放す訳にはいかない。

例えば負けが決まっていたとしても、負け方というものがある。

せめてもの意地でこの人から技を引き出させたい。

私は攻撃後の僅かな隙を狙い、黒羽の顔に向け刺突を繰り出す。

黒羽は多少慌てながら私から距離をとった。

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．
．．．」

その間に、乱れた呼吸を整える。

早急に、でも焦らず静かに。

手の痺れは段々と治まり、鈍い痛みはじんわりとした熱さに変わっていた。

「惜しかったな。あともうちよつとだったんだが．．．」

私が大変な事態になっているというのに、黒羽はそれと真逆な様子。あれ程の勢いで攻めていたというのに全く疲労の素振りも見せず、一分の隙も見せずに佇む。

やはりこの人は素晴らしい．．．

鋭利なまでの剣筋、身体の内まで響く程の重い一撃、息をするかのように行う高等技法。

そのどれ等もが私には辿り着けない頂の境地。

この人に私の全てを見せたい！

6年間で培ってきた鍛錬の全てを見せたい！！

「この程度では終わらせないさ．．．
はあああああつつつ！！！」

深く深く呼吸を繰り返して数回、私は勝負にでる。

足元から爆薬が爆ぜたように一直線に向かって黒羽に突き進む。
決してヤケになった訳でも捨て鉢になった訳でもない。
一度しかない勝機を今ここで使う！！

「ふ．．．．．どうやら決めに来たようだな。
ならこの剣閃を捌いてみせる筈！！」

まるで鎌鼬のように．．．死神の鎌のように斬撃が私に襲いかかる。
一撃一撃全てが必倒の威力。
私はそれを捌き続ける。

頭を狙った横薙ぎの一撃はしゃがんで躲す。
上から降りかかる一閃は竹刀を滑らすようにして逸らす。
それ以外の攻撃は、飛ばされないように踏ん張って防御する。

だが、言うは易く行うは難し。
躲す事も逸らす事も、少し間違えば甘んじて受けねばならない。
防御の方は言わずもがな。
攻撃を防いでもダメージは蓄積されていく。
精神はどんどんと消耗し、防御する度に体力は削られる。

「とどけええええつつつ！！！」

久遠に続くと思われた剣閃も終わりを迎えた。いや、私が終わらせ
た。
少しずつ、確実に黒羽との距離を縮め、遂に私の間合いに黒羽を捉
えた。

そこから全てを振り絞って竹刀を叩き下ろす。

「むっ．．．．．あれを全部 捌いたか．．．．．」

黒羽は多少の驚きを見せつつも私の一撃を受け止める。
だけど反撃はしてこない。

流石に黒羽でも、あの一撃から即座に反撃に転じる事は出来なかったのだらう。

私の狙い通り！　ここが勝機だ！！

「ま、だまだあああああっ！！」

反撃をさせず距離をとる事も許さず、私はそのまま攻撃を繰り返す。
その全てが全身全霊．．．乾坤一擲の一撃。
筋肉の脱力と緊張を間断なく連続で行っていく。

「ちっ．．．．．」

この戦い．．．いや、私が一緒にいた時から初めての舌打ちを見せた。

私は今　黒羽を追い詰めている！
この勝機を逃してはならない！！
このままいけば．．．このままいけば　もしや．．．．．っ！

「ふんっ!!」

それは．．突如終わりを告げた。

今まで反撃を許さなかった私の一撃は、いとも容易く弾かれた。弾いた人物は当然、目の前にいる黒羽ただ一人。

だが感じる雰囲気はさつきと全く違い、鋭い刃物を突き付けられるような感じがする。

「まさか俺が本気を出すとはな．．．

油断していたとは言え、凄じやないか篤。

だが、こうなった以上はもう諦めてくれ．．．．．」

「まだだっ．．．まだ終わって」

瞬間、身の毛がよだつような感覚に苛まれ、私は即座に全速力で黒羽の間に合いから遠ざかる。

間合いから外れたと同時に、私の眼前で二つの鋭い風切り音が聞こえた。

どうやら黒羽を本気にさせてしまったらしい．．．

あの一撃は私もよく知っている。

よく千冬さんとの戦いでも使っていた。

脱力から転じる緊張。それを一息の内に二度繰り返す技。

本人の黒羽は、名前など無いと言っていたから、私たちは【二閃】と呼んでいた。

ちなみに、三撃の場合は三閃。四撃の場合は四閃だ。
黒羽を本気にさせた嬉しさと、一種の諦めが混ざった複雑な感情が生まれてきた。

「どうやら．．そうみたいだな．．
だが、ただでは終わらせないさ．．．」

だからと言って降参するつもりなど毛程もない。
私は竹刀を握り直して、構えを正す。
小手先の技など最早 通用しない。
なら、私が持つ全身全霊全力の一撃を黒羽に叩き込む！！

「そうか、成る程・・・」

「なら俺も全力の一撃で応えてやる」

私の気持ちを察したのか黒羽も構えだした。同時に、黒羽から感じる雰囲気も姿を変え、一本の打ち鍛えられた刀へと変貌する。

やはり、この人が師匠で良かった．．．
この人こそが頂。私が目指し、追い越したい人。
尊敬の念を込めて貴方に打ち込みましょう。

「!」

「．．．．．ッ！」

最早お互いに言葉は不要。

まるで示し合わせたかのように同時に駆け出した。

お互いの構えは共に中段構え。

そこから最も威力の高い一撃は、相手の左肩から右腹を一気に斬りつける袈裟斬り。

筋肉を可能な限り脱力する。

脱力して、脱力して．．．脱力して．．．

筋肉を羽毛に生まれ変わらせる。その後、一気に緊張。

今、私の全てを積み込んだ一撃が、頂に座する一撃と対峙した。

「．．．．．」

「．．．．．」

とても静かだ．．．．．

私たちはお互いに背中を向き合って一言も発しない。

観客達はとっくのとうに言葉を発するのを止めている。

その中で、この音の無い静寂の世界で“音”が産声を上げた。

ビシッ

その音の正体は私の竹刀だった。

中間部分で綺麗に割れている。

それが意味するは即ち、私の敗北だ。

竹刀の割れる音が、私の敗北を静かに告げた
.
.
.
.
.

頂に座す（後書き）

第とのバトルはここで終了。

うん……予想以上に薄かったかなあ……？

そしてまだセシリアとの決闘に移っていない・・・

あと一話・・・あと一話書いたら決闘が始まる・・・箒？

どちらにせよ年内はむりだああ
・
・
・
・
・
・

天才と再会（前書き）

なんとか年内に更新出来ましたあゝ

天才と再会

セシリア side

「ねえねえ聞いた？ 織斑ちゃんと篠ノ之さんが決闘するらしいよ！」

学園での授業も終わり、自分の部屋に戻ろうとしていた わたくしは、その言葉を聞いて歩みを止めた。

（織斑 一夏と篠ノ之さんが決闘？

わたくしとの決闘を目前に控えているのに、こういうことですよ！）

わたくしとの決闘があるのに他の人との決闘にかまけて・・・一種の怒りの感情が湧いてくる。

授業態度もだらしなければ、人としてもだらしない方ですわ！！お姉さんがISの世界覇者というだけでこの学園に入ってきたポツと出の男子。

親の七光りならぬ、姉の七光りですわね。

「それに、千冬お姉様のお師匠様の黒羽くんもいるらしいよ！これは行かなくちゃ損でしょ！」

（え・・・・・・？）

この下らない会話に興味を無くしたわたくしは、再び歩き出した足を止めた。

真鴉 黒羽．．．．．

織斑先生の師匠であり、そして、織斑先生と、織斑 一夏、篠ノ之さんと幼馴染だという男子。

詳しくは知りませんが、片目と片腕を失っている男子。

そして．．．お母様以外で初めてわたくしを怒った男子。

少なからず、わたくしが興味関心を抱く彼がそこに？

わたくしの努力を建前無く認めてくれた彼がいる．．？

(．．．．．これは、行かねばなりませんわね)

もしかしたら、真鴉 黒羽はわたくしに何かを見せてくれるかもしれません。

彼の言った、「力を持つ者の責任と覚悟」が一体なんなのか．．．

彼は．．．それを わたくしに見せてくれるかもしれない．．．

．．
自然と、わたくしはお二人が決闘する場所に歩みを向けていた。

~~~~~

「これは．．．．．」

剣道場に着いたわたくしは、お二人の戦いを見て思わず声を漏らし

た。

確か篠ノ之さんは剣道の全国大会で優勝した程の実力者。

それを織斑 一夏は互角に渡り合っていた。

他の人に話を聞けば、これは決闘ではなく、ただの模擬戦らしいのですけど、ただの模擬戦とはいえ、織斑 一夏の認識を改めなければいけませんわね。

そして、お二人の戦いは引き分けに終わった。

周りからはお二人の健闘を讃えての賞賛の声と拍手。

わたくしも、心の中からお二人に拍手を送りましょう・・・

だけど、これだけでは終わらなかった。

突然、真鴉 黒羽が篠ノ之さんとの模擬戦を希望した。

周りからの声は一際大きくなる。

わたくしも、喜びに似た感情が胸の内から湧き上がった。

（彼が戦う・・・

一体どんな戦いになるんですの？

彼は、わたくしに何を見せてくれるんですの？）

まるでクリスマスプレゼントを待つ子供のように、わたくしは胸を高鳴らせ、知らず知らずの内に、自分の手を強く握りしめていた。そして、篠ノ之さんの休憩が終わり、ようやく戦いが始まった。

その時、わたくしは声を発する事を止めた。

彼の．．．真鴉 黒羽の放った剣閃に心を奪われた。

一種の美術品と見まごうばかりの真つ直ぐで美しい太刀筋。遠くにいる わたくしまでも斬られた感じを覚える鋭利さ。

決して武道の観点から彼の技術を褒めている訳ではありませんし、第一わたくしにはサツパリ分かりません。

では何を彼から感じたのか、それは努力です。

わたくしも代表候補生になるために努力をしてきたから分かる。

ただひたすらに続け、ただひたむきに積み重ね、一体どれほどの時を経たのか．．．

考えるのが億劫になるほどの時が、彼の技に詰め込まれていた。

一瞬、片目と片腕を失っている彼が戦えるのかと疑った自分を恥じた。

彼は、それを補うに余りある程の努力を積み重ねているのですから。

勝負は彼が最初有利に進めていましたが、篠ノ之さんが決死の覚悟で踏み込み、盛り返してきたと思われた矢先、真鴉 黒羽から感じる雰囲気が変わった。

どうやら本気をだしたみたいですね。

薄っすらとですが、日本刀の輪郭が彼から見えます。

流石に武道をたしなんている篠ノ之さんは明確に見えたらしく、竹刀を握り直す。

そして、お二人は同時に駆け出した。

剣と剣が交差し、お二人はお互いに背中を向き合う。

音が止んだ世界の中で、篠ノ之さんの竹刀が割れる音だけが静かに響いた。

つまり、篠ノ之さんの敗北。

わたくしは未だに惚けている観客達の合間を縫い、静かに道場を後にした。

「真鴉 黒羽．．．．．ふふ、面白いですわね．．．．．」

わたくしは彼の名前を口にし、笑みを零した。

女性に媚びへつらう事なく、自分を貫き通し、途方もない努力をして高みにいる男性の名前。

その彼との決闘．．．．．

胸が昂ぶってきましたわ。

今日の戦いを見て、彼の言った言葉は薄っすらとしか分かりませんでした。きっと、決闘当日になればその答えも明らかになるはず。

「もし、あの動きをISでもしてきたら、わたくしは．．．

いえ、それはあり得ませんわ。

そうでしょう？ ブルーティアーズ」

フッと浮かんできた考えを自分で否定し、左耳に着けてあるイヤリング．．．自分の愛機にそっと語りかける。

心なしか、イヤリングは輝き、わたくしの言葉を肯定しているように思えた。

本当に決闘が楽しみですよ．．．

ですが、勝つのはわたくし、セシリア・オルコットと、ブルーティアーズですよ！

## 黒羽 side

箒との模擬戦は、俺の勝利に終わった。

だけど俺自身にも反省点はあったな。

もしあのまま本気を出さなかったら、負けてたのはきつと俺だった。まあそれだけ、箒が強くなったって事だろう。

俺としては嬉しい限りだけどな。

「大丈夫だったか箒。立てるか？」

「ああ、大丈夫だ」

本気で打ち込んでしまったから心配して箒に手を差し伸ばしてみると、箒は俺の手を借りずに立ち上がった。

ふむ、見た所大丈夫そうだな。打ち身の心配もない。

「それにしても、やっぱり強いな黒羽は・・・」

私もある程度強くなった自信はあったんだが、全然歯が立たなかった。

寧ろ、改めて黒羽のいる高さを思い知ったよ」

「ははは、当たり前だ。

まだまだお前達に負けてやるつもりはないぞ。

例えこの身であつてもな」

俺は超えられるべき壁だが、今はまだ超えさせてやらない。

一夏も筭も、この先まだまだもつと強くなる。

目が無かるうが、腕が無かるうが、その時が訪れるまで、俺は二人に負けないし、他の人達にも負けてはならない。

「．．．．．なあ黒羽．．．一つ聞いてもいいか？」

「ん？　どした？」

「その．．．お前の身に何があつたんだ？」

私と別れた6年の間に一体何が起こつたのだ？」

筭は一瞬気まずそうな表情をした後、俺の隻眼隻腕の事について聞いてきた。

んう．．．これはちよつと話しづらいな．．．

俺としては話しても問題ないんだが、一夏がなあ．．．．．

「まあ、その．．．あれだな、ちつとばかりISと殺りあつた時に．．．な。

詳しくは一夏に聞いてくれ。

俺は別に話しても構わないぞって伝えたら、きつと話してくれる筈だから」

「あ、おい黒羽！

ISとやりあつたって一体どう

」



これ以上は流石に一夏の許可なく話せないので、抗議の声を上げる  
筈に応える事なく、道場の出口へと向かった。  
すると．．．．．

『真鴉くんお疲れ〜っ！！ スッゴイ強かったよ！！ さっすが千  
冬お姉様のお師匠様だね！！』

女子の大軍勢に囲まれた。  
くっ、これじゃあ道場から出られない．．．  
それに俺は千冬さんの師匠じゃないぞ。

「真鴉 黒羽くんっ！！  
君の技術に我々剣道部は一目惚れした！  
是非とも我々剣道部に入部してくれないか！！」

と、そうこうしている内に剣道部の先輩たちから勧誘された。  
手には入部届けの用紙が．．．．．っておい！

「待ってくれ！  
何故既に俺の名前が書かれているんだ！？」

「細かい事は気にするな、後は印鑑を押すだけだ！  
なんなら指印でも構わない、朱肉なら用意してある！  
ささ、軽い気持ちで判を！！」

決して迷惑はかけないから!!」

「誰が押すか!!」

なんだその悪徳商法と夜逃げする気満々で連帯保証人をさせる口振りは!

よく見ると用紙に書かれている俺の名前は俺の筆跡と同じで、とても怖い。

何故IS学園の女子はこうもテンションが高いんだ?

女性というのは、もっと慎ましくお淑やかにだな・・・

「さあ! どうするんだ!! 印鑑か! 指印か!」

『さあ! さあ!!』

「どつちにしろYesじゃねえか!!」

まずい・・・これは相当にまずいぞ・・・

数は力なり。多数決の原理。など、過去の人達は上手い事を言う。いつしか剣道部全員が集まって俺に判を求めてきている。

このままでは確実に判を押す事になってしまう。

だったら・・・

「後ろに向かって前進っ!!」

逃げる事なく、勇気ある前進を！！ 後ろに向かって・・・

決して逃げる訳じゃない。

『三十六計逃げるに如かず』という言葉が素晴らしいなんて思っていないぞ？

俺はそのまま道場の裏口から飛び出して走り出す。

「真鴉 黒羽が逃げたぞおおお！！

なんとしても捕まえて、我々剣道部に入部させるのだ！！  
最悪、指一本さえあれば事足りる！！」

『オオオオオオオ！！』

「指一本って怖えよ！！ どんだけ血気盛なんだ！？」

もしかしてここはヤクザのシマなのか？

それとも俺は戦国時代にタイムトラベルしたのか？

どちらにせよ、彼女達の目が血走っている事に変わりはない。

身の危険を感じた俺は、全速力で道場から遠ざかった。

こうして、俺と剣道部員の壮絶な鬼ごっこは始まった・・・

~~~~~

「はあ~~~~・・・づがれたあ~~~~・・・」

夕日も半分以上身を隠している夕暮れ時、俺は自分の部屋に戻った瞬間にベッドに身を投げ出した。

実は、今の今まで剣道部員に追われていたんだ。
なんなんだあの異様なまでのテンションは．．．．．
一瞬怖いと思っってしまった俺がいるぞ。

「ふう．．．．．よつと、とりあえず腹が減ったからメシでも作るか」

鬼も逃げ出す鬼ごっこが終わって安心したのか、俺の腹は空腹の鐘を鳴らす。

俺は気だるさ感を隠す事なく台所へ向かおうとした瞬間．．．．．

コンッ、コンッ

ドアをノックする音が聞こえた。

誰だ？　もしかして剣道部．．．じゃないな。

この時間はみんな部屋に戻っている。

じゃあ一体誰なんだ？

俺は怪しみながらも、ドアを開けてみると．．．．．

「やつほ　束ちや　」

バタンッ、ガチャッ、ジャララッ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふう、さてとメシ・・・・・・・・」

ここまでの一連の動作、コンマ0.7秒。
どうやら俺は相当疲れているみたいだな・・・
よくわからん奴が幻覚で出てきてしまった。
早くメシ食って寝よう・・・・・・・・

「ちよつと待つてよクロく〜ん！
久し振りに超美少女天使の束ちゃんとは再会したのに冷たいよ〜！
寧ろあしらい方が洗練されてるよ〜！」

「だああ！ やっぱり幻じゃなかったか！
なんでお前がここにいやがる！
通報するぞ世界のお尋ね者め！」

どうやら現実だったようだ。
ドアをしきりにドンドンと叩いてきやがる。
これじゃ隣に迷惑じゃねえか！
だが、しばらくしてるとドアを叩く音が止んだ。
やっと諦めたかと思うと、ドアから黒い穴が・・・・・・・・って、
へ？

「とお ぬけフ〜プ〜」

「ちよつ、お前！　それ危ないから！　色んな意味で危ないから！」

その黒い穴から束がのそのそと入ってきた。
てか、これ版權としてどうよ？

主にネズミが嫌いな青いタヌキやどら焼きが好物な青いタヌキに引
っ掛けていないか？

「ぶはあ、ようやく入れたよ」

そんな事を全く気にかけていない束は、衣服をポンポンと叩くと、
ドアに引っ付いてるフラフープを取った。
ドアには全く傷が付いておらず、以前と変わりようがなかった。

「久し振りだね、クロく　わぶっ」

そして、そのまま俺に抱きつこうとしてきた束の顔に手をおいて阻
止。

俺は近くにあったイスに腰をかけた。

「はあ．．．で、一体どうしたんだ？
再会にしては突然すぎやしないか？」

「ふっふっふ、甘いねクロくんは。」

恋の再会とは常に予期せぬ　　ああ待つて待つて！
素直に話すから電話を戻してよ」

束がふざけようとしたので、電話を手を取ってみる。
すると、束は慌ててそれを制する。

まあ、束ならここら一帯の電子機器に細工してるだろうがな。

「ならもう一度聞くんが、一体どうしたんだ？
どうやってこの学園に侵入した？」

「侵入だなんて人聞きが悪いな」
私はただ普通に入って来ただけだよ」
その途中に運良く学園の機能が人知れずダウンしたけどね」

こいつは全く・・・世界を揺るがす事を平然と言いやがる。
あまりにも常識からぶっ飛んだ言葉に、俺の口からため息が漏れた。

「・・・その事については深く追及しないでおこつ。
それで、ここに来る事を千冬さんには言っているのか？」

「ん、今回はちーちゃんにも話してないんだ」
いわゆるお忍びってやつだね」
そして・・・目的はクロくんの事だよ」

そう言うと、束は泣きそうな表情をして、俺の眼帯と、先がない左

腕をそつと優しく撫でた。

「ごめんねクロくん．．．

私が造ったISのせいでこんな事になっちゃって．．．
いくら謝っても謝り足りないよ．．．．．」

「束．．．．．」

なんだ．．．

こいつもこいつなりに責任を感じてたんだな．．．
俺は篠ノ之 束という人物から初めて人間味が感じられた。

「なあに、そんな事気にすんな」

「ふえ．．．．．？」

俺は束の涙を指で拭ってやり、頭に手を置いて優しく撫でてやった。
束は訳がわからずポカンとしていた。

くくっ、天才の束がこんな表情をするなんてな。
数式の答えは解っても人の頭は解けないってか？

「お前が自分の造った物に責任を持っているって分かったただけで充分だ。

それに、こうして直に謝ってきたんだから、俺はもう何も言うつもりはないよ」

「で、でも．．．．．」

「それによ、3年前の事件で俺の命を救ってくれたしな。逆にこっちが礼を言わなきゃな」

「へ？ 知ってたの？」

「当たり前だ。」

人の生き死になんて見れば判る。

あの時の俺は確実に死んでいた。

それこそ、どんな病院でも手が施せない程にな。

その俺が命を取り留めた。

なら、可能性としてお前が助けたという選択肢しか残っていない」

「あはは、全部お見通しなんだね．．．」

当然だ。俺にとってはそれくらい出来て当たり前だ。

俺の言葉を聞いた束は、さっきまでの泣きそうな表情を一変させ、柔らかな笑みを浮かべていた。

「さてと、クロくんからお許しを貰った事だし、私はもう帰るね」

「なんだ？ もう帰るのか？」

折角お前の分までメシを作ってやろうと思ってたのに

「食べる食べる！！」

メシの単語を聞いた瞬間に束は踵を返して食卓に着く。
その手には既にナイフやフォークが握られていた。
全く、現金な奴だな・・・

「束。今日のご飯は和食だからハシの方がいいぞ」

「はぁい」

さっきまでの泣きそうな表情はどこへやら・・・
まるで子供のようにウキウキしてやがる。

「さてと、ならその期待に応えてやるとするか」

米は・・・よし、炊き上がっているな。

鮭の塩焼きは食堂の技術を盗みつつ自分でアレンジを加え・・・
その間に汁物を・・・お、つみれがある。つみれ汁でいいだろう。
後は野菜で・・・

「なあ束、漬物って大丈夫だったか？」

「クロくんの作るものならなんでもバッチこいだよ」

よし、大丈夫みたいだ。

確か冷蔵庫に昨日作った白菜の漬物があるからそれを使おう。
後はなにか．．．そうだ。

束の好物の卵焼きを作つてやろう。
和風だしを少し加えて、ふんわりと焼き上げれば．．．出来上がり。
丁度他の料理も良い具合になってきたな。
これで完成だ。

「束、出来たぞ」

「わあ、いい！ 待ってました」

出来上がった料理を食卓に並べていく。
束は並べられてる料理を見て目を輝かせていた。
焦るな焦るな、まずは挨拶が先だろ。

「あ、えへへ、クロくんの卵焼きだあ」

「確かお前の好きだったものだよな。
ほらほら、早く食べたいなら早く挨拶するぞ」

そう言つて俺達は手を合わせて．．．

『いただきます』

挨拶を言い、食事を始めた。

~~~~~

「ふう．．．．．ご馳走さまでした」

「ああ、お粗末さまでした」

ご飯が食べ終わり、束はイスに深く腰を降ろしている。

ちなみに今日のご飯の味は．．．目の前で嬉しそうな表情をしている束と、空っぽの食器を見れば言うまでもないだろう。

俺としても嬉しい限りだ。

「やっぱりクロくんは料理が美味いね」

さすが束ちゃんのお婿さんだよ」

「またその冗談か？ 6年前と変わんないな」

俺は束の冗談を適当に流し、食器を台所に運ぶ。  
さすがに何回も言つと飽きられるぞ？

「ぶつぶつ．．．今は本気なのに．．．．．」

「ん？　なんか言ったか？」

「なあんでもないよ」

それじゃ、私はもう帰るね」

何故か束は不満気な表情をして、そそくさと帰る準備を始めた。  
俺なんか言ったかな？

「あ、そうだ。箒には会っていないのか？」

そういえば箒が束の事でクラスの皆さんと少し揉めたんだよね。  
なんとかここで関係を修復できんもんかね？

「余計なお世話かもしれないが、箒がお前の事で少し悩んでいてな。  
どうにか出来るのはお前しかないんだよ。  
会って話しをしてもらえないか？」

「・・・ごめんねクロくん。」

私も箒ちゃんには会いたんだけど、今はまだ会う時期じゃないんだ。

時期が来れば、必ず箒ちゃんとお話するから・・・」

箒と会うように提案してみるが、束に断られてしまった。  
俺としては早く会って和解してほしいんだが、本人が無理なら仕方

ないよな．．．

「時期じゃない．．．か．．．．．  
やらなきゃいけない事があるみたいだな。  
あんま無理すんなよ？」

「あははは、私は後にも先にもいない超天才の束ちゃんだよ？  
そんな心配なんて必要ないよ。  
むしろ私としてはクロくんの方が心配だよ。  
クロくんは他の人のために無茶をしちゃう人だから」

「む？　そうか？　俺としては別に普通なんだけどな．．．」

「はあ．．．無自覚なのがまたタチが悪いね。  
クロくんに関わった悲しむ人達がいる事を忘れちゃ駄目だよ？  
私も、その中の一人なんだから」

今までの子供っぽい態度から一変、腰に手をあてて、お姉さんオー  
ラ出しながら人差し指を俺に突きつける束。  
束もそんな事出来たんだ．．．  
初めて知った。

「あいよ。肝に命じておくよ」

「うん　素直でよろしい」

俺の言葉に満足した束は、また子供っぽい感じに戻り、満足したようにドアを開けた。

「それじゃあね、クロくん。」

久し振りに会えて嬉しかったよ」

「おう、そうか。俺も悪くはなかったぞ。」

じゃあな束。また会おうや」

「うん　またねクロくん」

そして、束はなんにも警戒せずに俺の部屋から出て行った。

一応確認のために俺を部屋から出ると、束の姿はもう完全に消えていた。

まるで最初からここにいなかったかのように・・・

部屋に置いてある、時計の秒針の音だけが、静かに響いていた・・・

・・・





## 決闘（前書き）

皆様、あけましておめでとうございます。

少し更新が遅くなっていました。

そして、ようやく来ましたセシリアとの決闘！

あるお方のご意見を頂き、ACの兵器の名前をちょこつと出しました。

それではどうぞ！！

注意！！

長文になってしまったので読み疲れしないように注意してください。

## 決闘

### 黒羽 side

俺と一夏がIS学園に入学してから一週間経った。

一週間。そう、俺とセシリア・オルコットとの決闘の日でもある。学園での授業が終わり、放課後に俺達はアリーナへと集まっていた。観客席は満員御礼状態。立ち見客すら出てきている程だ。オリンピック以上かもしれない・・・

「さてと・・・俺のISはまだなのか？」

アリーナに来てから30分以上経っているが、未だに俺のISは到着していない。

待っているセシリアには少し申し訳ないな。  
束の奴め・・・一体なにしてるんだ？

「黒羽のISか・・・」

どんな感じなんだろうな？」

「さあな、私には見当もつかない」

横にいる一夏と箒は俺の気も知らないで呑気に話している。  
この一週間、ISの事を箒に教えてもらってたんだが、その・・・  
なんて言えいいのか・・・

とにかく擬音が多かった．．．．．

『グイツといってバツとやってズカーンだ！』だの．．．俺には到底理解する事が叶わなかった。

唯一助かったのは、模擬戦の相手を度々やってくれた事だ。

一人で自己鍛錬するのも寂しいし、一夏だけだと偏っちまうからな。おかげで少しずつだが、以前の俺に近付けてきた。

「ま、真鴉くん！ 真鴉くん！！」

とそこへ、危なっかしい足取りで走ってきた山田先生と、それとは真逆でいつも通り冷静な千冬さんがやってきた。

にしても山田先生は危ないな．．．

注意力散漫というか何というか．．．

あ、あんな所に段差があるぞ。

今の山田先生なら．．．うん、確実に転ぶな。  
準備しとこ．．．．．

「はわ！？ はわわわ．．．．．

はええええええええええ！っ！！」

案の定、山田先生は段差に躓いて転けた。

最初は何とか踏みとどまろうと頑張り、俺も心の中で応援していたんだが、俺の応援も心虚しく、山田先生は重力に従って床に倒れる。

「ほっと．．．大丈夫ですか？ 山田先生」

「はえ．．．．．？」

勿論 俺がそんな事を見逃し訳はない。

すかさず俺は山田先生の前に踏み込み、倒れそうになった体を支える。

本当なら両腕で支えてやりたかったんだが、今は片腕だけなので少々荒かったのが心苦しい。

「あ、あああ、あのですね！

これは、その、決してワザとかではなくてですね！

いや、でも、真鴉くんを抱えられて嬉しいな．．．．．

」

何が起こったのか分からず、暫らくの間 目をパチクリしていた山田先生だったが、理解した瞬間にバネ仕掛けのように跳び上がり、顔を赤くしながら何かを呟いている。

やっぱあれか、自分の転んだ所を生徒に見られて恥ずかしかっただけ、そうというのは誰にでもある。頑張れ山田先生。

」

「黒羽、お前のISが今届いた。

アリーナを使える時間は限られているから早くしろ」

ワタワタしていた山田先生も、千冬さんの一声によって顔つきを真

剣なものに変えた。

でも、なんだか千冬さんから感じる雰囲気妙に刺々しく感じる。  
なんか怒ってる？

「織斑先生、なんか怒ってます？。」

「・・・怒ってない」

「いや、その感じは怒ってますよね？」

「怒ってないと言っているだろう」

その態度は絶対に怒っている態度でしょう千冬さん。

結局千冬さんは何も言ってくれず、俺達はISがあるであろう格納庫に着いた。

重々しく格納庫の扉が開く。

その先にあつたものを見た瞬間・・・

俺は、言い知れない衝撃を感じた。

全身を黒一色で統一された黒いIS。  
見ただけで理解できる美しい機能性。  
滑らかであり、そして鋭利な流線型のフォルム。

それに衝撃を受けたのか？

答えは否だ。

衝撃を受けたのは外見によるものではない。  
ただただこのISは．．．この目の前にあるISは、俺の心を震わせる。

俺はこのISとの邂逅を待ち望んでいた。  
その感情は懐かしい？ 郷愁？ 歓喜？ それとも恋？  
どれ程の言葉を並べても言い表せない想いが俺の中に渦巻く。

「それでは軽くルールの説明をしますが．．．．．」

山田先生が何か言っているが、俺には聞こえない。

俺は自分の中にある感情に抗う事なく、ISに手を伸ばし、そして触れた。

その瞬間、俺の視界は眩い光に覆われて、意識を失った

~~~~~

「ん．．．ここは．．．．．?」

目が覚めた瞬間、そこは俺がいたアリーナではなく、無数の高層ビルが生えている謎の空間だった。

その中で一際高いビルの屋上に俺は立っていた。

空は雲一つない青空。

普通なら気持ちいいのだが、まるで青い絵の具を塗り広げただけの青空に酷く気持ち悪さを覚える。

「
やつほ、お久し振りだね黒羽」

その時、俺の背後から声がした。

その声を俺は知っていた。

俺は後ろを振り返ってみると・・・

「・・・やつぱりアンタが」

スラッとした長身、夜を写したかのような長い黒髪。

3年前に俺が意識不明の時に出会った謎の美人さんだった。

「おひさ、だね。

ありや、前見た時から随分と様変わりしちゃったね黒羽」

「まあな。でも悔いはしないから別にいい。
それよりも、なんでアンタがここにいるんだ？」

「そんなの決まってるじゃないか。
黒羽はISに触れた。そしたらこの世界に来てあたしに出会った。
あたしは黒羽のISだよ」

「なに？ アンタが俺のISだと？」

いや、でも待てよ・・・
確かISには自我が存在していると書かれていた。
それならこういう事も納得できる。

「そうそう、黒羽があたしの相棒。
これから宜しくね。相棒」

「おう、宜しく頼むぜ」

まあ、なんというか・・・お気楽な性格の人で安心した。
気難しい性格の人はあんまり嫌だからな。
これから仲良くやっていけそうだ。

「さてと、もう少し黒羽とお話していたいけど、あんまり時間がないみたいだね。
あのイギリスのお嬢ちゃんと闘うんだろ？」

「ああ、ぶつつけ本番になっちまったがな。
でも負ける気がしない。」

それに、一夏達も見ているからな。尚更だ」

俺の事なんかを目標にしている一夏達のためにも、負ける事など許されない。

例えばそれがISの勝負であつてもだ。

俺は壁。後ろに続く者達に越えられるべき壁だ。

俺の遥か頭上を越えるその日まで、俺はどんな奴にも負けられない。

「なに、大丈夫だよ。

黒羽はあたしの相棒なんだからさ。

前世と同んなじ、一緒にあの世界で生死をくぐり抜けた、あたしの半身とも言つべき存在なんだから」

「待て！ 前世・・・だと・・・」

何故その話を・・・いや、それよりも、前世と同じっていう事は・・・」

俺の中にあるピースが次々とはまっていく。

あの感情が何故湧いてくるのか漸く分かった。

どうりで懐かしい筈だ。どうりで待ち焦がれていた筈だ。どうりで嬉しい筈だ。どうりで愛おしい筈だ。

こいつは、もう一人の俺とも言つべき存在なんだから。

俺の半身とも言つべき存在なんだから。

「そう、黒羽のお察しの通り。

なんの因果か分からないけど、前世ではAC、そして今ではISに

なっちゃっているのさ。

さあ、あたしの名前を唱えておくれ。

あたしの愛しい主、あたしの愛しい相棒。

あたし
ISの名前は言わなくても分かるだろう？」

「ああ、勿論だ・・・

お前の名前は」

~~~~~

「・・・では最後に、このISの名前は・・・」

「【夜】・・・」

優しく、幼子をあやすように。

愛おしく、花を愛でるように、愛機の名前を唱える。

名前を言った時には既に元の空間に戻っていた。

そこまで時間は経っていないみたいだな。

「え？　なんで真鴉くんがISの名前を・・・」

「こいつは、“俺”が“俺”になる前からの仲ですからね。

姿は違えど、こいつ以外の相棒など存在しえない。

さあ、行くぞ。初陣だ夜」

夜は俺の言葉に応えて、新たな俺の身体の一部となる。  
その瞬間、夜から初期化と最適化終了の声が聞こえた。  
俺と夜が合わさって姿は、無駄なく研ぎ澄まされたシャープな装甲  
と、左肩に生えている黒い羽。

その羽が半身を守るように俺を包んでいる。

まさしく俺のためだけにあるISと言っているだろう。

「そんな・・・ファーストシフト一次移行がが一瞬でされるなんて・・・  
こんな事、あり得ないです・・・」

ファーストシフト  
一次移行。

確か操縦者とISが共に時間を過ごし、共に理解した時に起こる現象。

それを一瞬でした俺に山田先生は驚いていたが、俺にしてみれば至極当然の事だ。

俺と夜は十数年以上も生と死が渦巻く世界を生き延びてきたんだ。

俺達はお互いにお互いを理解し、知り尽くしている。  
ファーストシフト

むしろ一次移行だけで済んだ方が俺からしたら不思議だ。

「さてと、それじゃあ皆んな、行ってくるわ」

「ああ、勝ってこい！」

「黒羽は私達の憧れなんだ。無様な姿は晒すなよ」

「ふつ、お前に応援など必要か？」

三人は三様の言葉を俺に送る。

ただどその言葉に秘められてるものは、俺が必ず勝つという絶対の想い。

その想い．．裏切る訳にはいかないよな？

俺は三人の想いを背に乘せて、戦場へと飛び立った。

s i d e o u t

「お待ちしておりましたわ。真鴉さん」

アリーナの中央、その上空にて、黒羽とセシリアは邂逅した。

お互いにISを装備し、黒羽は黒、セシリアは青と、この二色がアリーナの空に飛んでいた。

「済まない、予想以上に待ててしまったな」

「本当ですわ。貴方と決闘するまでの一週間、どれほどの時を待っていた事か．．」

黒羽は待たせてしまった事をセシリアに詫びるが、セシリアはそれ程怒ってはおらず、寧ろ待ちわびていたかのような表情を見せる。

「ここまで待たせてくれたんですもの。」

真鴉さん、殿方として わたくしのダンスに付き合ってくださいるかしら？」

「ダンスか．．．洒落てるねえ。」

それじゃあ、演目は白鳥の湖でいいか？」

「あら、ふふふ．．．貴方も随分とシャレていますこと．．．」

これから戦うというのに、二人の会話は柔らかく、まるで親しい友達のようなだった。

お互いに楽しく会話をしていた後、黒羽はゆっくりと地面に降り立った。

「一体どうなされたんですの？ 真鴉さん」

「なに、いきなり終幕だと面白くないだろ？  
フィナーレ  
イントロタクシオン  
まずは序奏から、順番をおっていこうぜ？」

「ふふ、それもそうですわね。」

それでは真鴉さん、わたくしとブルーティアーズと一緒に踊っていただけるかしら？」

Shall We Dance？」

セシリアがそう言うと同時に、ブルーティアーズから4つの機械が射出された。

ブルーティアーズと同じ名を冠した兵器、ブルーティアーズ自立機動兵器だ。  
4つの自立機動兵器は、無邪気に周囲を飛び回るも、その銃口は黒羽を狙っていた。

「．．．．．I'd love to」

だというのに、黒羽は笑みを絶やす事なく、セシリアのお誘いにつた。

その所作は、まさしくダンスのお相手を頼まれたかのようにだった。  
今、セシリアと黒羽の決闘は幕を上げた。ダンス

主演は黒羽とセシリアの二人、観客は無数に詰め寄せている生徒達。  
果たして、観客から勝利の喝采を浴びるのは誰なのか．．．．．

黒羽side

「お征きなさい！ブルーティアーズ自立機動兵器！！」

戦闘の口火を切ったのはセシリアだった。  
セシリアの号令の元、従順なる兵士達は俺の周りを取り囲み、死角からビームを撃ち出す。

「はっ、こんな程度！」

が、そんな作戦は想定内。

わざと死角を作りだしてコースを限定させていた俺は、予め織り込み済みであつたかのようにビットの攻撃を躲す。

「やはり躲しますか・・・」

ですが、それも作戦の内ですわ!!」

「むっ・・・」

そこから間断なく撃ち出された、巨大なライフルによる一撃。

その秘められている威力はビットの比じゃないだろう。

ま、そんなのに当たってやる義理もなく、肩からスラスターを噴かせて後方に回避する。

さっきのブースト・・・うん、いい加速だ。

「ふう、やれやれ・・・序奏だといっているのに飛ばし過ぎやしないか？」

「あら？ この程度でもう音を上げるんですの？

そこをどうにかするのが殿方としての役目ではなくて!!」

「はは、違いねえ!!」

そこから休みなく行われる射撃の嵐。

時にはビット。時にはライフル。

一発でも当たれば即座に崩されるだろう。

なのに俺達の会話は相変わらず軽い。

それは、セシリアもそうだが、俺にも余裕があるからだ。  
当然、種も仕掛けもある。

流石に俺でも初めてのIS、ましてやこの射撃を捌ききるのは少し  
厳しい。

だから俺は地面に立って、攻撃可能範囲を半分減らしたんだ。  
空中いれば、360。全方位からの攻撃が来るだろう。

だけど地面にいれば、その範囲を約半分にまで減らす事ができる。

それに、ISの感覚を馴染ませる意味も兼ねている。

俺はセシリアの攻撃を危な気なく躲し続けていた。

「ん．．．ちつ、このハイパーセンサーとやらが邪魔臭いな．．．

．．．」

だけどこのハイパーセンサーとやらがどうも邪魔臭い。

この機能は全視覚を視る事を可能にしているが、俺にとっては無用  
の長物。寧ろ障害物だ。

わざわざ見る迄もなく、相手の攻撃は気配で感知している。

そこに視覚で捉え、それを脳に伝達するまでの時間が邪魔をする。

俺自身による一工程とハイパーセンサーによる二工程が変な摩擦を  
生んでいるんだ。

仕方ない、ちょっと試してみるか．．．

（おい夜、聞こえるか？ お前に少し頼みたい事がある）

（はいはい分かってるよ。

ハイパーセンサーの事だろう？



今からOFFにするから少し待っててね)

試しに夜を呼んでみた所、夜は応えてくれて、その上に俺が抱える問題まで既に解決策を考えててくれた。

(仕事が早いじゃないか。流石だな夜)

(当ったり前じゃないか。

あたしも黒羽の戦いを見て感じているんだから。

黒羽が何を思っ何を考えているかなんて全部分かっているよ。ほら、これでハイパーセンサーはOFFにしたよ)

カチツと音が聞こえたと思ったら、今まで邪魔臭かった視界は消えた。

これで俺本来の動きができる。

やっぱり夜は頼りになるぜ。

伊達に十数年付き合ってきた仲じゃねえな。

「っ．．．．．いきなり動きが正確になった．．．  
なにか魔法でも使いましたの?」

「いや、魔法じゃないさ。

これが俺本来の動きだ。その攻撃はもう通用しないぜ?」

まあ、セシリアが驚くのも無理はないか。

ISを初めて動かした奴が、自分の攻撃を初見でほぼ完璧に躲しているんだもんな。

だけど、実はセシリアのビット兵器は初めてじゃないんだ。あつたんだ、前の世界でも同じような兵器が。

確か名前は．．．ハーピーって名前だったかな。

アレに比べたらセシリアのビット攻撃は躲し易い。

ハーピーはそこまで狙いを絞っていないが、セシリアのビットは異様に狙い澄まされている。

おそらくセシリア自身がビットを操っているんだろう。

その間にライフルからの一撃がなかったからな。

動きが読みづらい機械よりも、人の意思が感じられるビットの方が遥かに躲し易かった。

「さてと、そろそろ俺一人が踊るのも飽きてきたな。漸く第一幕の開幕だ。一緒に踊ってもらうぜ?」

ISの機動は充分に馴れた。

そろそろ俺も動くでしょうか。

次は空中での機動を馴らしていくでしょう。

「それなら、ちゃんとリードしてくれますわよね?

荒々しいリードはお断りですよ!」

周囲4方向から放たれるビーム。

俺はそれを跳躍するように空中に飛び立って回避する。そこからささずセシリアが真上からライフルを撃つ。

いいコンビネーションだ。けどそれじゃ俺は墜とせない。  
スラスターを起動して俺は右方向に回避する。

「残念だが上等なリードは約束できない。  
ダンスは生まれて初めてなんでね。  
少しばかり荒っぽくなるかもしれない」

俺の右手に光が集まってくる。  
やがて光の粒子は明確な形を帯びていき、夜の唯一の武器を喚び出した。

その武器は刀。しかも長刀だ。

柄も鍔も刀身すら黒い、約八尺程の馬鹿げた長さを誇る黒い刀。

銘を【夜葬】

束の奴・・・いい仕事をしてやがる。

これ程の武器は俺以外には扱えず、これ程 俺に似合う武器はない。

「さあ、一緒に踊ろうぜ！」

「っ・・・もう少しマシなお誘いはなくて!!」

向かってくる俺に対して、セシリアの容赦ないビット攻撃。

俺は左右のスラスターを駆使してビットの包囲網を掻き分け、左半身の攻撃は羽に当って防ぐ。

この羽の名前は【鴉羽<sup>からは</sup>】

左腕がない俺に与えられた堅牢な盾だ。

流石にあのライフルは少々厳しいが、ビットの攻撃なら止まる事な

く防げる。

セシリアを間合いに捉えた俺は、横薙ぎに夜葬を払った。

「くっ．．．！ 本当に荒々しいですわね．．．

殿方としてももう少し上品にリードなさい！！」

「おっと」

まあ、流石に防がれるか。

ライフルを盾に使って俺の攻撃を防いだセシリアは、自分の目の前にビットによるビームの網を描いて俺を遠ざける。

その後にライフルの連射。相手も少しずつ本気を出してきたみたいだな。

にしてもISの空中機動．．．些か馴染まないな．．．

身体全体がふわりと浮かんで、まさに“浮く”と言った感覚が正しい。

そのせいで足に力が入らず、さっきは中途半端な攻撃になっちまった。

丁度、腕の力だけで刀を振る感覚だ。

本当はちよつと決めるつもりだったんだがな。

（お困りみたいだね黒羽。

でも、そんな事もあるつかと束は既に解決策を用意していたよ。

早速使ってみな）

なんと．．．こっちも既に解決策が用意されていたか。

本当に、夜も束もいい仕事してやがる。

「サンキュー夜。

じゃあ早速行くぜ。【舞鴉】発動」

発動を宣言した瞬間、俺の身体は次第に元の感覚に戻っていき、足元には確かな感覚が存在していた。

さっきの“浮く”ではなく“立つ”感覚だ。

これで準備は全て整った。

（そうそう、一つ注意する所があった。

この舞鴉の原理は身体全体にあるP I Cを足元一点に集中させているんだ。

身体を傾けたり逆さまにしない方がいいよ。

地面とキスしたいなら止めはしないけどね）

（おいおい、それをお前が制御してくれるんじゃないのか？ 相棒？）

（あはは、それもそうだね。そんな問題対した事ないか）

やっぱり俺は最高の相棒をもったぜ。

こいつと一緒にならどんな相手にも負けはしない。

よし、サクッと勝つか。

「さてと、そろそろお開きといくか」

side out

「すごい．．．．．」

そう言ったのは誰の言葉だったのか．．．

アリーナのピットにいた一夏達は黒羽の戦いを見てただただ驚いていた。

一夏と箒は純粹な黒羽の強さに、千冬と山田先生は、初めてとは思えない程の黒羽の技術に。

舞鴉を使用した黒羽は、地上にいる時と同じように、瞬動と呼ばれる武道の高等歩法でセシリアとの間合いを詰め、そのあまりにも長い刀で切り払い、セシリアの攻撃を華麗なステップで避け、その無駄の無い動きはまさしく舞いだった。

「織斑先生、一つ疑問に思っただけですけど、なんで真鴉くんの動きにオルコットさんはついて行けてないんですか？」

その中で、山田先生は黒羽の動きを疑問に思った。

いくら人間の限界をいく黒羽でも、ISを使っているセシリアがついて行けてない訳がない。

ISには全方位の視認と視覚を補助しているハイパーセンサーがあるからだ。

「それはな、オルコットとISの間にある認識の差で生み出されるんだ。

情報というのは他者に与えられる外的要因よりも、自身で認識する自己的要因の方が遙かに優先される。

黒羽の歩法は相手に接近を悟らせない巧みな技法だ。

ISのハイパーセンサーは黒羽の動きを捉えているが、オルコット自身は捉えきれてない。

結果、オルコットとISの間に僅かな認識の差が生まれ、オルコットは黒羽の動きを捕捉できていないんだ」

「最も、黒羽の人並み外れた技術があつてこそだがな」と言って、千冬は再び黒羽が戦っている空に目を向けた。

「それに・・・あの馬鹿者め、ISのハイパーセンサーを切っている」

「え？　・・・そんな事は・・・ほ、本当です・・・」

千冬の呆れた声に、山田先生は信じられないといった面持ちでコンソールを叩く。

が、千冬の言葉が本当だと確認するや、山田先生は啞然としていた。ISを使う上で欠かせないハイパーセンサーを切るなど正気の沙汰ではない。

そんな愚行をして代表候補生のセシリアと互角以上に渡りあっている黒羽は本当にぶっ飛んでいる人物だった。

「さて、そろそろ勝負が動くな」

千冬がそう呟いて空を見上げると、丁度 黒が青に迫っている所だった。

勝負の行方は、着実に近付いていた。

黒羽 side

「これで終わりですわ!!」

セシリアの号令の元にビットが俺の周りを飛び、一分の隙もない射撃攻撃を繰り出す。

これが向こうの本気みたいだな。

射撃精度、連射性、どれをとっても最初の比ではない。

斬りかかろうと接近する俺を遠ざけるように怒涛の嵐が吹き荒れる。

「ふっ・・・その攻撃は既に見切っている!」

「ぐっ・・・!」

が、俺はその嵐を掻い潜る。

頭を狙う一撃はしゃがんで避け、背後から襲う一撃は身体を反転させて鴉羽で防ぐ。



そしてセシリアの元まで一息に踏み込み刀を斬り上げる。  
今度の一撃はさっきのとは一味違う。

舞鴉によって確固たる足場を得た本当の一撃。

劣化せずに打ち込まれた一撃を証明するかのように、セシリアは苦悶の声を上げる。

「なんて重たい一撃ですの．．．  
でも、まだまだですわ！！」

受けた一撃を逢えて流す事で衝撃を緩和、そして距離をとる事でセシリアは自らの距離に戻し、再びビームの嵐を生み出す。

流石に攻撃を流されてしまえば衝撃は殆んど死んでしまうし、このままでは千日手だ。

攻撃を流す暇なく連続で斬ればいいんだが、些かビットが邪魔だな．．

「わたくしを前に考え事をする余裕があるんですの！！」

止まっていた俺にチャンスを見出したのか、再びビットが俺の周りを取り囲む。

ここまでの流れでは、まず最初に撃ってくるのが、俺の頭を背後から撃ってくる攻撃。

このビットとの距離は．．．おそらく3mと少し。  
なら行けるな．．．

「もらったぜ!!」

ビットからレーザーが撃ち出される刹那、下から掬い上げるように斬り上げた斬撃は見事ビットに命中し、爆音と共に消え去った。これでまず一機。

「なっ・・・!? そんな、わたくしのブルーティアーズが・・・」

「驚いてる暇があるのか? どんどんいくぞ」

戦場では刹那の隙が生死を別ける。

セシリアはビットを破壊されるなど想像していなかったのだろう。ビットのコンビネーションは4つで1つのような動きだった。

ならその1つを破壊されたら、ビットのコンビネーションは一瞬で瓦解する。

その証拠にセシリアのビットはさっきまでの精彩さを欠き、なんとも読み易い機動を描く。

一機・・・また一機と、ビットは斬墜され、やがてセシリアの従順な兵士は一機もいなくなった。

「さて、これであんたの兵士は全て墜ちた。もうそろそろ終幕といこうか」

これでもう俺を阻む存在はいなくなった。

それにISの機動も充分に馴れた。  
もう決めてもいい頃だろう。

俺はセシリアを間合いに捉えるため、全部のスラスターを駆動させる。

「残念でしたわね！

ブルーティアーズ

自立機動兵器は四機だけではなくてよ！！」

が、セシリアはそれを待ち望んでいたかのような表情をし、スカートのような部位からミサイルが顔を覗かせた。

これが最後の切り札という訳か！ 面白い！！

「はっつ！！！」

筋肉の脱力と緊張を一息に繰り返す事二度。

そこから繰り出される斬撃も二つ。

二発あったミサイルは四発に増え、俺の遙か後方には爆発した。

「これであんたの手札はそのライフルだけだ！

好い加減に墜とさせてもらうぜ！！」

「くっ．．．こんな．．．．．」

今度こそ決めるため、俺はセシリアの頭上を陣取り、頭から一直線

に刀を振り下ろす。

セシリアはライフルを盾にして攻撃を防ぎ、流れに逆らう事なく下に落ちていく。

「もう一発いくぞ!!」

「きゃあああっ!!」

だが、既に俺を止める兵士達はいない。

俺はセシリアの行く先へ急加速して赴き、今度は真逆に下から一直線に斬り上げる。

さきの一撃の反動も加わって、今度は明確な手応えを感じた。

「ま、だまだですわ・・・っ!」

先程の一撃をまともに受けたというのに、セシリアは諦めずにライフルの銃口を俺に突きつけて発砲する。

だがその研ぎ澄まされた狙撃は見る影もなく、半歩ずれただけで容易に躲す事ができた。

セシリアの今の状態はまさに満身創痍。

所々IISの装甲は削げ、砕け、誰が見ても敗北は必須。だというのに、その眼には一切の諦めの色はなかった。

「セシリア・・・もういいだろ。」

この勝負は誰がどう見ても勝敗は明らかだ。

どう頑張っても俺には勝てない。  
好い加減、降参してもいいんじゃないのか？」

俺もこれ以上、ボロボロの女の子を斬るのは気が引ける。  
セシリアに降参するよう説得するが、彼女は頑なに首を縦に振ろうとしなかった。

「残念ですが．．．それは、お断りしますわ．．．  
はあ．．．はあ．．．この決闘には、わたくしの誇りと、わたくしが積み重ねてきた時間を賭けていますの．．．  
確かにわたくしは貴方に勝てません。」

ですが、絶対に自分から負けを宣言するつもりはありません。  
もしここで自ら降参してしまえば、わたくしは自身の賭けたものを自身の手によつて棄てることになります。  
それだけは、断じて許せません．．．っ！」

「っ．．．．．！？」

なんて強い瞳だろうか．．．  
セシリアは、それだけの想いを込めてこの決闘に臨んでいたんだ。  
だというのに、俺は．．．俺は．．．．．

「隙、だらけですわよ！」

満身創痍の状態から撃ち出される砲撃。

狙いも甘く、撃つのも遅い。

おそらく躲すのにそれ程の労を費やさないだろう。

その砲撃を眼前にして俺は、鴉羽を広げ．．．．．

甘んじて、その砲撃を受けた．．．．．

s i d e   o u t

アリーナは、一瞬にして静寂に包まれた。

戦いを有利に進めていた黒羽が、セシリアの主要武器を全て撃破し、誰が見ても勝者は黒羽だと思っていた時、セシリアの放った砲撃が黒羽に命中した。

さっきの砲撃に当たる要素など一つたりとも存在してなかった。

なのに、黒羽は被弾した。観客達は一斉にして言葉を失っていた。

「そんな．．．どうして．．．．．」

そんな中で一番驚いていたのが、撃った本人であるセシリアだった。躲されると思っていた。

今まで全ての攻撃を紙一重で躲し、その攻撃の波を乗り越えて自分

に反撃をしていたから。

でも、それでもいい思っていた。

あそこまで完璧に、非の打ち所がない躲され方をすれば、別に躲されてもよかった。

でも当たった。

彼女の中に疑問の念が膨れ上がる。

その時、被弾によって生じた煙が次第に晴れてゆき、黒羽の姿を映し出した。

その姿は自分と同じボロボロ。

美しかった黒は今を見る影もない。

「どうして．．．どうして当たったんですの!?

貴方なら、造作もなく躲せれた筈でしょう!!

なのに、どうして．．．」

気が付けばセシリアは叫んでいた。

最早、自分には黒羽に攻撃を当てる事など出来ないと悟っていた。

それが当たるという事は、黒羽自らが当たった事に他ならない。

なら、どうして自ら当たった? もしや手心を加えられた?

そう思った彼女は憤りの表情を見せた。

黒羽は、傷付いた身体を気にも留めず、セシリアに向き直り、そして．．．

「  
申し訳なかった」

ただ一言、そう言って頭を下げた。

セシリアは訳が分からずポカンとしていた。

「セシリア．．君がそれ程の想いを込めて、それ程の想いを賭けて決闘に臨んでいたなんて．．

それなのに俺は、この決闘をＩＳの試験運転と軽んじていた。

君の想いを穢してしまった。

この決闘を穢してしまった。

これはその当然の報いだ。本当に申し訳なかった」

「．．．．．」

黒羽の言葉を聞いて、今度こそセシリアは絶句した。

この人は何ら自分に手心を加えていなかった。

ただ、自分の過ちを戒めるため、そのケジメをつけるために選んだ行動だったのだ。

「頭を上げてくださいな、真鴉さん。

わたくしはそんな事気にしておりませんわ。

それよりも、これでワザと負けられた方が わたくしとしては不満ですわ」

「そんな事は絶対にしないさ。

手心を加えてワザと負けるなんて、それこそ死すべき恥だ。

この決闘を、君の想いをこれ以上穢さないために、俺も本気を出すでしょう」



瞬間、周りの空間は様相を変えた。

黒羽を中心にして空間は『ギチギチ』と音をたてるように引き締まり、その引き締まった空間はやがて形を帯び、まるで一本の日本刀のようなモノが生まれた。

対峙するセシリアも含め、数人の人間が黒羽の開放された威圧感を感じて僅かに動いた。

ある者は黒羽の衰える事ない威圧感を感じて微笑を浮かべ、ある者は尊敬の念を送り、ある者は生唾を飲み込み冷や汗をかきながら畏怖の念を抱く。

「っ．．．．．成る程、これが貴方の本気ですか．．．  
貴方にも守りたいもの、賭けるものがあつて？」

「ああ、こんな俺を師匠と仰いでくれる人達がいるんでな。  
その人達の前では負ける事は絶対に許されない。

俺はその人達の想いを背に、誇りを賭ける。

俺が賭ける誇りは最強の座だ」

ゆつくりと、鴉羽がその黒い羽を広げる。

鴉羽には主を守る堅牢な盾の役割を持っているが、もう一つの顔としてブースターの一面を持っている。

防御を一切捨てて、ただ全てを相手を斬る事に費やされた鴉羽のもう一つの姿。

それが意味するのは、必ず敵を倒すという黒羽の絶対たる不退転の誓い。

「俺たちのシールドエネルギーは殆んど五分。

互いに長く戦えそうにない。  
なら、勝敗を決するのは想いの強さだ。  
想いの強さ。競うとしよう………っ」

瞬間、黒羽の姿が消えた。

だがセシリアに突き付けられる鋭い刃物は未だ顕在。  
黒羽は消えたんじゃない。ただ、目視不可能な疾さでセシリアの背後に回っただけだ。

「シッ!」

「っ……何時の間に……!」

辛うじて捉えてくれたハイパーセンサーのおかげで直撃を免れたセシリアは黒羽の攻撃を防ぐ。

吹き飛ばされつつも、セシリアはライフルの銃口を黒羽がいた場所に向ける。

だが、既に黒羽はいなかった。

ハイパーセンサーをフル稼働させて、黒羽のいる場所を探る。

黒羽が刀を振り下ろす瞬間と、セシリアが黒羽のいる場所を捉えたのはほぼ同じだった。

「せやっつ!」

「きゃあああっ!」

一息の内に斬撃を二度繰り返す、二閃を繰り返す黒羽。  
今迄なんとか防いでいたセシリアだったが、流石に二閃だけは防ぎ  
きれず、一撃目でライフルを弾かれ、二撃目で直撃した。

「このまま斬り続けるっ!!」

それだけでは黒羽は止まらない。  
鴉羽と全身のスラスタ、そして縮地などの武術の高等歩法を駆使  
した瞬間高速近接戦を展開する。  
その姿を見る事は叶わず、黒いナニかが動いてるようにしか見えな  
かった。

聞こえるのは甲高い金属音だけ。

正面を斬られたかと思えば、次に背後、それに左右。

斬られた回数など数える事は出来ず、まるで嵐のように黒い鎌鼬は  
セシリアを斬り刻む。

やがて、黒羽の放った一撃がセシリアのシールドを斬り裂き、絶対  
防御が発動する。

風前の灯だったシールドエネルギーは、絶対防御の発動によってそ  
の残量を0にする。

セシリアはゆっくりと、力なく地面に墜ちていく。

「……俺の勝ちみたいだな。セシリア」

墜ちていく中、黒羽は鴉羽でセシリアを受け止め、まるで揺り籠の  
ように包み込む。

黒い天使のような黒羽と、それに包まれているセシリアの姿は、まるで神話の一場面のような絵だった。

「そう、みたいですわね．．．  
わたくしの負けですわ．．．．．」

黒羽に包まれたセシリアは、安心したように穏やかな表情を浮かべる。

自分が負けた事に関しては一切の悔いはないみたいだ。

「すみません、真鴉さん．．．少し、眠くなってきましたわ．．．  
．．．」

「ああ、ゆっくり休みな．．．．．」

全力以上の力を使って精力を使い果たしたのだろう。

今迄の疲れが一気に押し寄せてきたのか、セシリアは眠たそうに目を細める。

黒羽は笑みを浮かべてセシリアの言葉を了承した。

それを聞いて安心したセシリアは、目を閉じて穏やかな寝息をたてる。

これにて、黒羽とセシリアの決闘は黒羽の勝利で終わった。

だが、最後のこの一場面が後にちよつとした騒動を引き起こすのを、二人はまだ知らないでいた。

## 決闘（後書き）

セシリアとの決闘はこれにて終了。

本当は本編でもお馴染みのフラグ建築をしたかったんですが、長くなりすぎたのでここで一旦切り上げます。

次回は一夏VSセシリア

お楽しみに〜（＾Ｏ＾）／

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7323x/>

---

最後の鴉は何を思って飛ぶ...

2012年1月12日20時59分発行